

# 埋蔵文化財調査報告書 35

千音寺遺跡  
(第1・2次)

2000

名古屋市教育委員会

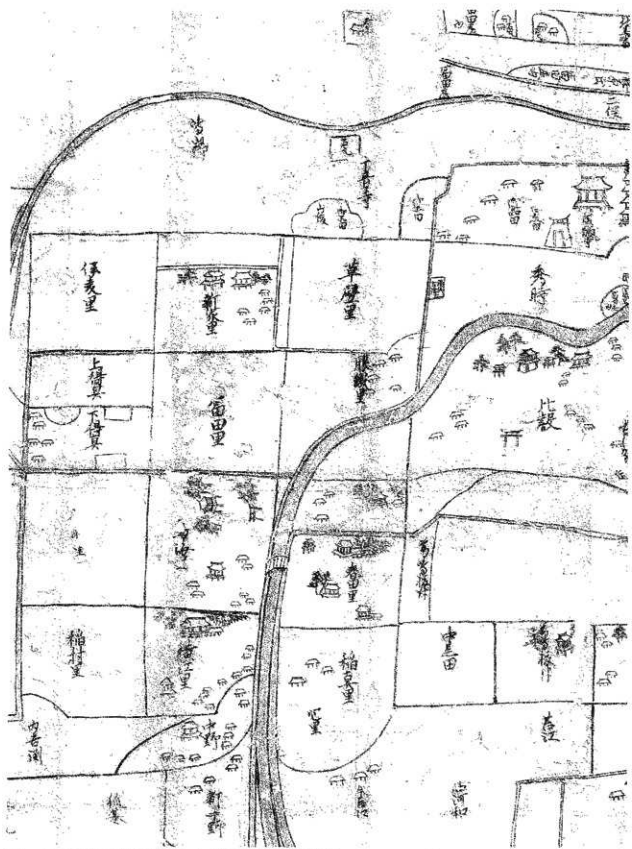


图1 「円覺寺領尾張國雷田荘始圖。(部分) (円覺寺所藏原圖 100.5cm×89.7cm)  
 (『新修名古屋史 第二卷 付圖。より)

## ■例言

- 1 本書は、名古屋市中川区高田町大字千音寺に所在する千音寺遺跡の第1・2次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、第1次調査を平成10年11月9日から平成11年3月19日まで、第2次調査を平成11年5月17日から平成11年12月24日まで実施した。
- 3 発掘調査は、市営住宅の改築に伴い、名古屋市建築局の依頼を受けて、名古屋市教育委員会文化財保護室が調整して、見晴台考古資料館の山田弘一、野口泰子が担当して実施した。
- 4 本書の水準高は、東京湾平均海面 (T. P.) を、方位は、国土座標第Ⅶ系による座標北を使用している。なお、名古屋港基準海面 (N. P.) は、東京湾平均海面 (T. P.) +1.4119 m である。
- 5 出土遺物、図面記録等については、見晴台考古資料館が保管している。
- 6 本書は、山田と野口が執筆した。さらに、自然科学分析については、新山雅広・鈴木 茂 (株式会社パレオ・ラボ) による結果を掲載した。遺物整理・図版作成等について、稲田望子・笹岡卓也・佐々木佳子・山本雅代の協力を得た。
- 7 本書の作成にあたっては、以下の方々にご指導を賜った。  
赤羽一郎 (愛知県教育委員会)・尾野善裕 (京都国立博物館)・中野晴久 (常滑市歴史民俗資料館)

## ■目次

第I章	はじめに	1
	(1) 位置と環境	1
	(2) 周辺遺跡	2
	(3) 千音寺と富田荘	4
	(4) 調査地点と発掘区	7
	(5) 遺物について	7
第II章	第1次調査	9
	(1) A区の遺構	9
	(2) A区の遺物	16
	(3) A区のまとめ	19
	(4) B区の遺構	24
	(5) B区の遺物	34
	(6) B区のまとめ	36
第III章	第2次調査	46
	(1) C区の遺構	47
	(2) C区の遺物	47
	(3) C区のまとめ	48
	(4) D区の遺構	52
	(5) D区の遺物	56
	(6) D区のまとめ	57
	(7) E区の遺構	59
	(8) E区の遺物	68
	(9) E区のまとめ	70
	(10) F区の遺構	76
	(11) F区の遺物	81
	(12) F区のまとめ	82
第IV章	おわりに	83
	主な遺構一覧表	91
	主な遺物一覧表	95
	千音寺遺跡の花粉化石群集	99
	千音寺遺跡のプラント・オパール	107
	写真図版	114

## 第1章 はじめに

## (1) 位置と環境

名古屋市の地形は、大きく東部の丘陵地、中央部の台地、西部の低地に分けられる。西部の低地は、木曾川・長良川・揖斐川・庄内川などの河川が運んできた堆積物で形成された沖積平野（沖積低地）である。沖積平野の地表面を構成する地層は沖積層と呼ばれ、礫・砂・シルト・粘土・泥炭などからなっている。平野の臨海部には三角州の発達が認められ、平野中央部には氾濫原が、上流側の地域には扇状地あるいは扇状地性の低地が分布する。扇状地の先端から三角州地帯にかけては、自然堤防が発達している。自然堤防は、河川によって運ばれてきた砂や粘土が堆積して形成された微高地で、自然堤防以外の標高の低い部分は、後背湿地と呼ばれる低湿地となっている(図1)。この自然堤防付近に遺跡が分布している。

千音寺遺跡は庄内川下流域に形成された三角州および自然堤防に位置している。現在の庄内川は、海部郡大治町の東側付近から南流しているが、古代から中世の旧庄内川の流れは、幾度も氾濫している。その分流が、現在の戸田川や小切戸川付近などを流れていたと思われる。また、大治町付近から西流する分流は、遺跡の北側付近を流れ、海部郡七宝町付近で南流していたと思われる。遺跡の範囲は、東西約600m、南北約1,000mに存在すると推定され、畑地等での分布調査の結果から須恵器や山茶碗等の遺物が採集されている。

千音寺遺跡の所在する富田町は市の南西部に位置し、海部郡大治町・七宝町・蟹江町に隣接する。富田町は、明治39年、万須田・赤星・戸田・豊治の4カ村が合併し海東郡富田村となり、昭和19年町制施行、同30年名古屋市中区に編入された。千音寺は富田町の北西端にあり、旧名は赤星村、現在も所々に水田の残る住宅地域である。千音寺の名は、『地名考』に「千音寺という寺はなしされ共地名は寺院に出たり、此村旧名を赤星村といひたるにや猶たづねべし」とあり、村内の行雲寺は、往昔、千手観音寺と称していたのでそれを略し、村名にしたとの説がある(図2)。

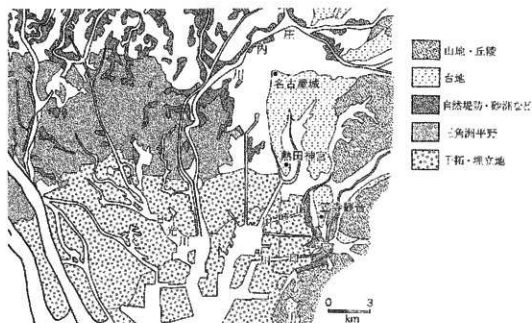


図2 地形図（『新修名古屋市史』 図11 尾張平野の地形図より）

## (2) 周辺遺跡

千音寺遺跡の周囲に周知の遺跡はないが、南方には戸田A遺跡、戸田B遺跡、伏屋遺跡、包里遺跡などの遺物散布地と戸田城跡・前田城跡・助光城跡・江松城跡・下之一色城跡・東起城跡がある。いずれも調査を行ったことがなく内容は不明であるが、散布地からは、主に平安時代から室町時代の灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸などが採集されている。城跡は戦国時代以降の築城であり、古代以前の海岸線が想像される地域で、千音寺遺跡を含め、人の痕跡が残るようになるのは平安時代からであろう。一方、北方には、清洲町土田遺跡、甚目寺町森南遺跡・阿弥陀寺遺跡・大洞遺跡・清林寺遺跡などがある。土田遺跡は、古墳時代に埴塚・古墳がつくられ、12世紀から14世紀代まで継続する集落で、井戸をとまう建物跡や溝で区画された屋敷地、土坑墓群、道などが報告されている(註1)。森南遺跡は、弥生時代および13世紀後半から15世紀後半代の集落である。屋敷を区画した溝、井戸、道、村落の外枠の溝などが検出されている(註2)。阿弥陀寺遺跡は、弥生時代の環壕集落および鎌倉・室町時代の集落で、鎌倉・室町時代では、屋敷地や方形土坑の集散する地点、南北・東西方向を軸方位とする溝が検出されている(註3)。大洞遺跡は、弥生時代および古墳時代～鎌倉時代にかけての集落を主体とする遺跡である(註4)。清林寺遺跡は、7世紀後半～10世紀の寺院跡、13～14世紀の井戸・溝などが検出されている(註5)。さらに東北方にある朝日西遺跡では、11世紀から12世紀の井戸や土坑、12世紀後半から13世紀後半の屋敷地を区画する溝、14世紀から15世紀の屋敷地が報告されている(註6)。付近には、清洲城跡や弥生時代の代表的な遺跡である朝日遺跡などが広がっている。また、庄内川の西岸(中村区)には、岩塚1・2・3号墳、室町(戦国)時代の城跡などがある。後述する「富田荘絵図」に萱津宿と記されている萱津は、庄内川と五条川の合流付近、五条川下流右岸にあり、鎌倉・室町時代、京から尾張にむく交通上の要衝であった。「吾妻鏡」文治二年(1186)四月一日条に「北条四郎主出京之後、今日善兵衛園萱津宿」と記され、鎌倉時代から知られた宿歌である。甚目寺は尾張四観音の一つで、文永元年の縁起によれば、推古天皇五年(597)に甚目庵麻呂(はだめたつまる)という漁師が網に拾い上げた観音像を安置したことに始まるという。白鳳期の瓦が出土し、南大門・東門・三重塔などが国指定重要文化財である。その他、甚目寺町内には古墳から中世の散布地や中世の塚などがある。

(註1) 1997 『新修名古屋市史 第8巻 自然編』 名古屋市

1994 海津正倫 『沖積低地の古墳境』 古今書院

(註2) 1956 『富田町史』 富田町史編纂委員会

1970 『尾張地名考』(復刻版) 愛知県郷土資料刊行会

1988 横井 薫 『明治・大正・昭和 千音寺民俗誌』

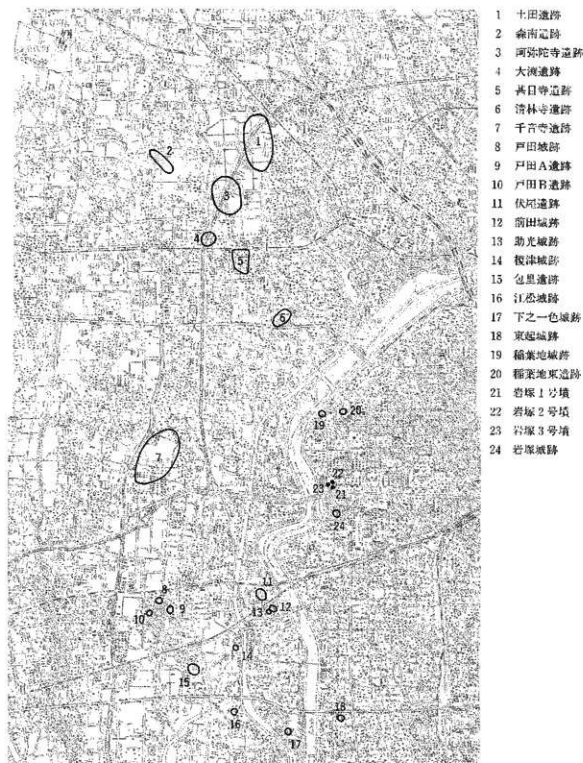
(註3) 1991 『土田遺跡II』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

(註4) 1990 『森南遺跡発掘調査報告書』 甚目寺町文化財調査報告書II 愛知県海部郡甚目寺町教育委員会

(註5) 1988 『大洞遺跡 阿弥陀寺遺跡』 愛知県埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

(註6) 1983 『甚目寺町文化財調査報告I 清林寺遺跡』 甚目寺町教育委員会

(註7) 1992 『朝日西遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター



- 1 十田遺跡
- 2 森南電跡
- 3 阿弥陀寺遺跡
- 4 大洞遺跡
- 5 善日寺遺跡
- 6 清林寺遺跡
- 7 千吉寺遺跡
- 8 戸田城跡
- 9 戸田A遺跡
- 10 戸田B遺跡
- 11 伏見遺跡
- 12 前田城跡
- 13 助光城跡
- 14 榎津城跡
- 15 包黒遺跡
- 16 江忍城跡
- 17 下之一色城跡
- 18 東越城跡
- 19 稲葉地城跡
- 20 稲葉地東遺跡
- 21 岩塚1号墳
- 22 岩塚2号墳
- 23 岩塚3号墳
- 24 岩塚城跡

図3 周辺遺跡分布図 (国土院発行 1:50,000 名古屋北部・名古屋南部)

## (3) 千音寺と富田荘

千音寺の地名は、嘉暦二年(1327)頃に作成された『尾張国富田荘絵図』(以下絵図)の富田荘北側にその名が記載されている。富田荘は、寛治年間(1087~1093)に成立し、康和5年(1103)、右大臣藤原忠実の家領として文獻にあり、以後14世紀末まで近衛家領であった。荘園の管理にあたる荘官には、平季政が下司職に任ぜられ、鎌倉幕府成立後は、北条氏が地頭職として掌握し、弘安6年(1283)には、執権北条時宗が鎌倉の円覚寺に寄進し、円覚寺領となっている。南北朝時代にはいると、守護土岐氏とその一族による押領という政治情勢の変化から、応永3年(1396)所領を交換して、円覚寺は富田荘の経営を断念している。

絵図に描かれている富田荘の位置については、現存の字界を参考に図4のように推定を試みた。

千音寺の一带は、絵図にある条里や建物などの内容が記載されていないことから、富田荘の荘外にあたると思われる。しかし、条里制が施行されていた可能性は、現在の字地名「上之坪」等や字割の在り様などから推測されている<sup>(註1)</sup>。絵図には「嶋山郷」とあり、他に「石丸」「御品田」「御品田山後」の記載がされている。なお、明治17年頃の「地籍図」の地割を参考にすれば、「御品田山後」の位置が、現在の赤星小学校の敷地を含めた一帯と思われ、「絵図」の描き方に類似した形が水田の土地割として記載されている。名古屋市遺跡分布図(中区)は、富田荘の条里に関連する内容を遺跡として記載していないが、富田荘内にある遺跡を、絵図の推定位置に対応させると、戸田A遺跡が「稻真里」、戸田B遺跡が「横江里」、包里遺跡が「今若江」の地内にほぼ位置しているように思われる。また、伏屋遺跡は、「助光」の北側付近に位置する。

また、条里については、上田遺跡や阿弥陀寺遺跡の調査結果から、海部郡一帯に古代の条里制が施行され、本遺跡を含む地域にも、古代の条里制が施行されていた可能性が推測されている。富田荘の地割の南北方向は、土地利用の制約によるものか北東に約5度傾き、海部郡一帯の条里方向と違いがある<sup>(註2)</sup>。そのため、海部郡一帯の条里との連続性がなく施行時期が遅れて施行されたとする説と、施行された条里が洪水等により中断した後には再開されたとする説が考えられているが、基本的には後者の見解が受け入れられている<sup>(註3)</sup>。

(註1) 1986 上村孝久子「絵図にみる富田荘の開発と形成」『研究記要(第21号)』名古屋短期大学 には、「田庄内川以南地域にはかつて条里制が施行されていたが、一旦河川の氾濫により、耕作は中断し荒廃した。その後十世紀以降十一世紀末以前、おそらく藤原忠実の国司在任中、国内の荒廃公田の再開発が国司の指導のもとに大規模に実施され、旧条里遺構の基幹部分の復原がされたが、坪内の地割の再現までは原に行われなかった。寛治年間、そのうち一二ヶ里以南・以東の地域が、現地の開発者との結びつきにより富田荘として立荘されたが「蟹江」地域はなお一世紀近く国領として維持された。……………この荘の西至が、東および南に自然境界である河海を基本としているのに対して、北および西には人為的な条里的境界が深み入れられている点も、純一的な再開後の立荘と考えることにより、理解できる。」とあり、調査区付近も含めた再開発が推測されている。

(註2) 1961 小野時二「条里制の歴史地理学的研究」には、「富田荘は条里施行のための南北基準線を富田川(戸田川)にとり、その水路に沿って12ヶ里とその周辺の条里地割を決定した。」とある。

(註3) 1997 上村孝久子「荘園公領制の形成と在地勢力」『新修名古屋史 第一巻』第七章 第四節 名古屋市



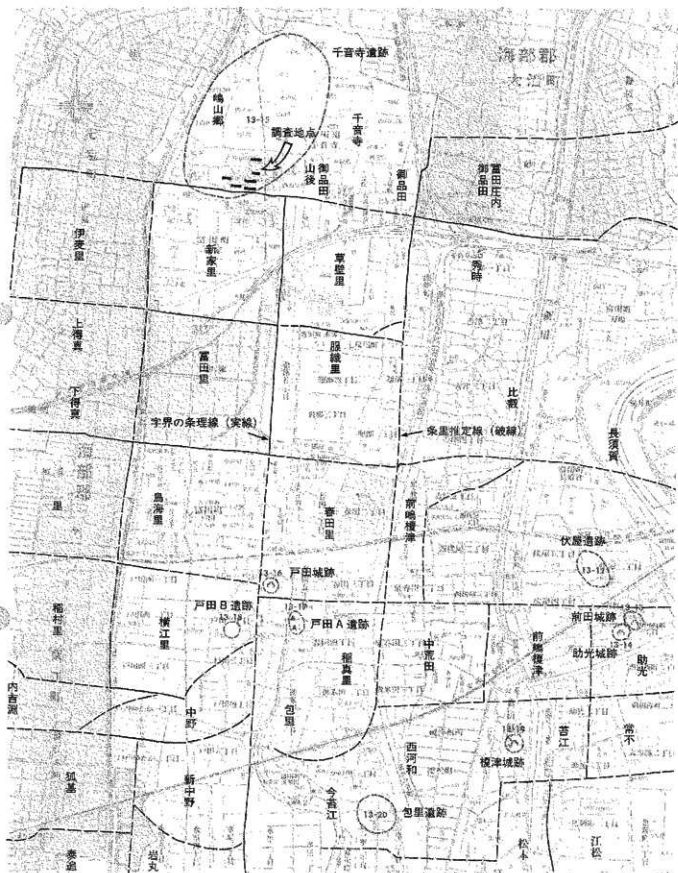


図4 「富田庄」推定範囲と遺跡（名古屋市遺跡分布図「中川区」より）



図6 町並地区の町並区

#### (4) 調査地点と発掘区

今回の調査地点は、絵図「新家里」の東北側の上、「御品田山後」より西側にあたる付近と推測される。現在の小字名は、「西川岸塚」と「基目寺田」となっている。

発掘区は、市営住宅建設予定地の6箇所をA～F区と呼称し、A・B区を第1次調査、C～D区を第2次調査として実施した。グリッドの設定方法は、国土座標点( $X = -93,280$ ,  $Y = -32,250$ )を北東原点とする5m単位とし、南方向へアルファベット大小文字を、西方向へY座標の下3桁を付した。A区東側では、D365・d365が、B区北東ではj370・K370が遺物採集のグリッド名となる。また、遺構名は、グリッドごとの連番で呼称を原則にして、D370グリッドで検出した溝の場合、SDD37001とした。

#### (5) 遺物について

遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、白瓷系の中世陶器(以後、山茶碗)、施釉陶器、焼き締め陶器、輸入磁器などがある。山茶碗には、碗、小碗、小皿、鉢があり、猿投・瀬戸・美濃・常滑・湿美窯の

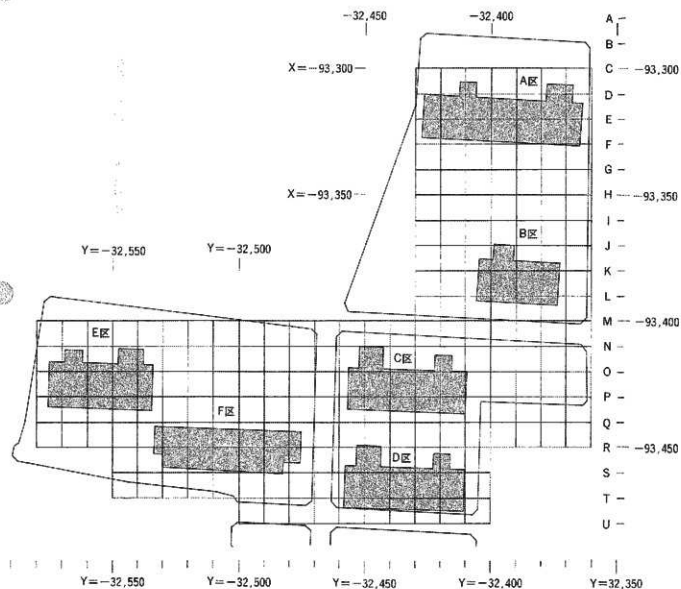


図6 グリッド設定図

製品がある。土師器は、皿、鍋・釜の調理具などである。施釉陶器には、古瀬戸、大窯、近世の瀬戸・美濃製品があり、焼き締め陶器は、常滑・瀬美製品がある。その他、土釜、陶丸、山茶碗などを再利用した加工円盤、肥前系の磁器などがある。表現の簡素化のため土師器鍋（釜）・山茶碗の種類と器種について若干の分類を行う。

### 土師器

体部まで復元できる資料はなく、口縁部の形態でみると、

鍋A—「伊勢型鍋」で、口縁端部を内側に折り返すが、折り返しが短いものや、折り返しではなく、端部を厚くしただけのもの

鍋B—「伊勢型鍋」で、口縁端部を内側に長く折り返し内湾させるもの

羽釜一鈎は短くやや上方を向き、口縁が内湾するもの

### 山茶碗

胎土からは、胎土①——砂粒を多く含む胎土、長石の噴出しなどもみられるもの——主な産地としては、辰投窯・知多窯・瀬戸窯（南部）がある＝「尾張系山茶碗」

胎土②——均質な胎土を持ち、器壁が比較的薄手のもの——主な産地としては、美濃窯・瀬戸窯（北部）がある＝「東濃系山茶碗」

碗A—胎土①で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部でやや外反し、やや器高の低いもの、

碗B—胎土①で、体部が直線的に立ち上がり、立ち上がり部分に緩や浅い凹みがあるもの、

碗C—胎土①で、体部が直線的に立ち上がり、無高台のもの

碗D—胎土②で、底径が小さく低い高台がつくもの、

碗E—胎土②で、無高台のもの

小皿A—胎土①で、底径が比較的小さく、器高はやや深く、底部の突出がみられるもの。

小皿B—胎土①で、底部が平坦で底径が大きく、器高の浅いものに分けられる。

小皿C—胎土②で、底径が大きく、器高のきわめて浅いタイプである。

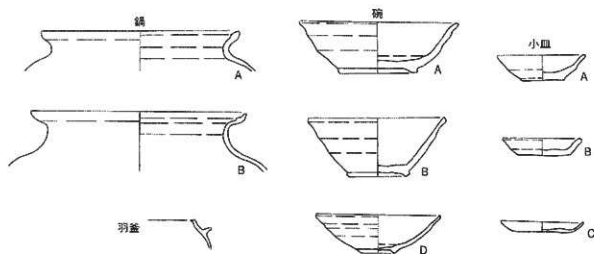


図7 分類図

## 第II章 第1次調査

発掘調査は、A区(約1,200m<sup>2</sup>)とB区(約600m<sup>2</sup>)で、平成10年11月9日から平成11年3月19日まで、実施した。

宅地造成された約0.8~1mの盛土を掘り下げると、近年まで使用された水田や畑地の跡が検出された。水田と畑地の比高差は約30~40cmある。水田は、20~25cmの濃灰色土で、その下層に数cmの黄褐色土(床土)があり、二毛作の畝跡が残る箇所も発見されている。水田の床土面や床土面より5~10cm下の土層面で、遺構が検出された。畑地は、水田化に適さない微高地にその周辺の土を積み上げて、周辺を水田化したことに伴い、方形の高台となっていた。畑地には畝の溝などが残り、上層から近世以降の陶磁器が出土した。畑地の中層の灰色土や淡灰茶褐色土などからも山茶碗が出土し、50cm程掘り下げた黄褐色土層面などで、遺構が検出されている。畑地は、水回りの利便から、周囲の土を積み上げて拡張する事例もあり、通称「島畑」と呼ばれているため、本書では、発見された畑地形状を「島畑」と呼称することにした。

A区では、西側から中央付近に島畑が3箇所あり、中央北側の島畑の下層から上坑や穴などが検出されている。東側の水田面の下から、溝などが検出されている。

B区では、西側に島畑が2箇所あり、島畑の下層から柱穴列などが検出されている。水田の下から、東側に3条の溝、北側に1条の溝、井戸や上坑が検出されている。これら遺構の配置から、溝で区画される12世紀後半頃の旱敷地が存在したと考えられる。主な遺構が検出された面は、標高+50cm程で、淡黄褐色土層面などである。この層位の下は、青灰色砂層で、湧き水が出る。

遺物は、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、小皿、常滑・渚美産の壺(甕)、古瀬戸から近世の施釉陶器、白磁・青磁、土鍾などが出土している。

### (1) A区の遺構

島畑A-1：発掘区西端にあり、東西辺上端の長さが約9m、南北辺の検出長さが約10.5mで、発掘区外の南に広がる長方形の畑地である。長軸方位は、N-5°-Eを測る。中心部の土は、褐色土などが不整形な楕円形状に広がり、その周辺の上は灰色土が長方形に積み上げられる。東西方向に、幅約50~60cm、長さ約2~4mの溝状遺構が多数あり、畝を作った痕跡がみられる。水田床土面との比高差は約50cmあり、周辺の水田床土の約5~10cm(標高-50cm程)面まで畑地を掘り下げたが、畑地の下から遺構は検出されていない。積み上げられた灰色土や淡灰褐色土上面からは、近世や近代遺物が出土しているが、下層に至るにつれ、色調は、褐色度が濃くなり、山茶碗片が含まれていた。

島畑A-2：発掘区中央南側にあり、東西辺上端の長さが約11m、南北辺の検出長さが約12mで、発掘区外の南に広がる長方形の畑地である。長軸方位は、N-5°-Eを測る。中心部の土は、褐色土などが方形に広がり、その周辺に灰色土が積み上げられる。遺物は、島畑A-1と同様な状態で出土した。水田面との比高差は約30cmあり、畑地を標高-50cm程まで掘り下げると、上坑や溝などが検出された。島畑A-1とは約7m離れ、間には水田となっているが、水田面の下でも淡灰茶褐色土層に類似する土層が北方向に不整形に広がって確認された。そのため、不連続な微高地が、この付近や島畑A-3付近の北東方向にも複数存在していたと推定された。





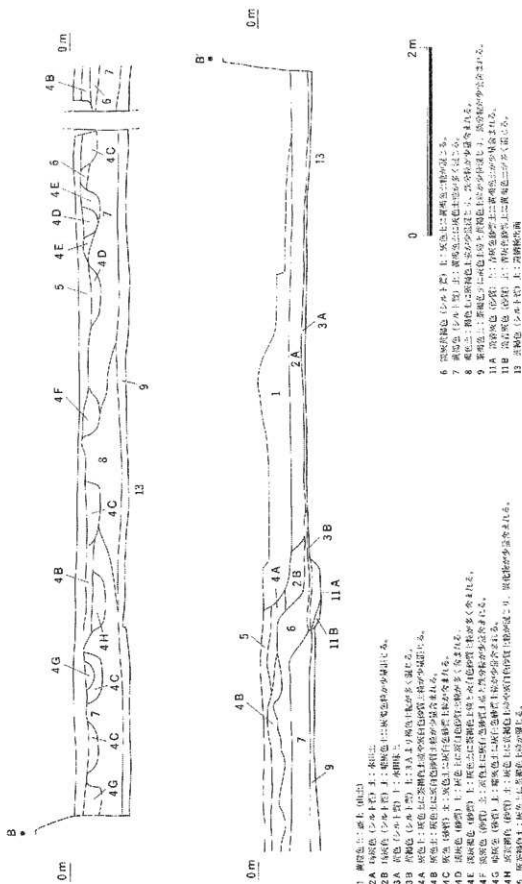
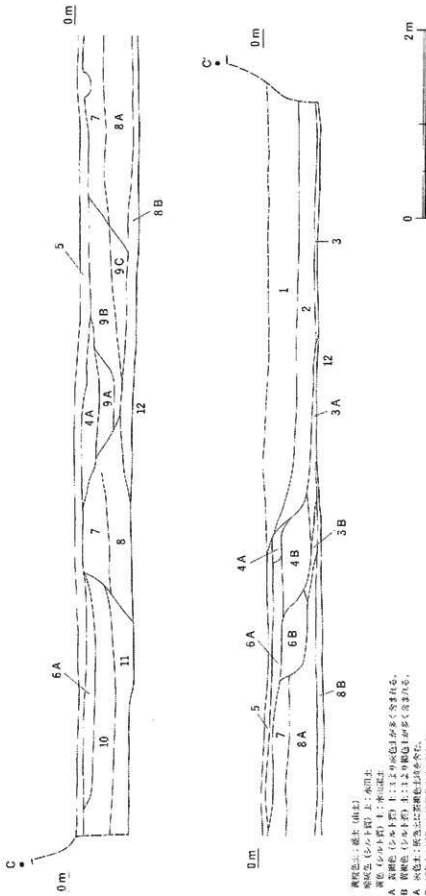


図10 A-A' (B-B') 土層断面図





- 1 黄砂土
- 2 黄砂土 (シルト層) 上; 赤土
- 3 赤土 (シルト層) 上; 赤土
- 3A 黄砂土 (シルト層) 上; 赤土
- 3B 黄砂土 (シルト層) 上; 赤土
- 4A 赤土; 黄砂土; 赤土
- 4B 赤土; 黄砂土; 赤土
- 5 黄砂土; 赤土
- 6A 黄砂土; 赤土
- 6B 黄砂土; 赤土
- 7 黄砂土; 赤土
- 8A 黄砂土; 赤土
- 8B 黄砂土; 赤土

- 9A 黄砂土; 赤土
- 9B 黄砂土; 赤土
- 9C 黄砂土; 赤土
- 10 黄砂土; 赤土
- 11 黄砂土; 赤土
- 12 黄砂土; 赤土

図 11 A区 (C-C) 土層断面図

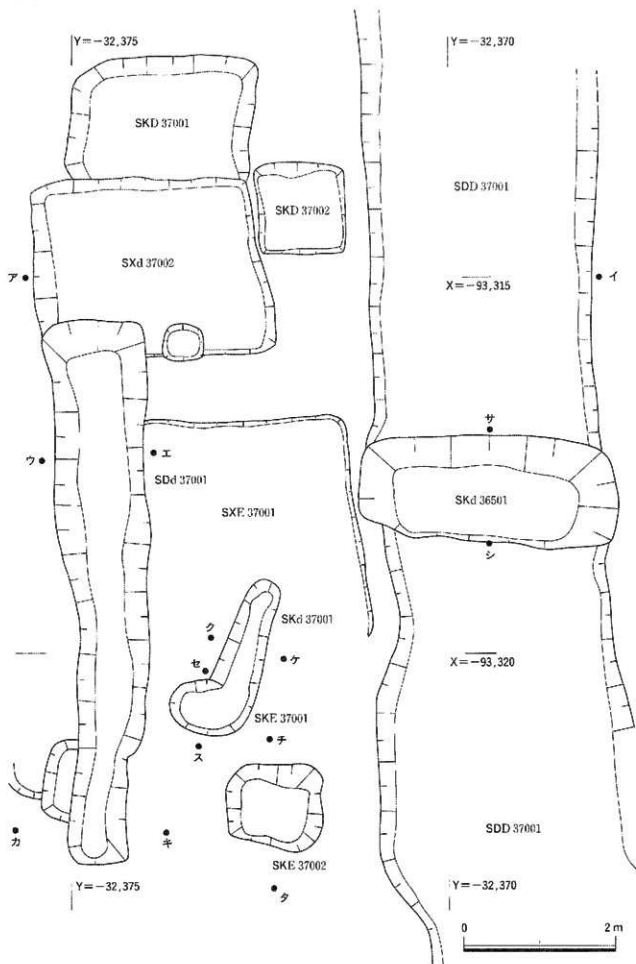
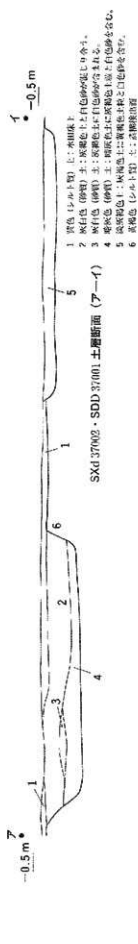
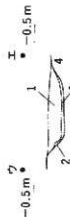


図12 A区東側遺構図



SDD 37002・SDD 37001 土層断面 (ア-イ)

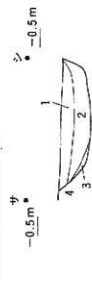
SDd 37001 土層断面 (ウ-エ) (1:50)



SKd 37001 土層断面 (ク-ケ)



SKd 36501 土層断面 (サ-シ)



SDD 37001 土層断面 (カ-キ)



SKd 37001 土層断面 (ス-セ)



SKF 37002 土層断面 (タ-チ)

図 13 A 区東側遺構土層断面図

島畑 A-3: 発掘区中央北側にあり、東西辺の長さが約 16 m、南北辺の検出長さが約 3 m で、発掘区外の北に広がる長方形の畑地である。中心部に、淡灰茶褐色土が残存し、その周辺に灰色土が積み上げられる。灰色土から山茶碗が出土している。周囲の水田床土との比高差は約 50 cm あり、畑上の淡灰茶褐色土などを掘り下げると、土坑が検出された。

SEE4001: 島畑 A-2 の下で検出した。長径約 2 m、短径約 1.85 m。未掘。木柱等は存在していないが、掘り方が直径約 2 m の円柱形状になり、約 1 m 掘り下げると湧水が著しいため、井戸の可能性が考えられる。

SDD37001: 発掘区の東端で南北方向に繋がり、北側幅約 3.1 m、南側幅約 3.5 m、深さ約 20 cm、検出長さ約 22.5 m の溝で、方位は、N-4° -W を測る。

SDd37001: 北側幅約 1.3 m、南側端付近幅 80 cm、深さ約 25 cm、長さ約 7 m の溝で、方位は、N-2° -W を測る。

SDd40003: 島畑 A-2 の下で検出した。幅約 50 cm、検出長さ約 4 m の溝。SKE40002 の東側に接しているが、切り合い関係は、明確にできなかった。方位は、N-83° -W を測る。

SDd38001: SDd38002・SDd38003・SDE38001・SDE37001・SDE37002・SDe37002: 島畑 A-2 の東側から SDd37001 付近までの水田床土付近で、幅約 20~35 cm、深さ約 3~5 cm の 6 本の溝が検出された。いずれの方位も N-90° -W を測る。検出の段階では、溝が跡切れる形状となっているが、連続して造作されたと考えられる。各溝の間隔には、ある程度の規則性がみられる。埋土は、水田土の暗灰色土に類似している。これら溝は、田起こし跡と推定される。

SKD38501: 島畑 A-3 の下で検出した。長径約 95 cm、短径約 90 cm、深さ約 15 cm のほぼ円形状土坑で、煤の付着した尾張系山茶碗 2 個が出土した。

SKD39006: 島畑 A-3 の下で検出した。長辺約 1.9 m、短辺約 1.3 m、深さ約 40 cm の長方形土坑で、長辺軸の方向は、N-85° -W を測る。尾張系山茶碗や小皿、白磁碗片などが出土した。

SKd40002: 島畑 A-2 の下で検出した。直径約 1.2 m、深さ約 60 cm の円形状土坑。

SXE37001: 発掘区東側の SDd37001 に重複する位置で検出し、推定長辺約 5 m、深さ約 10 cm の方形土坑遺構。

## (2) A 区の遺物

SKe12501: 須恵器、土師器、山茶碗、常滑製品などが出土している。土師器は伊勢型鍋の頸部である。1 は羽釜、12 世紀後半代と思われる。

SKD39006: 土師器、山茶碗、白磁、加工円盤などが出土している。特に尾張系山茶碗の破片が多くある。2・3 は、尾張系山茶碗で、2 は体部の立ち上がりが比較的丸く浅い、3 は底部がやや突出しており、碗 A と小皿 A である。4 は白磁碗底部、高台は細く高い、底部内面には劃文がみえる。鍔は、5 は口縁端部をやや厚くし、6 は口縁端部を内側に返し、厚みをもつもので鍋 A である。加工円盤 (7・8) は、山茶碗の高台部を加工している。出土遺物の時期は、12 世紀後半代と思われる。

SKD38501: 中央底付近から山茶碗 (9~11) が 3 点かたまって出土している。9 はほぼ完形である。他に、土師器の小片が出土している。碗はいずれも碗 B である。13 世紀代の土坑と思われる。

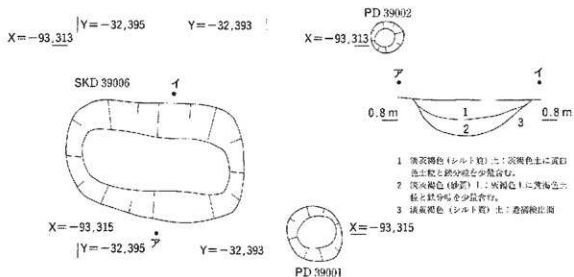


図 14 SKD 39006

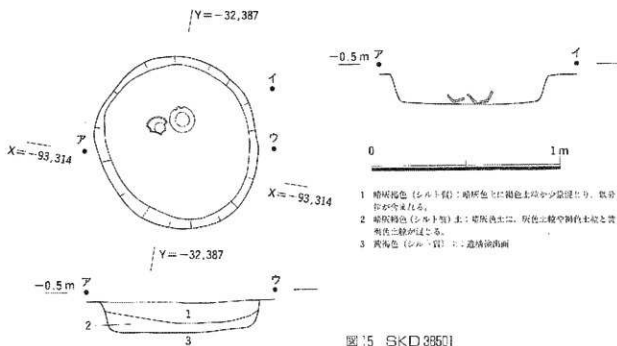
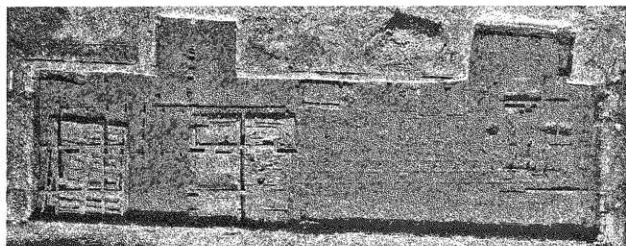


図 15 SKD 38501



A区全景

SKD38502：尾張系山茶碗と土師器片が出土している。

SKc37001：小皿B（12）が出土している。

SKD37001：尾張系山茶碗片が出土している。

SKD37002：土師器と尾張系山茶碗底部（13）が出土している。

SKd36501：尾張系・東濃系山茶碗、施釉陶器、いぶし瓦片が出土している。

SKd37001：尾張系山茶碗、焼き締め陶器片が出土している。

SKE37002：尾張系山茶碗、土師器片が出土している。

SDd37001：土師器、須恵器、尾張系山茶碗・小皿、常滑製品、土釜などが出土している。遺物は全体に散在しているが、14と18、19は、埋土上位にまとまってあった。山茶碗は碗B、小皿Bである。20は底部付近で出土した短頸甕である。胎土は粗い砂粒を多く含み、固く焼締り黒灰色を呈する。常滑産と思われる。直径1cm前後の土釘が2点ある。これらの遺物は13世紀代と思われるが、土師器鉢の口縁部(21)が1点ある。

SXd37002：土師器、須恵器、山茶碗、土釜、加工円盤などが出土している。24は瀬戸窯の碗Cである。26、27は小皿、26は瀬戸窯の小皿Bである。東濃系山茶碗の小片もある。28・29は土釜、28は欠損しているが、29は、直径が3.5cm、長さは5cmある。床土中からも同タイプの土釜が数点出土している。加工円盤（30～32）は尾張系山茶碗の高台部分を加工したものである。

SDd38002：尾張系山茶碗片と、縁種皿片が出土している。

SXE37001：土師器、尾張系山茶碗、東濃系山茶碗、常滑製品の小片が出土している。33～35は加工円盤で33は壺体部片、34と35は尾張系山茶碗の高台を加工している。

PD38001：尾張系山茶碗の高台部を利用した加工円盤（36）が出土している。

PD38501：土師器、尾張系山茶碗、常滑空甕（壺）の小片、小皿A（37）と加工円盤（38）が出土している。加工円盤は尾張系山茶碗の体部を加工している。

PD39001：尾張系山茶碗、鉢Aの小片が出土している。

SDe37001：土師器、尾張系山茶碗・小皿、東濃系山茶碗の小片が出土している。39は鉢Bである。

SKc41001：内耳鍋（40）が出土している。

SDD37001：土師器、灰釉陶器、山茶碗、常滑製品、加工円盤など中世陶器が出土しているが、いずれも小片である。尾張系山茶碗（42・43）は、碗Aと碗Bである。東濃系山茶碗は、図化していないが、底径が小さく、偏平な体部をもつもので大畑大洞一新型式に相当すると思われる。加工円盤は、45が常滑製品、46がいぶし瓦片を加工している。また、埋土の上層からは近世陶器や磁器なども出土している。47は19世紀代の練鉢である。出土遺物の年代幅は大きい。中～下層には近世遺物がないことから、14世紀代半ば以降埋没している。

SDE40501：土師器、山茶碗、陶丸（48）、加工円盤（49）、播鉢（50）などが出土している。山茶碗は、尾張系山茶碗と東濃系山茶碗があり、加工円盤は灰釉の碗高台部を加工している。

SDE37001：土師器、尾張系山茶碗、施釉陶器片が出土している。

島畑A-1：灰釉陶器、山茶碗（碗・小皿・鉢）、中世～近代陶磁器、土釜、加工円盤などが出土している。灰釉陶器は皿(51)で、高台は台形を呈している。52～54は尾張系山茶碗、53は碗B、55は小皿Cである。

56は鉢と思われる。57は白磁玉縁碗の口縁部、58は大窯第2段階の襷鉢である。59～62は近世陶器である。加工円盤は多く出土している。材質もいろいろで、63～66は山茶碗、67は常滑製品、他は施釉陶器である。73はSXE42007、74はSXE42004から出土、73は施釉陶器片、74は近世の水滲片である。

島畑 A-2：灰釉陶器、山茶碗、伊勢型鉢、加工円盤、中世～近代陶磁器が出土している。75の灰釉陶器は皿で、三日月高台である。76～79・81～84は尾張系山茶碗・小皿、79は碗C、胎土には黒色の斑点が多くみられ瀬戸窯と思われる。80は碗Dで高台はつぶれて低くなっている。81～83は小皿A、84は瀬戸窯の小皿B、85は鉢Aである。86の加工円盤は、肥前系と思われる磁器碗の口縁部を加工している。87はSXE40501から出土した長石釉の皿、88はSXE40001出土の加工円盤である。

SXd40501：土師器、山茶碗、施釉陶器、近世肥前系磁器片が出土している。

島畑 A-3：山茶碗、伊勢型鉢、土鉢、加工円盤などが出土している。中世～近代陶器も多少出土しているが、尾張系山茶碗が大部分を占める。また、凶化していないが、東濃系山茶碗も若干みられる。90・91は碗A、94は小皿B、95・96は小皿A、97は鉢Aである。加工円盤のうち、99～102は山茶碗高台部、103は常滑製品、104は染付皿を加工している。

水田・床土：須恵器、土師器、尾張系山茶碗、東濃系山茶碗、常滑製品、瓦、中世～近代陶磁器、土鉢等の小片が出土している。須恵器は、杯蓋片(105～107)で、3点とも口縁端部をくの字状に短く折り返している。108・109は灰釉陶器皿・碗、110～113は尾張系山茶碗・小碗・小皿で、110は瀬戸窯の碗C、112は小皿Aである。114は古瀬戸折縁皿、115は白磁玉縁碗、116は鉢Bである。117～121は土鉢、長さは同じようであるが、直径や重量には違いがある。122は、均質で緻密な土でつくられ、中央に孔のある円形形状のものである。123は磁器の灯明皿である。加工円盤は、124～127・129が尾張系山茶碗、128は常滑製品、130～140が中世～近世陶器である。141～144は火打石である。

### (3) A区のみとめ

近年、島畑として残された部分をのぞき水田化が進められているためか、遺物の出土量も少なく、全体に遺物の密度が薄い状態となっていた。ただし、発掘区の東側や島畑 A-3 付近では、13世紀前半頃の溝(SDd37001)や土坑(SKD38501)、12世紀後半頃の土坑(SKD39006)が発見されている。この付近から発掘区外への北方向にも、微高地が存在したと推測され、発掘区北側外に広がる生活区域があった可能性もある。島畑 A-3 の下で検出した土坑(SKD39006)の長辺方向は、N-85°-Wを測り、富田荘の土地割方向と関連ある数値を示している。この付近にあるPD38501・39001や周囲の土層からも同時期の遺物が出土している。東側は、性格など不明であるが、方形土坑やSDD37001では、13世紀から14世紀代の遺物が出し、方向は富田荘の土地割方向とは違っている。A区は12世紀後半から13世紀代に土地利用されている。水田の区画については、現代水田の耕作により、その畦畔状遺構が削平されたと考えられ、痕跡を確認できなかった。ただ、島畑 A-1 と島畑 A-2 の長軸方向は、いずれもN-5°-Eを測り、富田荘の土地割方向と関連がある数値を示し、近年まで土地割の制約を引き継いでいるものと思われる。また、島畑の褐色土などは、13世紀代の遺物が含まれることから、この頃の洪水による堆積土の可能性が考えられる。

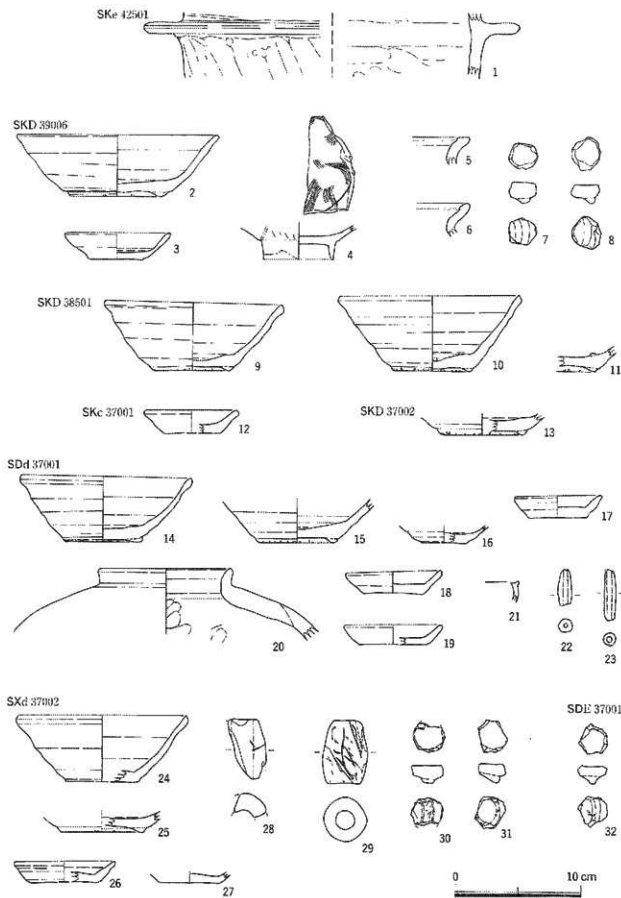


图 16 A 区出土遺物(1)



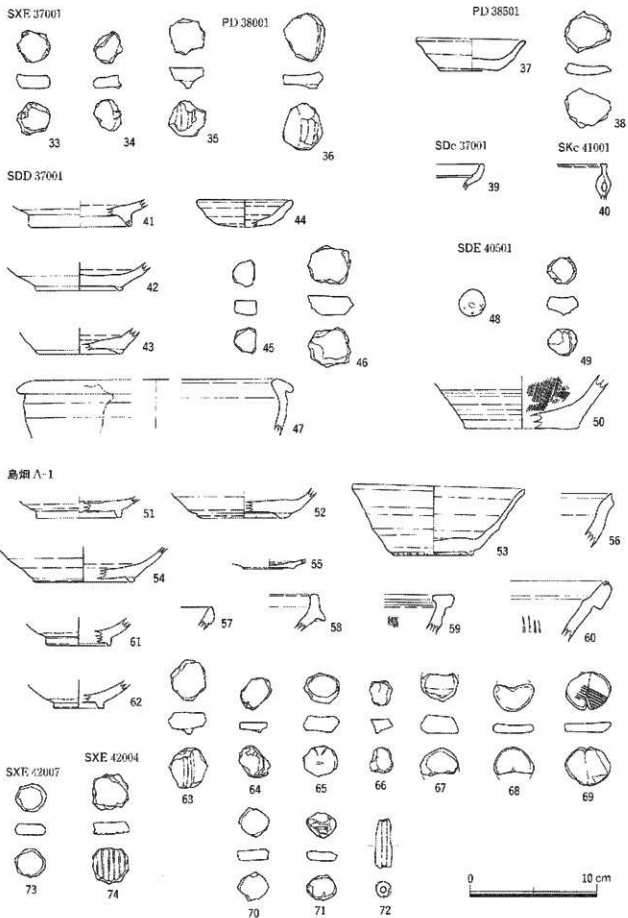
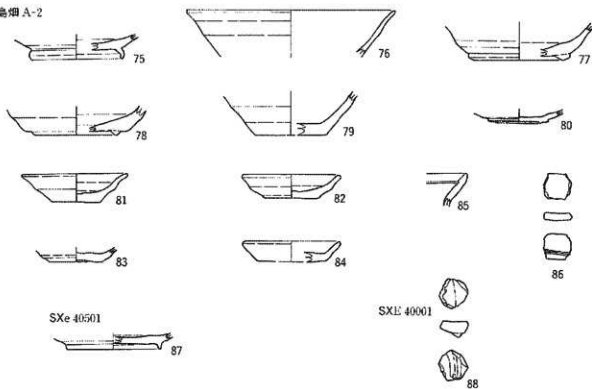


図 17 A 区出土遺物

島畑 A-2



島畑 A-3

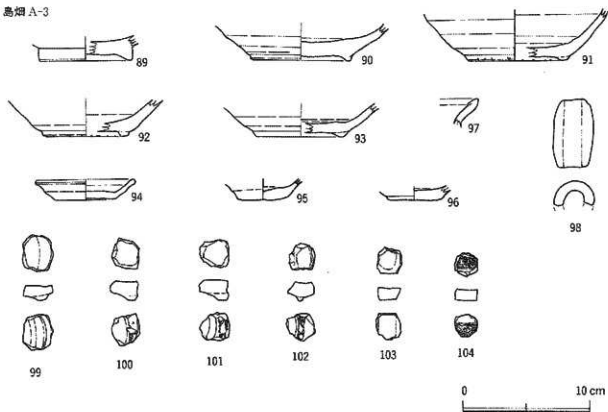


图 18 A 区出土遺物③

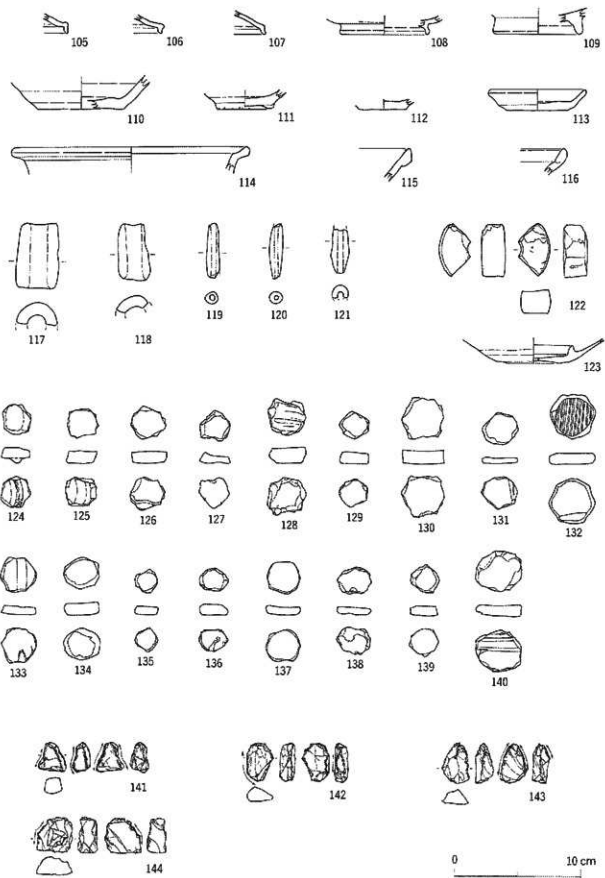


图 19 A 区出土遺物

## ④ B区の遺構

島畑 B-1：発掘区西側にあり、北西へ広がる「L」字状の畑地である。島畑 B-1 から SKk39501 の西側では、水田の濃灰色土を掘り下げると、島畑を形成する淡灰茶褐色土に類似した上層面が広がっている。おそらく一連の微高地があり、西側を残して三方が水田化され、「L」字状の畑地になったと推測される。東西方向に畝が作られた畑地を約 50 cm 掘り下げると、標高 -60 cm 程付近で、柱穴や炭化物面が検出された。

島畑 B-2：発掘区西側北端にあり、発掘区外へ広がる長方形の畑地である。水田面との比高差は約 50 cm あり、南側縁付近の床土下（標高 -70 cm 程）で、屋敷地を区画する東西方向の溝が検出されている。

SB01 (PK39006・PK39502・PK39501・PK39001・PK39502)：直径約 30～45 cm、深さ約 20～30 cm の類似した形状の柱穴が、5 基検出された。PK39006 PK39502 PK39501 の中心間が約 2.65 m、PK39006-PK39001 と、PK39501-PK39502 の中心間が約 4.65 m ある。建物は、南北間が長い、おそらく東西方向に二間、南北方向に一間であろう。建物面積は、約 24.65 m<sup>2</sup> (約 5.3×4.65 m) になる。長軸方向は、N 83° -W を測る。

建物のある位置に約 3～5 m の範囲で、厚み約 3 cm の炭化物と焼土粒が混じる土層が確認されている。炭化物層は 2 層で、約 3～5 cm の黄褐色土層か調層となり、さらに約 2 cm の炭化物を含む土層が観察されている。これらの層位が広がる範囲とその周辺から、尾張系山茶碗や小碗、白磁片等が出土している。

SA01 (PK39001・PK39003・PK39008・PK39504・PK39503・PK40001・PK40003)：直径 20～30 cm、深さ 20～30 cm の類似した形状の柱穴が、7 基検出された。柱穴の中心間は、東端の PK39001-PK39003 の中心間隔が約 1.2 m と短く、また中央の PK39504-PK39503 の中心間隔が約 2.6 m と長くなるが、他の中心間隔はいずれも約 2 m である。軸方向は、N-83° -W を測り、SB01 の北側辺と約 1.5 m 離れた間隔で東西方向に平行する位置にある。

SA02 (PK40003・PK40004・PK40005・PK40001 (・Pj40002))：直径 25～30 cm、深さ 20～25 cm の柱穴が、4 基検出された。柱穴の中心間は、PK40003-PK40004 の中心間隔が約 1 m、PK40004-PK40005 の中心間隔が約 0.5 m と短く、PK40005-PK40001 の中心間隔が約 2.35 m である。PK40003 から約 2 m 離れて、Pj40002 がほぼ直線上に位置している。軸方向は、N-7° -W を測り、柱穴列 (SA01) と直交する位置関係にあり、SB01 の西側辺と約 3.8 m 離れた間隔で南北方向に平行する位置にある。

SA03 (PK39501・PK40006・PK40005)：建物の柱穴 PK39501 の延長線上に、PK40005・PK40006 が位置する。PK40005・PK40006 は、直径 20～30 cm、深さ 25～30 cm である。柱穴の中心間は、PK39501-PK40006 の中心間隔が約 2.4 m、PK40005-PK40006 の中心間隔が約 1.4 m である。軸方向は、N-83° -W を測り、SB01 の北側辺の延長線上に位置する。

SA04 (PK38503・PK38504・PK39004・PK39005・Pj39501 (・Pj40003))：直径 20～40 cm、深さ 10～15 cm の柱穴が、5 基検出された。柱穴の中心間は、東端の PK38503-PK38504 の中心間隔が約 1.5 m と短く、また PK38504-PK39004 の中心間隔が約 4.8 m と長く、他の中心間隔は約 2.25 m である。軸方向は、N-82° -W を測り、SA01 と約 1.9～2 m 離れた間隔でほぼ平行する位置にある。また、Pj39501 から約 6 m 離れて、Pj40003 がほぼ直線上に位置している。

SEK38001：直径約 1.7 m の掘り方があり、その内側は、長径約 1.35 m、短径約 1.2 m の円柱状に掘り

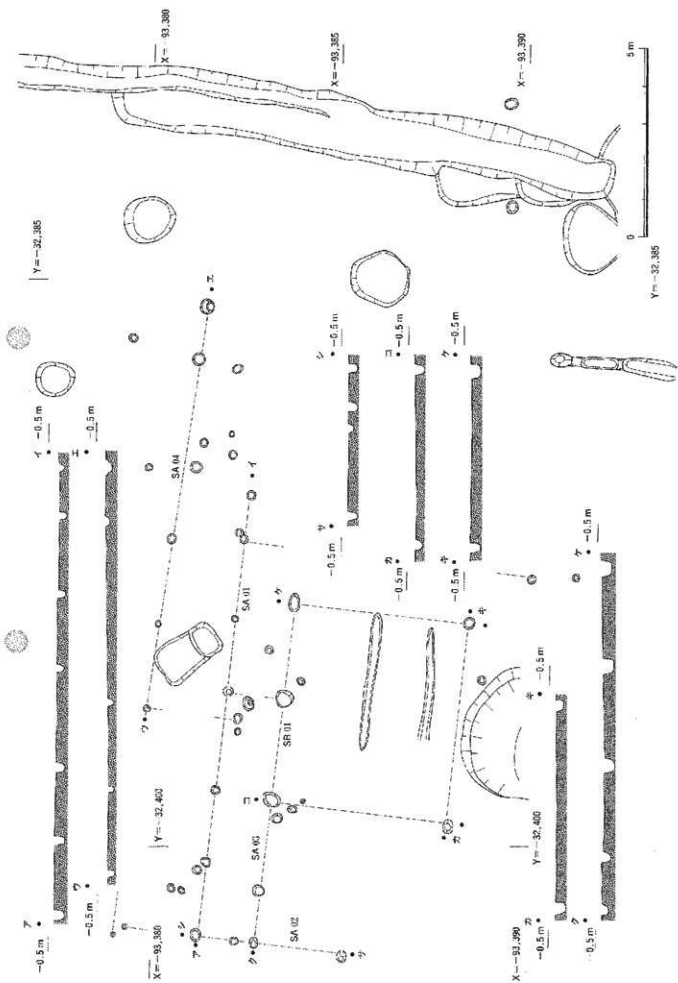


図2 B区遺物跡(SB01)等

下げられている。未掘であり木枠は発見されていないが、1m程掘ると著しい湧水があり、おそらく井戸と思われる。埋土には炭化物や木片が多く含まれていた。炭化物は、南西側から廃棄された状態で埋まり、白磁片、尾張系山茶碗2点が含まれている。

SEJ38501：掘り方は検出されず、長径約1m、短径約90cmの円柱状に掘り下げられている。未掘であり木枠は発見されていないが、1m程掘ると著しい湧水があることから、おそらく井戸と思われる。厚さ約50cmの炭化物が埋まり、多数の尾張系山茶碗や小皿が出土している。

SDL37001：最大幅約1.3m、深さ約30cm、検出長さ約11mの溝で、方位は、N-6°-Eを測る。南側でSXL37501に切られている。

SDK37501：最大幅約1.2m、深さ約50cm、検出長さ約11mの溝で、方位は、N-0°-Eを測る。

SDK37502A：標高75cm付近で検出した。最大幅約90cm、最小幅約55cm、北側深さ約20cm、南側深さ約35cm、検出長さ約8mの溝で、方位は、N-6°-Eを測る。

SDK37502B：最大幅約1.6m、最小幅約1.3m、北側深さ約25cm、南側深さ約35cm、長さ約13.5mの溝で、埋土の上位から尾張系山茶碗や小皿等が出土した。方位は、N-10°-Eを測る。SDK37502Aが、この溝の東側肩部に位置し、ほぼ中央付近で跨切れる。

SDJ39501：最大幅約90cm、最小幅約60cm、深さ約30cmの溝で、尾張系山茶碗や小皿、壺(甕)等が出土した。方位は、N-86°-Wを測る。SDK37502Aの北側幅とほぼ同じであり、2条の溝がほぼ直交する位置関係にあると予測されることから、SDJ39501とSDK37502は、扇敷地を区画する溝と考えられる。

SDJ39503：最大幅約90cm、最小幅約20cm、深さ約10cm、長さ約6mの溝で、SDJ39501の南側に位置する。方位は、N-84°-Wを測る。

SDL38501：最大幅約50cm、最小幅約25cm、深さ約20cm、検出長さ約3mの溝で、発掘区南側外に続く。方位は、N-8°-Eを測る。この溝は、検出時の所見では、数基の穴が連続する箇所が観察された。溝の北端から約9m離れた直線上に、PK38503が位置し、その中間に柱穴が検出されていないが、柱穴列(SA04)と直交する関係がある。

SDK39501：幅約20cm、深さ約5cm、長さ約3.7mの溝で、方位は、N-84°-Wを測る。厚さ約3cmの炭化物層を掘り下げて検出されている。SB01の柱穴の中間に位置し、軸方向もほぼ同じであり、建物と関係する遺構の可能性もあるが明確にできなかった。

SDK39502：幅約20cm、深さ約5cm、検出長さ約3mの溝で、方位は、N-85°-Wを測る。SDK39501の南側に約1.5m離れた位置にする。

SKk38501：長径約1.6m、短径約1.4m、深さ約45cmの上坑で、涅槃産と思われる壺(甕)等が南側に集中して出土している。

SKk39501：短辺約2.1m、検出長さ約2m、深さ約10cmの長方形土坑である。SKk39502よりも後の土坑である。軸方向は、N-35°-Eを測る。

SKk39502：直径約3.5m、深さ約45cmの上坑で、SB01の南側に位置する。北側に炭化物と焼土粒が多く埋まり、明らかに炭化物と遺物を廃棄した状態で、多数の尾張系山茶碗、小皿や小皿、土師器鍋等が出土している。軸方向は、N-10°-Eを測る。

SXk38501：長辺約6.5m、短辺約4.5m、深さ約50cmの長方形の凹み。SXk39001を切っている。

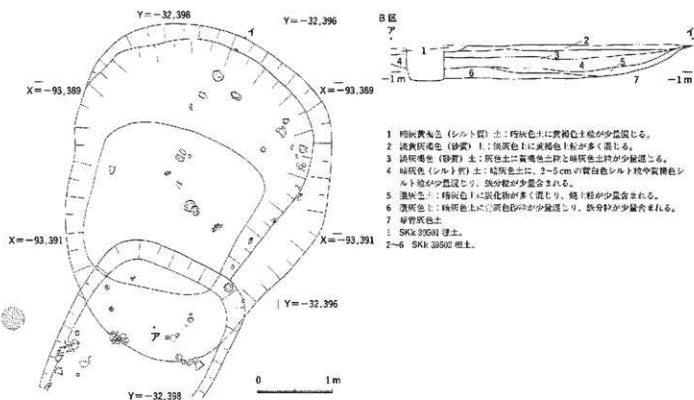


図21 SKK 39501・SKK 39502

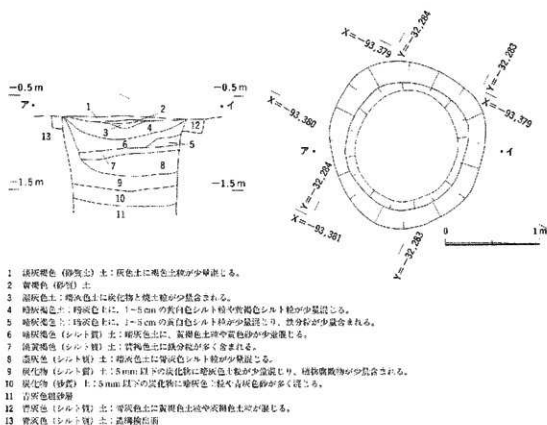


図22 SEK 39001

第II章 第1次調査

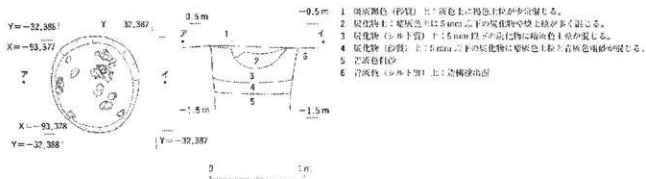


図23 SEJ 30501

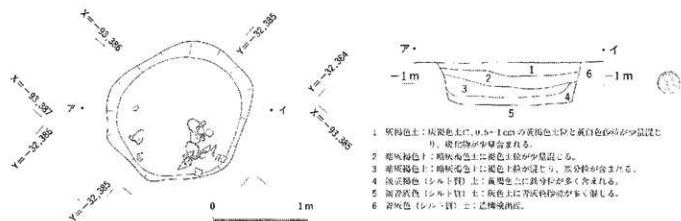


図24 SKk 30501



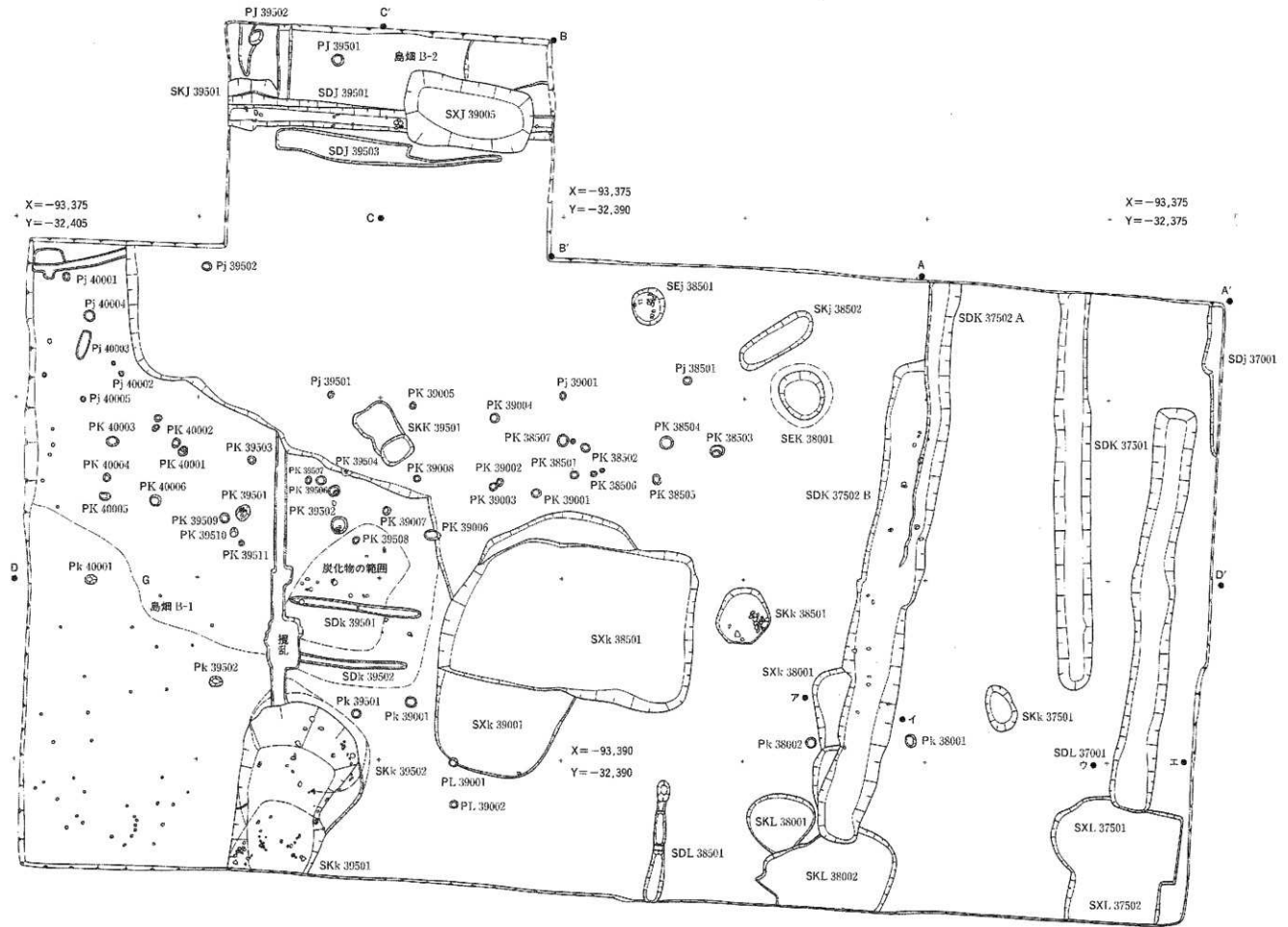
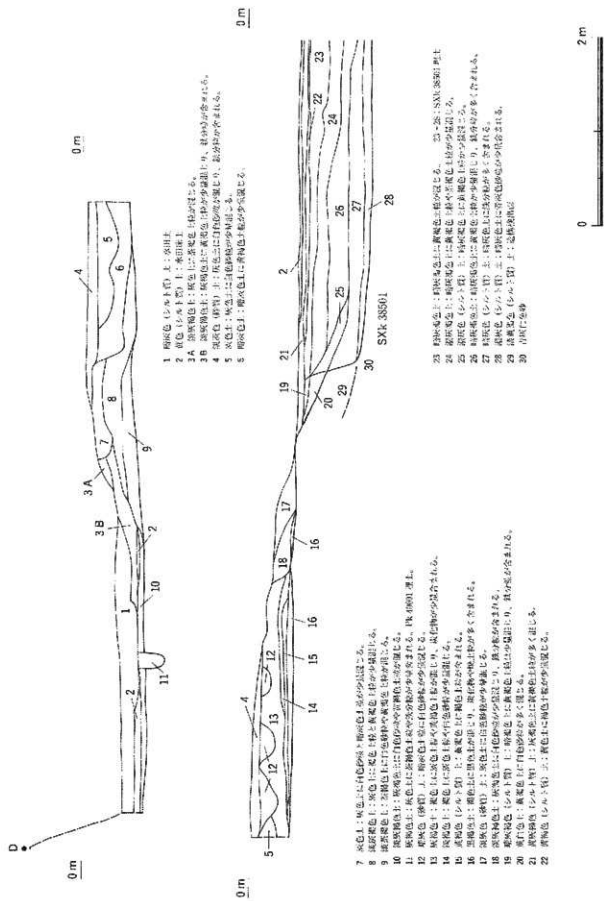


図 25 B区遺蹟圖 (1:100)

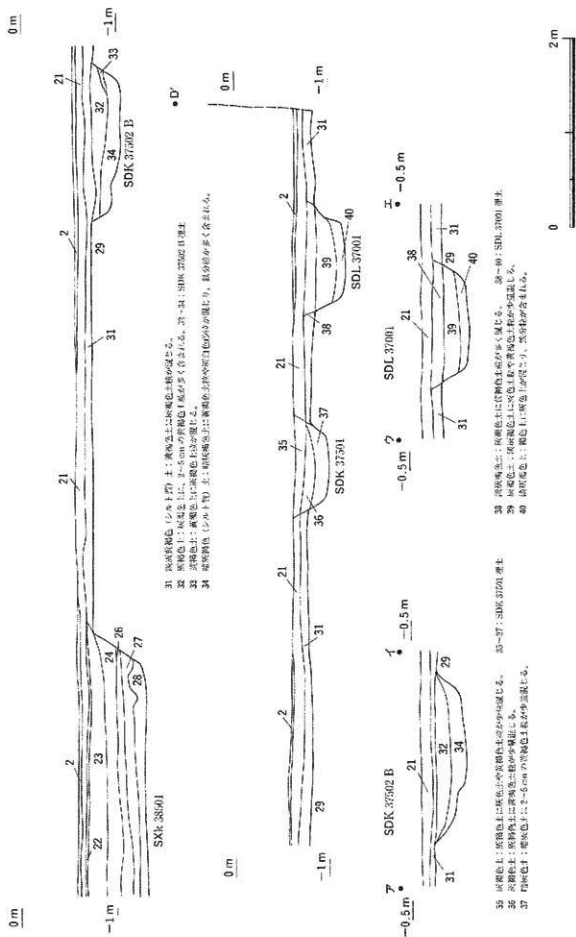




- 1 褐色色 (シルト質) 土：表田土
- 2 褐色色 (シルト質) 土：表田土
- 3A 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 3B 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 4 褐色色 (砂質) 土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 5 褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 6 褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。

- 7 褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 8 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 9 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 10 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 11 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 12 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 13 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 14 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 15 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 16 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 17 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 18 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 19 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 20 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 21 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 22 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 23 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 24 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 25 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 26 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 27 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 28 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 29 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。
- 30 灰褐色土：灰褐色土に少量の赤土を含む。

図27 B区 (D-D') 土質断面図 No. 1



長軸方向は、N-85°-Wを測る。

SKk39001：長辺約7.7m、短辺約4.0m、深さ約15cmの長方形の凹み。長軸方向は、N-22°-Eを測る。

#### (5) B区の遺物

炭化物付近：尾張系山茶碗・小碗・小皿、白磁碗、加工円盤などが出土している。小碗が他に比べると多く出土している。1～5は、炭化物の広がりや端あたりと上位の炭化物層中に位置するものである。1～3は碗Aで、高台は比較的1等なつくりである。3の高台には砂粒痕がみられる。4の小碗は、緻密な胎土で高台は逆三角形を呈し、割痕痕などは認められない。口径は約11cmある。5～13は炭化物中からの出土であるが、炭化物層は比較的薄いので、炭化物の下層から出土しているものも含まれる。5～10は碗A、11・12は小碗である。13の白磁碗は、高台が台形を呈し、高台部は無輪である。14～17・19は碗A、18・20は小皿A、21は常滑窯の短頸壺の口縁部、22は銅A、口縁端部を短く折っている。加工円盤(23・24)は山茶碗の高台部を利用している。14・15・19・20・22～24は、炭化物の上位から出土している。番号を付して取り上げた一群とは、小皿があることから時期差が考えられるが、山茶碗の型式からは違いが認められない。

SKk39501：山茶碗、小皿、壺、常滑製品、土師器などが出土している。25～34は番号を付して取り上げたもの、35は下位から出土し、他は埋土掘削中の出土である。碗は碗A、小皿は小皿Aである。33・34・38は常滑製品である。33と34は胎土や焼成が似ており、同一製品の可能性がある。39は土師器皿の底部と思われるもので中央に小孔があげられている。

SKk39502：遺構の中では出土遺物が最も多い。尾張系山茶碗・小碗・小皿、伊勢型鍋などが出土している。碗A(40～54、63～68)は、高台が三角を呈するもの、低くつぶれたもの、体部の立ち上がりに丸みのあるもの、やや直線的なものなどバリエーションに富んでいる。小皿(55～59、70)は小皿Aであるが、59は底径が大きくなり、やや新しいものであろう。63～72は下層からの出土で、山茶碗の形態には比較的まとまりがあり、また、小碗(69)を含む。鍋A(61・62)は、口縁部が2種類出土している。62は口縁端部を肥厚させたもので、61は短く折り返している。62は下層から出土している。60は甕と思われる。加工円盤(71・72)は山茶碗の高台部を加工している。

SEJ38501：主に尾張系山茶碗が出土している。図化したのは、山茶碗が16点、小皿が2点、土師器皿が2点などである。碗A(73～86、91・92)は、底部の厚いものや、体部の立ち上がりに丸みのあるもの、やや直線的なものなどある。口径は16cm前後、器高は5cm前後であるが、79はやや口径が大きく、器高が高い。87・88は小皿Aである。土師器皿(89・90)は、橙～赤褐色を呈し、ロクロ成形で口縁部がほぼ直角に立ち上がり、底部はやや突出気味である。その他、小皿の底部を利用した加工円盤(93)、白磁碗片などが出土している。

SKk38501：瀬美産の甕(壺)(94)が出土している。底部から下脚部にかけて復元でき、押印が一列残っている。その他、山茶碗、小皿、羽釜、土師器などの小片が出土している。

SEK38001：遺物の量は少ない。灰粘陶器の皿(95)、碗A(96・97)、白磁玉縁碗片が出土している。

SKL38001：尾張系山茶碗片が出土している。

SDJ39501:埋土上層からは、須恵器片、土師器片、山茶碗(106~109)、天日茶碗底部(110)などが出土している。108の山茶碗は渥美窯の製品で濃い灰色を呈し、砂粒を多く含む。他は尾張系山茶碗である。埋土中〜下層からは、尾張系山茶碗(98~102)・小皿(103)、壺(104・105)、土師器片などが出土している。

SDJ39503:土師器、山茶碗、施釉陶器片が出土している。

SDK37502:山茶碗(111~119)・小皿(120~124)・鉢(125)、土師器皿(126)などが出土している。碗は碗A、小皿は小皿A、土師器皿はロクロ成形で内側の口縁付近に煤が付着している。

PJ39501:尾張系山茶碗と土師器の小片が出土している。

PJ39503:土師器皿、尾張系山茶碗片が出土している。

PK39501:山茶碗(127)、壺(129)、渥美産と思われる甕(壺)片(128)が出土している。

PK39502:山茶碗(130~132)、渥美産と思われる甕(壺)片(133)などが出土している。甕(壺)片は、

PK39501、SKk38501と同じような押印が施され、また、胎土や焼成も類似している。

PK39504:134の山茶碗は、均質な胎土で、体部は薄く東濃系と思われる。

PK39006:尾張系山茶碗片などが出土している

PK39007:土師器、焼き締め陶器片が出土している。

PK39001:土師器鍋、尾張系山茶碗片が出土している。

PK39501:尾張系山茶碗片が出土している。

PL39001:土師器の小片が出土している。

PK40004:尾張系山茶碗、施釉陶器片が出土している。

SDK37501:山茶碗、練釉小皿、土師器鍋、常滑窯甕・壺、土鍾(137)などが出土している。土鍾は、直径4.7cm、長さは7cmと比較的大形のものである。山茶碗は、尾張系と東濃系がある。

SDL37001:尾張系山茶碗、施釉陶器片が出土している。

SXL37501:尾張系山茶碗(135)が出土している。

SXI37502:尾張系山茶碗の小片と東濃系山茶碗(136)が出土している。

SXJ39005:須恵器、土師器、山茶碗、小碗、常滑窯甕・壺などが出土している。138の山茶碗は器壁がかなり厚く、高台はひしゃげて低くなっている。141の小皿は、東濃系である。小碗は2点あり、140は口径・台径とも小さく、器高が深い形状をしている。

SXk38501:土師器、山茶碗、小皿A(142)などが出土している。143は碗Eである。

SXk39001:須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗、施釉陶器、常滑窯甕(壺)片などが出土している。

島畑B-1:島畑を形成している土の中からは、須恵器、灰釉陶器、尾張系・東濃系山茶碗、施釉陶器、土師器、焼き締め陶器片などが出土している。図化できた遺物は、柱穴の広がっている面のすぐ上層や島畑の縁(遺構検出面付近)からの出土である。144は須恵器杯の高台で台形を呈し底部中央は低くなっている。145は灰釉皿、高台は三日月形である。146は青磁碗、見込みに押印があり、底部外面は無釉である。147は常滑窯甕(壺)片、148は無釉の壺底部である。加丁円盤は、149が土師器、150~152が山茶碗の高台、153が山茶碗の底部、154は染付碗の体部を加工している。

島畑B-2:島畑を形成している土からは、須恵器、灰釉陶器、尾張系・東濃系山茶碗、施釉陶器、土師

器、焼き締め陶器片が出土している。155は灰釉碗、156は灰釉皿とともに三日月高台である。加工円盤は、157が山茶碗の体部、158・159が高台を加工している。

水田・床土：尾張系・東濃系山茶碗、中世～近世施釉陶器、土師器皿、伊勢型鍋、焼き締め陶器、青磁・白磁碗、陶丸、土鍾、加工円盤、近代磁器などが出土している。164は東濃系小皿C、165はロクロ成形の土師器皿、172の青磁碗は蓮弁文、173・174は白磁玉縁碗の口縁である。加工円盤の大きさは大小あり、鉢鉢、常滑窯壺、山茶碗・小皿、近世陶器などを加工している。

#### (6) B区のみまとめ

発掘区西半部に、柱穴列が集中し建物跡も確認されている。東半部に、井戸や溝跡が検出され、その位置関係から、溝で区画された中世の屋敷地の様子を伺うことができる。北東方向へ軸方向が4～10度の傾きを測る柱穴列や溝が、屋敷地の区画に関連する遺構と考えられる。これら遺構の軸方向は、富田荘の土地割方位に類似した数値であり、絵図の「新家里」の北側外にも、土地割の制約があった可能性を示している。

富田荘の土地割方向に類似した数値の遺構をまとめると、次の内容になる。

##### ① N-83° W (N 7° -E) を測る遺構

- SB01：東西二間（中心間約2.65 m）、東西一間（中心間約4.65 m）、面積約24.65 m<sup>2</sup>。  
 SA01：SB01の北側約1.5 mの位置、最大中心間約2.6 m、最小中心間約1.2 m、平均中心間約2 m。  
 SA02：SB01の西側約3.8 mの位置、最大中心間約2.35 m、最小中心間約0.5 m。  
 SA03：SB01の北側西延長線上の位置、最大中心間約2.4 m、最小中心間約1.2 m。

##### ② N-82° -W (N-8° -E) を測る遺構

- SA04：SA01の北側約2 mの位置、最大中心間約4.8 m、最小中心間約1.5 m、  
 平均中心間約2.25 m。

##### ③ N-6° E を測る遺構

- SDL37001：SDK37502A から東方へ約6.5 m離れた間隔で平行する位置、最大幅約1.35 m、  
 最小幅約1.2 m、深さ約40 cm。  
 SDK37502A：SB01 東辺から東方へ約13.5 m離れた位置、最大幅約90 cm、最小幅約55 cm、  
 深さ約20 cm。

##### ④ N-86° -W を測る遺構

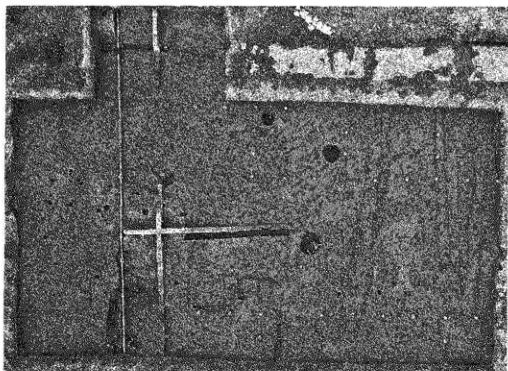
- SDJ39501：SB01 北辺から北方へ約11 m離れた位置、最大幅約90 cm、最小幅約60 cm、  
 深さ約30 cm。

##### ⑤ N-10° E を測る遺構

- SDK37502B：SB01 東辺から東方へ約12 m離れた位置、最大幅約160 cm、最小幅約130 cm、  
 深さ約35 cm、溝（SDK37502A）と重複。

柱穴列は、建物跡の北側と西側にあることから、建物に付属する遺構の可能性もあるが、関連性を明確にできなかった。屋敷地を区画する東側と北側の溝は、建物との間隔11～13 mの位置にあり、間隔をおそらく取り囲む形態であろうと思われる。建物跡とその間隔には、炭化物や焼土粒が含まれる土層があり、

火災の可能性も想定させる。特に、建物跡の両側の土坑(SKk39502)や、井戸跡と想定した土坑(SEK38001・SEj38501)の埋土中の炭化物は、建物跡側から多量に廃棄されたような状態で発見されている。



B区全景



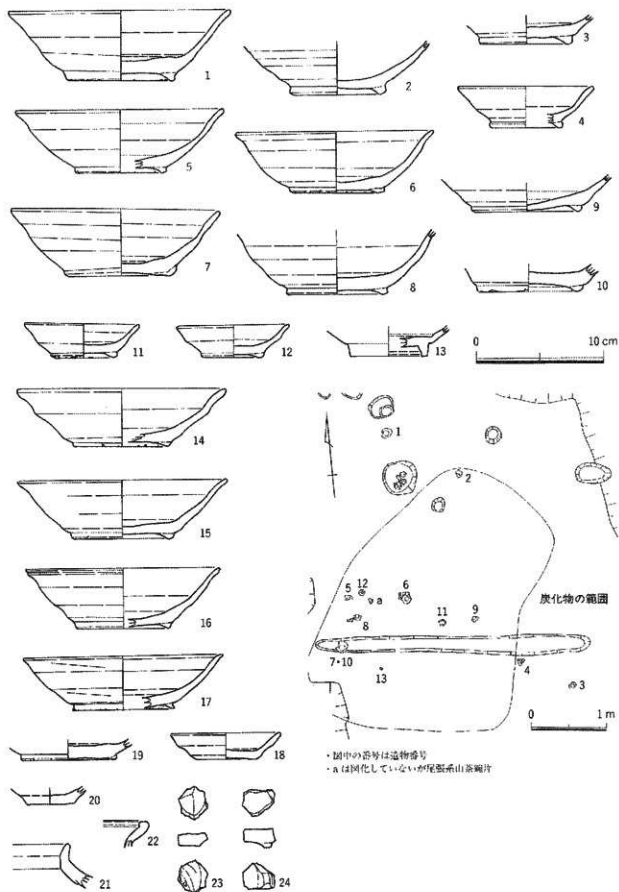


図29 日区出土遺物(1)



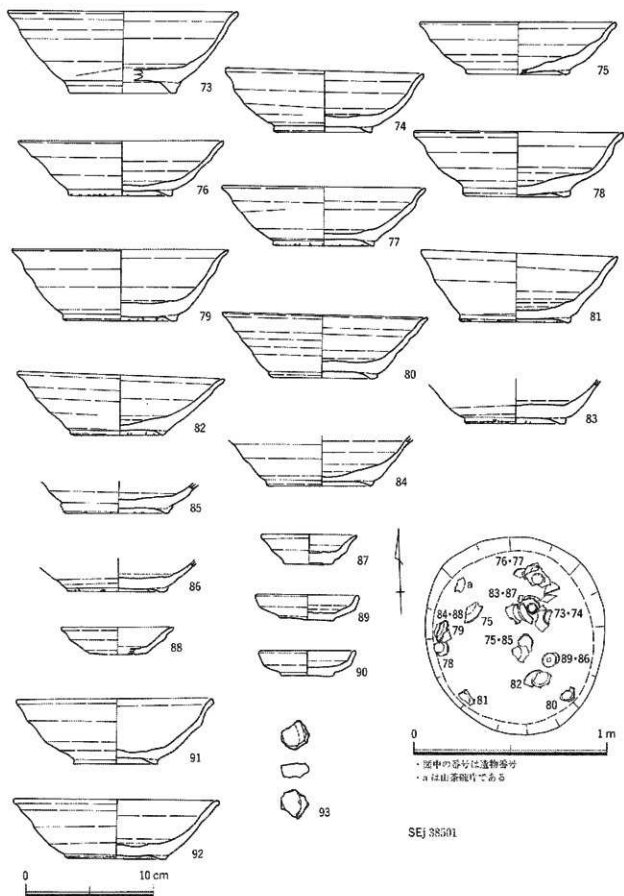
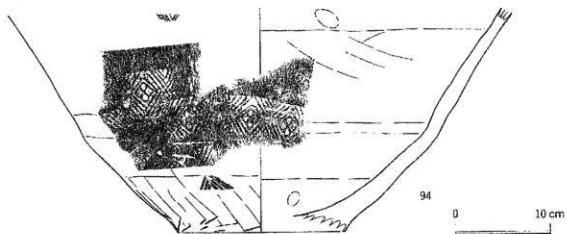


図31 巳区出土遺物(3)

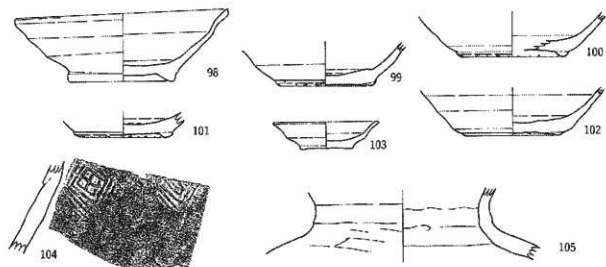
SKk 38501



SEK 38001



SDJ 38501



SDJ 39301(上)

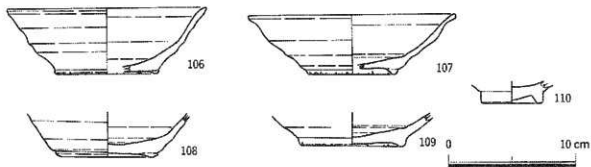
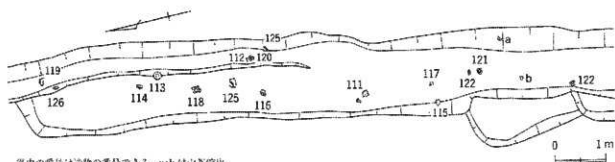
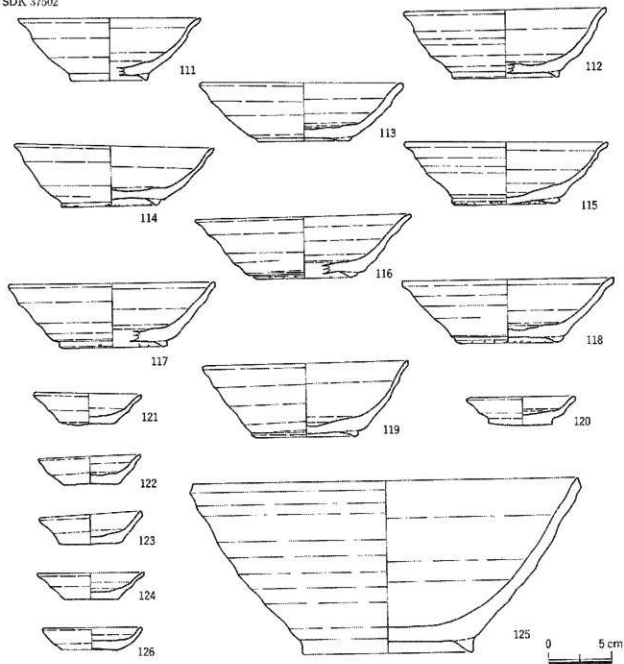


図32 B区出土遺物(4)

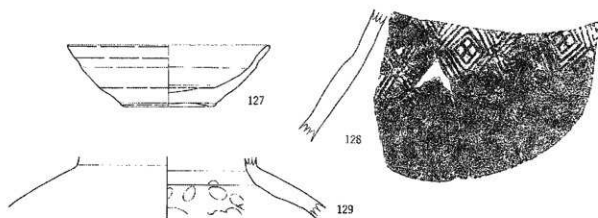
SDK 37502



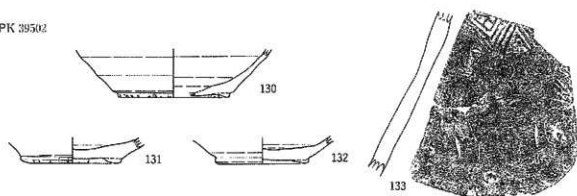
図中の番号は遺物の番号である。a・bは山形破片

図 33 B 区出土遺物

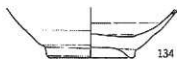
PK 39501



PK 39502



PK 39504



SXL 37502



SXL 37501



SDK 37501



SXJ 39005

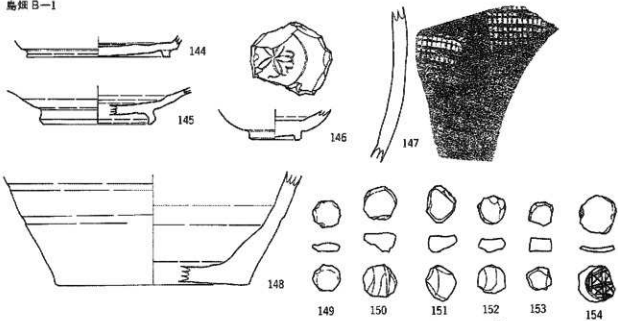


SXk 38501

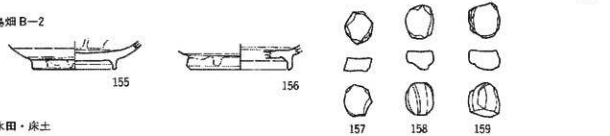


图 34 日区出土遺物⑥

島畑 B-1



島畑 B-2



水田・床土

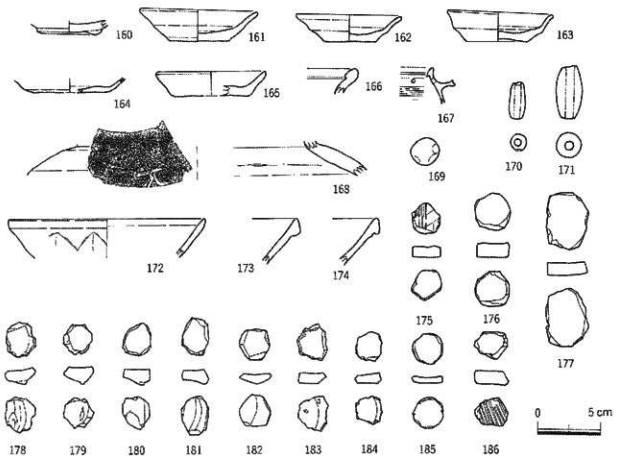


图35 台区出土遺物①

### 第三章 第2次調査

発掘調査は、C区(約960m<sup>2</sup>)、D区(約960m<sup>2</sup>)、E区(約830m<sup>2</sup>)、F区(約950m<sup>2</sup>)で、平成11年5月17日から平成11年12月24日まで実施した。

約80cmの盛土を掘り下げると、近年まで使用された水田跡が検出される。湧き水や雨水の排水のため、発掘区の周囲等に、事前に排水溝を設置してから遺構の検出を実施した。

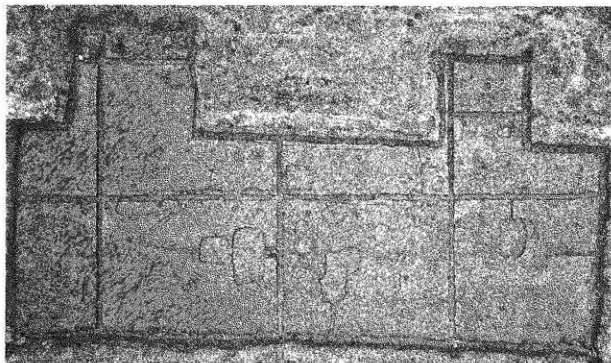
C区では、中央から東側にかけて、鳥畑の痕跡を示す黄褐色土層の広がる範囲が1箇所あり、この付近で、山茶碗の出土する溝や土坑が検出された。近世・近代以降の水田化が進み、鳥畑も痕跡が確認された程度の状態で、遺構の密度が薄く、遺物も少量しか出土していない。

D区では、水田の濃灰色土を20~25cm程掘り下げて、水田床土の下の黄褐色土層面などで方形遺構などを検出した。発掘区の南側では、幅約1.5~2mの間で東西に続く小穴が多数検出された。地籍図を見ると、「作道」と記載されることから、小穴は、近世の畦畔(作道)の内側に打たれた杭跡列と考えられる。その北側に方形遺構や南側に溝状の窪む遺構があり、近世の水田跡と思われる。

E区では、発掘区の西南側で柱穴など多数のピットが検出された。その北側で2条の溝が東西方向に繋がり、溝の中から13世紀代の山茶碗等が出土した。発掘区の東側では、水田跡が検出されている。

F区では、発掘区西側で南北方向に繋がる溝や、南端で東西方向に小穴が多数検出された。この付近の地籍図を見ると、悪水路や作道と記載され、それに該当する遺構と考えられる。溝の東側に、方形遺構があり、水田跡と思われる。

遺物は、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、小皿、常滑製品、施釉陶器、土錐などが出土している。



C区全景



## (1) C区の遺構

島畑 C-1：発掘区中央南側寄りにあり、推定検出長さ東西約12m、南北約4mの長方形の畑地部分が残存していた。水田との比高差は約30cmあり、南北方向に部分的な畝跡が残存していた。畝跡内の一部分で、堆肥のために敷かれた状態の藁や籾殻が確認された。畑土は、北側に淡褐色土が残存し、大部分は積み上げられた灰色土である。畑地を掘り下げると、溝跡や土坑が、黄褐色土面で検出された。

SDp40501：発掘区南東端にあり、幅は不明であるが、深さ約10cm、検出長さ約6mの溝で、南北方向に繋がる。方位は、N-7°-Eを測る。

SDO41001：最大幅約1.15m、最小幅約45cm、深さ約10cm、検出長さ約3mの溝で、北方向に幅が狭くなる。方位は、N-0°-Eを測る。

SDO42001：最大幅約60cm、深さ約15cm、検出長さ約7mの溝で、発掘区北側外に続く。方位は、ほぼN-0°-Eを測る。

SDo42001：島畑C-1を掘り下げて検出された、幅約60-70cm、深さ約10cmの溝で、緩やかな弧状を指し南東方向に続く。

SDo42501：幅約30-40cm、深さ約15cm、検出長さ約5.5mの溝で、方位はN-85°-Wを測る。

SDO43001：幅約30-40cm、深さ約5cm、検出長さ約2mの溝で、SDO43002と交差する位置関係にあり、方位は、N-6°-Wを測る。

SDO43002：発掘区の中央北端にあり、幅は不明であるが、深さ約8cm、検出長さ約10mの溝で、方位は、N-97°-Wを測る。

SKP42501：島畑C-1を掘り下げて、標高-80cm程の黄褐色土面で検出された。長辺約2.2m、短辺約1.7m、深さ約25cmの椀形土坑で、西側がSXP42501と重複する位置関係にある。方位は、N-0°-Eを測る。

SXo41501：長辺約3.3m、短辺約2.3m、深さ約20cmの長方形土坑で、方位は、N-0°-Eを測る。

SXP42501：長辺約4.2m、短辺約2m、深さ約10cmの長方形土坑で、N-0°-Eを測る。

SXO43001：推定の一辺が約2.8m、深さ約30cmの土坑で、N-0°-Eを測る。

SXP43501：長辺約4.7m、短辺約2.7m、深さ約10cmの長方形土坑で、N-0°-Eを測る。

SXP44001：長辺約2.2m、短辺約2.4m、深さ約15cmの方形土坑で、N-0°-Eを測る。

SXo45001：長辺約4.5m、短辺約2m、深さ約10cmの方形土坑で、N-80°-Wを測る。

## (2) C区の遺物

遺物の量はきわめて少ない。現代水田の床土下から、須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗、中世～近世の施釉陶器などが出土している。

SDo42001：尾張系山茶碗が出土している。1は碗Aの底部、厚手である。

SDO43002：山茶碗の小片が出土している。

SDo42501：尾張系山茶碗の小片が出土している。

SDp45001：須恵器片が出土している。

SDp40501：東濃系山茶碗片などが出土している。

SKo45001：尾張系山茶碗と施釉陶器が出土している。

SXP44001：尾張系山茶碗片が出土している。

SXP43501：土師器、灰釉陶器、山茶碗、施釉陶器などが出土している。

SXo45001：尾張系山茶碗、常滑窯裏、施釉陶器などが出土している。

SXo41501：尾張系山茶碗の小片が出土している。

Pn41501：東濃系山茶碗片が出土している。

島畑 C-1：島畑を形成している層からは、須恵器、土師器、山茶碗、中世～近世の施釉陶器などの小片が出土している。4・5は加工円盤である。

水田・床土：山茶碗（2）、小皿A（3）、近世陶器（7・8）、陶丸（6）が出土している。

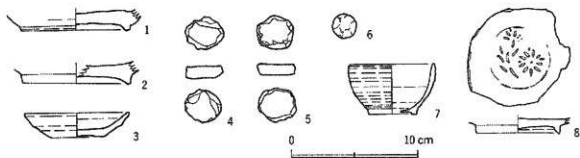


図36 C区出土遺物

### (3) C区のみまとめ

島畑が残存する個所が検出されているが、ほぼ全域が近代や現代の水田化により削平され、遺構が少ない状態となっている。水田に関連すると推測される2条の溝が検出されている。発掘区南東端で検出された溝（SDp40501）と、発掘区の中央北端で検出された溝（SDO43002）で、排水溝を事前に掘削したために幅が不明となっているが、特に、SDp40501は、その方位はN-7°-Eを測り、14世紀代の山茶碗片が出土し、条里地割に関連する遺構の可能性が想定される。また、島畑 C-1の下で検出した溝（SDo42001）は、12世紀後半頃の山茶碗が出土している。この溝の検出により、溝の検出面がほぼ自然堤防地形の残存部と思われ、この面の上に島畑 C-1が積み上げられて形成されていることを明確にできた。この溝の西側で検出された方形状土坑も、島畑形状の形成時に上部が破壊されたと思われる、この周附付近には中世の遺構があったと考えられる。



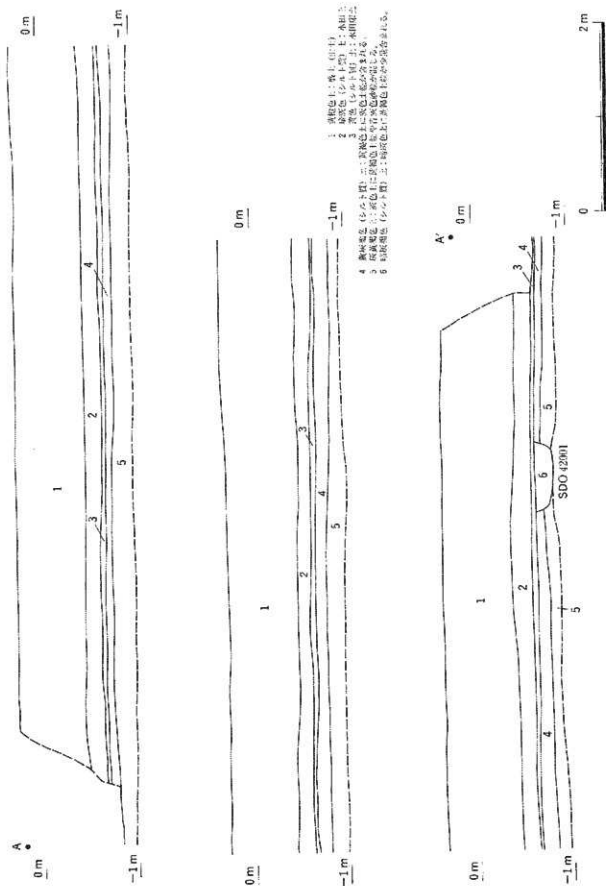
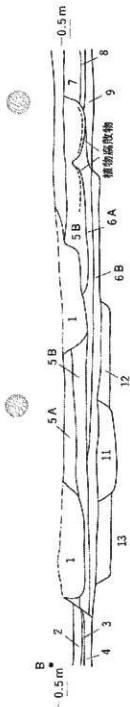
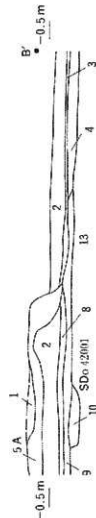


图 38 C区 (A-A') 土層断面图



B-B'土層断面

- 1 腐植色土：硬土（粘土）
- 2 腐植色（シルト質）土：硬土
- 3 腐植色（シルト質）土：硬土（粘質土）に腐植土が少量含まれる。
- 4 腐植色（シルト質）土：硬土（粘質土）に腐植土が少量含まれる。
- 5A 灰色土：灰土上に腐植土が少量含まれる。
- 5B 灰色土：灰土上に腐植土が少量含まれる。
- 6A 暗灰色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 6B 暗灰色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 7 腐植色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 8 腐植色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 9 腐植色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 10 暗灰色土（シルト質）土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。SNo 42001 層上
- 11 灰褐色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。SNo 42001 層上
- 12 灰褐色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。SNo 42001 層上
- 13 灰褐色土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。



C-C'土層断面

- 1 灰色（シルト質）土：灰土上に腐植土が少量含まれる。
- 2 灰色（粘質）土：灰土上に腐植土が少量含まれる。
- 3 暗灰色土（シルト質）土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。



- 4 灰褐色土（シルト質）土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。
- 5 腐植色土（粘質）土：腐植土上に腐植土が少量含まれる。



図3 C区(B-B'・C-C')土層断面図

(4) D区の遺構

SDs41001: 幅約50~65cm、深さ約10cmの溝で、発掘区東側外へ続く。SXs41502の南端で重複するが、その前後関係は明確にできなかった。方位は、N-86°-Wを測る。

SDR41501: 幅約75~80cm、深さ約10cmの溝で、発掘区北側外へ続く。方位は、N-2°-Wを測る。

SDT42501: 幅約3.5~4m、深さ約5cm、検出長さ約41mの溝状の窪みで、発掘区西側外へ続く。東側付近には、方形土坑があり、溝状の窪み形状が不明瞭となっている。方位は、N-86°-Wを測り、水田として使用された区画と考えられる。北側辺は、幅約1.5~2mの間で東西に続く小穴が多数検出された作道付近となっている。南側辺は、淡黄褐色土層面が畦状になっている。発掘区外の南側には、現在の用水路が東西方向にあり、この水路付近が新家里との境になると推測される。

SDs43501: 幅が東側で狭く約30cm、西側の幅約55cm、深さ約5cmの溝。検出長さは約15mである。方位は、N-84°-Wを測る。作道の北側沿いに位置する。

SXs43002: 幅約80~100cm、深さ約10cm。SXs43001の南側を掘り下げた段階で、SKs43001と重複する位置関係で検出したが、これらの前後関係は明確にできなかった。

SKs42003: 長辺約1.7m、短辺約1.4m、深さ約30cmの土坑。SXs42001を掘り下げて、北端がSKs42004と重複する位置関係で検出された。

SKs42004: 長辺約2.5m、短辺約2m、深さ約10cmの楕円形土坑。北西端が、SKs42005と重複する位置関係で検出された。

SKs42005: 長辺約1.8m、短辺約1.4m、深さ約10cmの楕円形土坑。

SKs42501: 長辺約1.2m、短辺約70cm、深さ約10cmの長方形土坑で、長軸方向は、N-10°-Eを測る。

SKs42502: 長辺約55cm、短辺約45cm、深さ約10cmの方形土坑で、長軸方向は、N-85°-Wを測る。

SKs43001: 長辺約1m、深さ約15cmの方形土坑で、北側半部は、SXs43002と重複する位置関係にあり、その前後関係は不明である。

SKs44001: 長辺約90cm、短辺約45cm、深さ約10cmの方形土坑で、長軸方向は、N-6°-Eを測る。SDs43501と重複する位置関係にあり、その前後関係は不明である。

SKR44001: 長辺約1.3m、深さ約10cmの楕円形土坑。

SXS41001: 南北辺約2.8m、深さ約10cmの方形土坑。SXs41502の埋土を掘り下げて、標高-85cm程の青灰色土面で検出された。南北軸方位は、N-2°-Wを測る。

SXT41001: 南北辺約4.3m、深さ約5cm方形土坑。東西辺は、埋土の区別が不明瞭な異なる遺構との重複関係があり、明らかにできていない。埋土は、SDT42501の埋土に類似し、この付近までSDT42501が広がっていた可能性もある。

SXr41501: 東西辺約1.2m、深さ約5cm方形土坑。SXs41502を掘り下げて検出し、南北辺の検出長さ約1mで、全体形状は不明瞭である。

SXT41501: 東西辺約4.6m、南北辺約2.9m、深さ約20cm方形土坑。南北軸方位は、N-3°-Eを測る。

SXT41502: 東西辺約2.6m、深さ約10cm方形土坑。東側は、SXT41001と重複し形状が不明瞭である。

SXS42501：畦畔状の面の北側で、東西辺約2m、南北辺約3.4m、深さ約10cmの方形状上坑が検出されている。埋土は、灰褐色土に灰色砂が多く混じる。南北軸方向は、N-0°-Eを測る。

SXR41501：東西辺約5.5m、深さ約5cm、南北軸方向は、N-0°-Eを測る。西側に、幅30cm程の带状の淡黄褐色土面が南北方向にあり、畦の痕跡と考えられる。東側にも同様の痕跡が南北方向に残存していた。南西側にも、幅60cm程の带状の淡黄褐色土面が東西方向に1m程残存して、東側辺に繋がる痕跡が確認された。これら畦の痕跡に区画された水田跡と考えられる。埋土は、灰褐色土に淡黄褐色土が混じる状態のものである。底面は、標高-80cm前後で、灰色土の混じりが少ない黄褐色土となっていた。この中央付近で、埋土が灰色土のSDR41501が、水田の埋土面で南北方向に検出されている。

SXs41502：東西辺約4.3m、深さ約5cmの水田跡で、南北軸方向は、N-2°-Eを測る。南側辺は、作道の北側沿いにあり、西側に、SXR41501の西側から繋がる畦の痕跡が約5.5m残存する。この痕跡が途切れ、そのすぐ東側に作道まで繋がる幅30cm程の畦の痕跡が約6m確認された。SXR41501南側畦までの南北辺は、約11.5mを測る。西側畦が途切れて、畦の位置が不整合な関係にあるため、途切れる付近から東西方向への畦があった可能性も想定される。南側半部の底面が北側半部の底面より5cm程低くなっていることから、南北辺6m程の2区画(A・B)の可能性も考えられるが、畦の痕跡は確認できなかった。埋土は、灰褐色土に灰色土が混じる状態のものである。この埋土上面で、作道北側沿いのSDs41001の繋がりが途切れた。

また、この区画の東側も、同様の灰褐色土が広がり、SXs41501の東側に屈曲する約5cmの段差が検出されている。この段差は、SXs41501の東側から検出長さ約1.5m分が、SDs41001の北側辺と約1.2mの間隔でほぼ平行し、検出長さ約1m分が北東方向へ屈曲する部分がある。さらに東方向へ、検出長さ約2m分が、SDs41001の北側辺と約2.2mの間隔でほぼ平行している。この段差は、SXs41501との前後関係は不明であるが、SXs41502の東辺付近まで繋がっていたと仮定すると、南側辺が屈曲部までの推定長4m程の区画(C)と、さらに屈曲部から東側への別区画(D)の存在を想定させることになる。

SXs42001：東西辺約3.8m、深さ約10cmの水田跡で、南北軸方向は、N-2°-Eを測る。SXs41502の西側に位置し、北側辺は、幅60cm程の带状の淡黄褐色土面があり、南北辺約11.5mの区画と考えられる。暗灰色土の埋土を掘り下げて、南半部でSKs42003・SKs42004・SKs42005が検出されている。東側辺の畦の不整合があることから、南北辺6m程の2区画の可能性も考えられる。西側には、作道から北方向へ直交する、幅3.5m程の畦畔状の淡黄褐色土面が検出されている。この畦畔状の面は、南側で約3.8m、北側で約3.2mを測る。

SXS43001：検出した東西辺が約5.2m、深さ約5cmの水田跡で、南北軸方向は、N-3°-Eを測る。西側は、SXS43501により切られている。東側辺は、畦畔状の淡黄褐色土面で、SDs43001の北側辺にほぼ接して、発掘区北端まで約9mが検出され、発掘区外へ続いている。東辺では、南東隅から北へ約2.5mで、幅30cm程淡黄褐色土面が西側への張り出した部分があり、東西方向の畦の痕跡とも考えられる。この痕跡の想定延長線上に、SXS43501の南側辺が位置することから、東西方向の畦と仮定すれば、検出長さ約5.2mの区画(A)と、SDs43501の北側辺にほぼ接する南側辺約4.5m程の区画(B)とが想定される。南側辺約4.5m程の区画(B)を掘り下げて、SXs43002やSKs43001が検出されているが、これら遺構の埋土と水田の埋土との区別はできなかった。







SXS43501：南側辺が、SDs43501の北側辺より北へ、約2.5mの間隔では平行して検出されている。東南隅から約6.3mの位置で、検出長さ約30cmが北西方向へ屈曲し、さらに西方向へ約5.9m続く。西側に、幅約30cmの淡黄褐色上面が北方向へ約5m残存し、畦の痕跡と考えられる。東辺は、SXS43001の埋土面で切り合い関係が確認され、SXS43001より後の水田と判断された。東南隅から約6.3mの位置で、約30cm屈曲し、この北方向に段差の痕跡があり、西側が3cm程深くなっていた。仮に、この屈曲部と段差が、区画の痕跡であるとすれば、南側辺が約5.9mの区画(A)と約6.3mの区画(B)が想定されるが、埋土の区別はできなかった。南側辺が約5.9mの区画(A)は、深さ約8cmの水田跡で、西側辺の南北軸方向は、N-3°-Eを測る。南側辺が約6.3mの区画(B)は、深さ約5cmの水田跡で、南北軸方向は、N-4°-Eを測る。

SXS44501：東西辺約9.2m、深さ約5cmの水田跡で、南北軸方向は、N-3°-Eを測る。SXS43501の西側に位置し、東側辺は作道付近まで続き、その検出長さは約9mある。南側辺は、約6.5mが作道沿いに接して西側へ繋がり、1m程が北方向に屈曲し、さらに約1.5mが西方向に検出されている。西側辺は、約3mが検出され、この南西隅からSDT42501北側辺までの間隔は、約2mを測る。南側辺が屈曲する形状にあることから、東側辺から屈曲部までの約7.5mを一边とする区画(A)と、屈曲部から西側辺まで約1.5mを残存の一边とする区画(B)の2区画が重複する可能性が想定される。埋土の違いは、水がしみでる状態での調査であり、確認できなかった。

SXR45001：検出長さ約9mの東側辺が検出され、深さ約5cmの水田跡と考えられ、東側辺の南北軸方向は、N-0°-Eを測る。また、この東側も、淡黄褐色土が多く混じるものの、灰褐色土の広がりがあり、水田として使用されたと思われる。

## (5) D区の遺物

D区では、須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗、中世～近世施釉陶器、焼き締め陶器、輸入磁器などが出土している。近世陶器はほぼ全域に広がり、近代磁器も若干出土している。

SDT42501：須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗、中世～近世施釉陶器、近代磁器などの小片が出土している。11は、体部はやや膨らみもち、口縁部はくの字状に折り曲げている。12は近世の指輪である。14は加工円盤、指輪の体部を加工している。13は土釜である。

SKR44001：灰釉陶器、土師器、山茶碗の小片が出土している。

SDs41002：土師器片が出土している。

SDs42501：土師器と山茶碗の小片が出土している。

SDs43501：土師器鍋片が出土している。

Ps44001：須恵器、尾張系山茶碗が出土している。

Ps45501：鉄絵皿片と肥前系と思われる磁器片が出土している。

SXR41501：灰釉陶器、尾張系山茶碗が出土している。

SXS41502：須恵器、土師器鍋、尾張系山茶碗が出土している。3は、須恵器の高髹である。底部から胴部にかけて鋭角に折れ、その屈折部はやや突出し、体部には流水文が施されている(図3.3)。

SXS42001：灰釉陶器、土師器鍋、尾張系山茶碗などが出土している。山茶碗では、図化していないか無

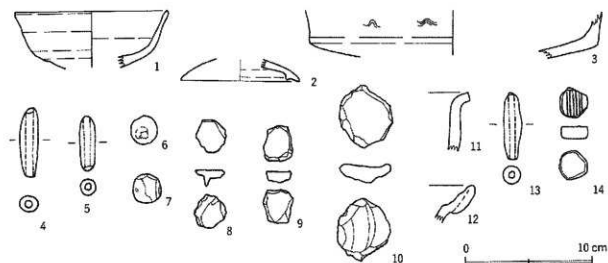


図42 □区出土遺物

高台の碗がある。

SKs42003：無高台の尾張系山茶碗が出土している。

SKs42005：尾張系山茶碗片が出土している。

SXS42501：尾張系山茶碗片が出土している。

SXS43001：土師器、灰釉陶器、山茶碗、施釉陶器、常滑窯甕（壺）、白磁玉縁碗の小片、陶丸（7）などが出土している。

SXS43002：須恵器杯（1）が出土している。

SXS43501：須恵器、灰釉陶器、土師器皿・鍋、山茶碗、常滑窯甕（壺）、施釉陶器などが出土している。2は須恵器杯蓋で短いかえりが付いている。

水田・床土：陶丸（6）、土釜（4・5）、3点の加工円盤（8～10）が出土している。10は尾張系山茶碗の高台部を加工しているが大型である。

（注1）同様の蓋は名古屋市緑区にあったNN104号室から出土している。1967 岡本俊博「黒石古窯群N-1号窯」『見晴台のおっちゃん斎日記』1985 より

## (6) D区のみまとめ

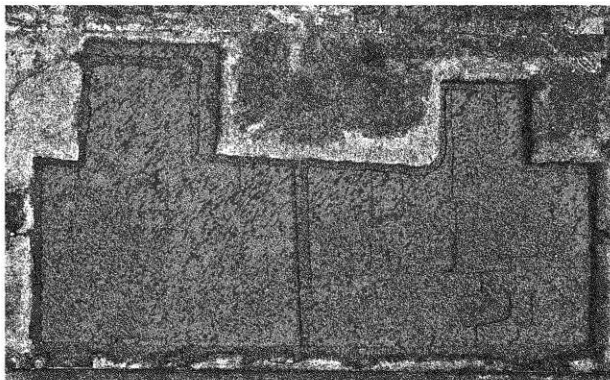
現代の水田面と床土を掘り下げて、発掘区南側で東西方向に幅約2mの帯状に広がる、黄褐色土が確認された。この面の両側に、直径5cm程の小穴が列状に続き、その北側と南側に灰褐色土の広がりか確認された。小穴列の方向は、概ねN-86°-Wを測る。帯状に広がる黄褐色土は、灰褐色土等の塊が多く含み、積まれた状態を示すことから、『地籍図』に記載された作道の跡と判断される。この積み土は、土層断面の観察から、高さ5～10cm、幅1.5m程が残存していた。現代水田面は、標高-50cm前後で、作道の積み土面は、標高-70cm前後で検出されている。また、形状から水田跡と想定した方形遺構の底面は、標高-80～85cm前後である。

方形の形状から想定した水田跡は、重複する位置関係で現代まで使用されているため、遺物が混在し

区画の時期を明確にできなかった。また、埋土の切り合い関係も、水がしみでる状態での調査であったため、充分な把握ができていない。水田の床土となる黄色土面を目安とした場合、床土面の痕跡2層が土層断面から観察でき、現代の水田跡と近世頃の跡、さらに、近世頃の跡より下に水田跡の存在が想定される。近世頃の跡は、作道にほぼ接した北側と南側に広がる2層目の床土までのもので、それより前の跡は、作道の北側に分布する畦等により区画されたものと思われる。区画を想定させた畦は、積み上げられた畦畔でなく、近世頃の跡の床土面付近と思われる黄褐色土面、均質な土が帯状に続く部分である。また、現代の水田は、作道の南側にある小穴から木枕材がほとんど出土しないことから、木枕材が撤去された作道を含めて全体に広がるものと思われる。

発掘区東側にあるSDs41001は、作道南側から2m程間隔で、ほぼ平行して作道北側辺沿いに位置し、さらに西方でも同様の位置にSDs43501が検出されているため、平均幅50cm程、底面標高-80cm程の水路と考えられる。この溝は、『地籍図』には水路の記載がないため、作道が造作された時期より古い段階の遺構の可能性が考えられる。また、SDs41001はSXs41502(B)の埋土面で確認されたため、SXs41502(B)よりも新しい段階の遺構の可能性が考えられる。

方形遺構の在り様から水田跡を想定したが、検出した遺構は、水路や畦等を含めた水田遺構としての全体像を明確にできる内容にはなっていない。しかし、SXs44501(B)の西側からSXs41502(C)の南東隅付近までの直線距離は、約43mを測り、そのほぼ中間にSXs43501(A)の東側辺が位置している。短辺が5m程の方形遺構が、比較的集中した区域を検出できたことなどから、あくまでも推論によるが、二時期の水田区画の可能性があると考えられる。



□ 区画全貌

## (7) E区の遺構

SB02：PP56501・PP56504・PP57016・PP57008・Po57002・PP57012：直径約30～40cm、深さ約20～45cmの類似した形状の柱穴が、標高-70cm程の褐色上面で6基確認された。建物の規模は、PP56501-PP56504、PP57012-PP57016、Po57002-Po57008、PP56501-PP57012、PP56504-PP57016の中心間が約2.65m、Po57002-PP57012とPP57008-PP57016の中心間が約2.15mある。南北方向間が約2.65mの一箇、東西方向に約2.65mと約2.15mの二間である。建物面積は、約12.72m<sup>2</sup>(約4.8×2.65m)になる。また、東西長軸方向は、N-78°-Wを測る。周辺にも柱穴と想定できる穴が多くあるが、建物をしての配列を確認できなかった。

SDN54502：幅約1.4m、深さ約5cm、検出長さ約1.1mの溝。北側は、発掘区外へ繋がり、南側は、土坑(SKn54501・SKn54502)の上面で埋土の区別が不明瞭となって途切れる。また、この溝の東側辺に接して、厚さ約4cm、幅約40cmの黄褐色土面が検出され、SKn54501の南東隅付近まで続き、水田の畦の痕跡とも思われる。その方位は、N-6°-Eを測る。

SDO54501：最大幅約70cm、最小幅約40cm、深さ約5cm、検出長さ約3.4mの溝で、方位は、N-84°-Wを測る。西側は、SXn55001の南東隅で途切れ、東側は、SXO54001に切られる。埋土は、淡灰色砂質土である。

SDn56001：最大幅約1.3m、最小幅約1m、深さ約25cm、検出長さ約19mの溝で、方位は、N 75°-Wを測る。西側は、発掘区外へ続き、東側は、土坑(SXO56001)等により不明瞭となり、中央排水路付近で途切れる。溝の北側辺は、標高-75cm程の黄褐色土層面で検出され、この土層が北方向へ広がっている。埋土は、黒褐色土で、13世紀代の山茶碗や小皿が出土している。



E区全景

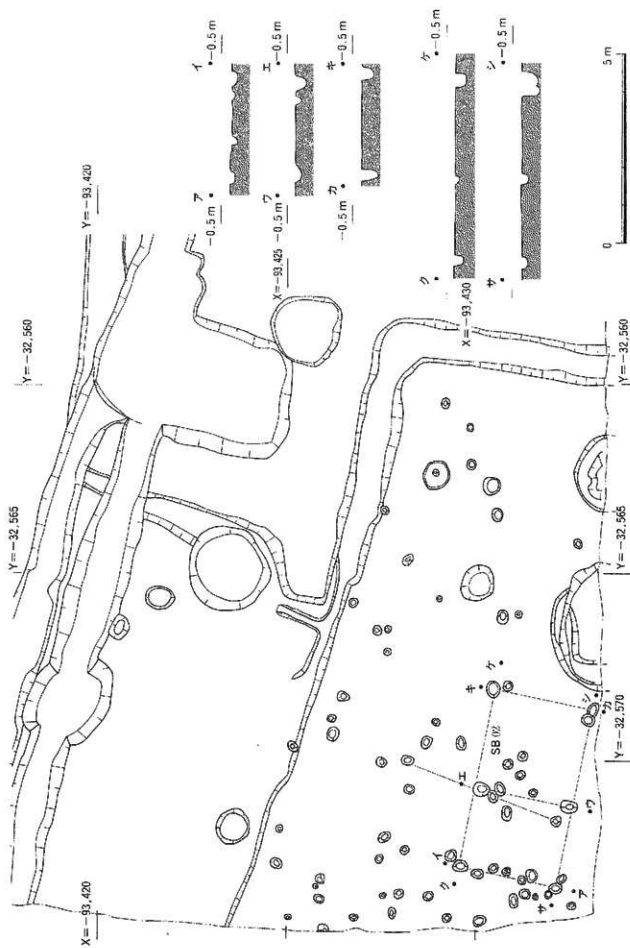
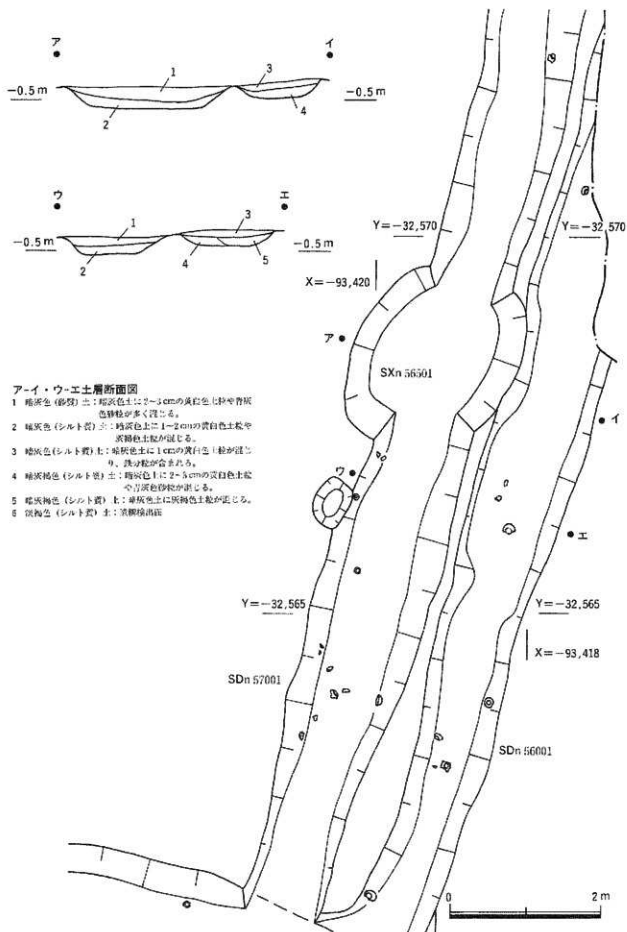


図4 E区建築物(SB12)等



## ア・イ・ウ・エ土層断面図

- 1 暗灰色(砂質)土：暗灰色土に2-3cmの黄白色(粒や青灰色砂粒が多く混じる。
- 2 暗灰色(シルト質)土：暗灰色土に1-2cmの黄白色土粒や黄褐色土粒が混じる。
- 3 暗灰色(シルト質)土：暗灰色土に1cmの黄白色土粒が混じり、鉄分粒が含まれる。
- 4 暗灰色(シルト質)土：暗灰色土に2-3cmの黄白色土粒や青灰色砂粒が混じる。
- 5 暗灰色(シルト質)土：暗灰色土に灰褐色土粒が混じる。
- 6 黄褐色(シルト質)土：黄褐色土層

図44 SDn 56001・SDn 57001

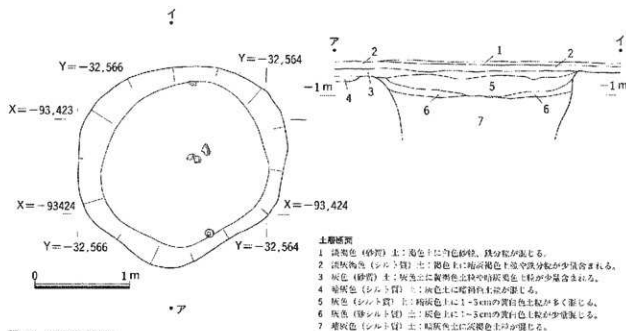


図5 SEO5600

SDn57001：最大幅約1.5m、最小幅約1m、深さ約30cm、検出長さ約13mの溝で、方位は、N-75°-Wを測る。西側は、発掘区外へ続き、東側は、土坑(SXO56001)等により不明瞭となり途切れる。SDn56001の南側に並行している。埋土は、黒褐色土で、13世紀代の山茶碗や小皿が出土している。

SDN54001・SDN54501・SDo55503・SDo55504：いずれも、幅30cm、深さ5cm程の溝で、方位は、N-0°-Eを測る。現代の水田床土面で検出され、田起こしの跡と推定される。

SEO56001：長径約2.3m、短径約2m、検出面の標高は-80cm程である。検出面より約60cmの深さで、内径約1mの円柱状になってさらに深くなっている。木枠は見発見されていないが、木片が散見された。未掘であるが、井戸と思われる。

SEP56001：直径約2m、検出面の標高は、-70cm程で、木枠は見発見されていないが、検出面より約50cmの深さで木片が散見され、灰色の埋土がさらに深くあるため井戸の可能性はある。未掘。

SKn54001：長辺約2.7m、深さ約5cmの楕円形土坑で、方位はN-0°-Eを測る。西側辺は、SKn54002と重複しているが、その前後関係は明確にできなかった。14世紀代の山茶碗などが出土している。

SKn54002：短辺約2.3m、深さ約5cmの方形土坑で、軸の方位は、N-62°-Wを測る。

SKn54501：長辺約3.5m、短辺約2.2m、深さ約5cmの長方形土坑で、方位は、N-7°-Eを測る。

SXO54001：長辺約4m、短辺約1.2m、深さ約10cmの方形土坑で、方位は、N-84°-Wを測る。西側がSDO54501と、東側がSXO53501と重複する位置関係にあるが、その前後関係は不明である。

SKo55001：長辺約2.7m、短辺約1.5m、深さ約15cmの長方形土坑で、長軸方位は、N-67°-Wを測る。検出面は、黄褐色土で、標高-85cm程を測る。

SXn55501：発掘区北側中央で検出された、長径約1.8m、深さ約5cmの楕円形土坑。

SKo55501：直径約1.8m、深さ約60cmの円形土坑。埋土は、黒褐色土で、山茶碗や小皿が出土している。

SXO56001：長辺約6.3m、短辺約3.4m、深さ約15cmの方形土坑。長軸方位は、N-16°-Eを測る。



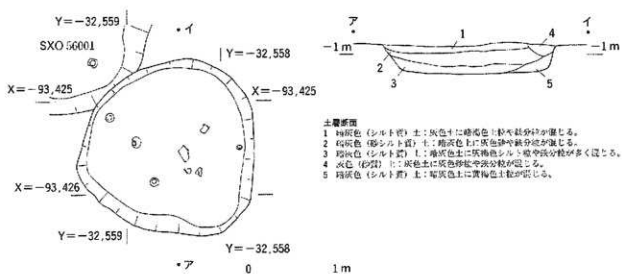


図 46 SKO 55501

埋土は、黒褐色土で、山茶碗や小皿が出土している。

SKO56501：長径約 80 cm、短径約 60 cm、深さ 15 cm の楕円形土坑。

SKP56501：長径約 3.4 m、深さ約 35 cm の土坑。検出時の形状は、円形状に見受けられたが、一段掘り下げると方形になった。

SKP56502：長径約 1 m、短径約 85 cm、深さ約 35 cm の楕円形土坑。埋土は、黒褐色土である。

SXn56501：長径約 2.5 m、短径約 2 m、深さ約 30 cm の楕円形土坑。SDn57001 と重複する位置にあり、土層断面の観察から、SDn57001 より新しい遺構と判断される。長軸方位は、N-63°-W を測る。

SKO57001：長径約 90 cm、深さ約 40 cm の円形土坑である。検出面は、方形状遺構 (SXO56502) を約 10 cm 掘り下げた黄褐色土面 (標高-80 cm 程) である。

SXO53501：東西辺の検出長さ約 6.5 m、南北辺の検出長さ約 5 m、深さ約 20 cm の水田跡。東方向へ発掘区外に広がり、南北辺が不明瞭となり途切れるが、北方向へもおそらく発掘区外へ広がると思われる。

東西辺の方位は、N-77°-W を測る。

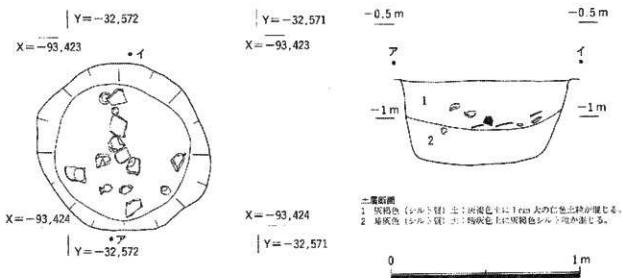


図 47 SKO 57001

SXP54001：東西辺の検出長さ約13.2m、南北辺の検出長さ約11.3m、深さ約15cmの水田跡。発掘区東端で、東北隅付近と推定される緩やかな屈曲があり、発掘区東側土層断面に類似する埋土が観察されないことから、東西辺の推定長さは、14m程と思われる。南方向へ発掘区外に広がり、南北辺の方位は、N-12°-Eを測る。この方形形状遺構の範囲は、『地籍図』で畑と記載される部分に対応できるため、明治中期以降に水田化が進められたと考えられる。また、西側辺沿いに、幅60cm程の茶褐色土が畦畔状に残存していた。この畦状遺構は、茶褐色土上に灰褐色土粒が混じり合うもので、高さ約5cm、検出長さは約13mを測り、北端は不明瞭となっていた。

SXO54501：東西辺の長さ約3.2m、南北辺の検出長さ約12.8m、深さ約15cmの長方形形状遺構。SXP54001の床土の下面（標高-75cm）付近で検出されている。埋土は、灰色土に黄褐色土粒が多く混じる。西側辺は、SXP54001の西側辺とほぼ同じ位置になり、南北辺の方位は、N-12°-Eを測る。

SXn55501：東西辺の検出長さ約7m、南北辺の検出長さ約4m、深さ約20cmの長方形形状遺構。東西辺の方位は、N-78°-Wを測る。水田床土等をさらに5cm程掘り下げて、黄褐色上面（標高-80cm）で検出された。埋土は灰色土に黄褐色土粒が多く混じる。西側辺は排水溝付近で不明瞭となるが、東側辺は発掘区外に続き、水田跡の可能性がある。

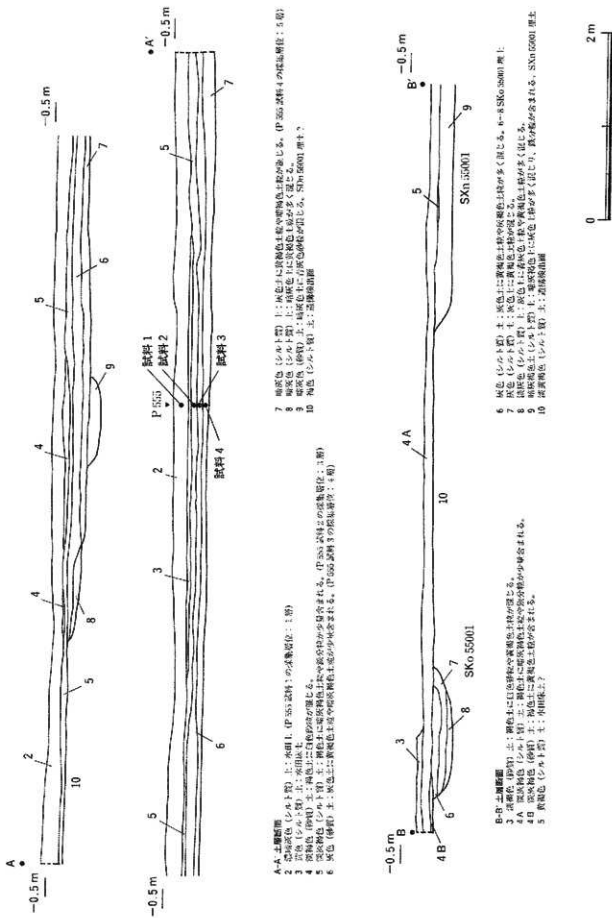
SXo55501A：東西辺の長さ約9m、南北辺の検出長さ約12m、深さ約10cmの長方形形状遺構。南北辺の方位は、N-8°-Eを測る。埋土は、灰色土に黄褐色土粒が多く混じる。東側辺は、幅60cm程の畦畔状遺構に接して、東北隅付近までが確認された。西側辺は、水田床土を掘り下げた褐色土面（標高-70cm）で、長さ約5mが検出されている。検出時の西側辺は、北方向への繋がり不明瞭で、西北方向へ屈曲する形状となるため、別の長方形形状遺構（SXo56501）と重複する位置関係にあるが、その前後関係を明確にできなかった。なお、西側辺を検出した褐色土面は、発掘区南西側に広がり、この面で多数の穴が検出されている。『地籍図』を参照すると、褐色土の広がる範囲の形状が、畑と記載される部分に対応でき、その北側と東側に鍵の手形状に広がる水田が記載されているため、これら長方形形状遺構が近世頃の水田跡と考えられる。

SXo55501B：東西辺の長さ約6.5m、深さ約10cmの長方形形状遺構。SXo55501Aを10cm程掘り下げると、その西側辺等から90cm程内側に、さらに段差が検出され、10cm程深くなる。同様に、SXo55501Aを10cm程掘り下げた東側辺から1.5m程内側でも段差が検出され、厚さ10cm程の灰色土が埋土となる。底面は、標高-90cm程の淡黄褐色土である。

SXo56501：東西辺の検出長さ約8m、南北辺の検出長さ約8m、深さ10cmの方形形状遺構。南西隅付近が、1.5m程西へ張り出した形状になる。この西側に、幅約20cm、検出長さ1.2m程の黄褐色土層が残存し、畦状になっていた。また、南側辺や西側辺や北側辺の内側でも、SXo55501Aの検出状況と類似した段差があり、厚み約10cmの灰色土が埋土となる範囲は、SXo55501Aと同一の遺構の可能性もある。東西辺の方位は、N-78°-Wを測る。底面は、標高-90cm程の淡灰青色土で、床土の痕跡と思われる黄褐色土の残存が観察された。

SXo56502：南側辺が、標高-70cm程の褐色土面で検出された。深さ約15cmの長方形形状遺構。北側辺は、おそらく溝（SDn56001）の北側辺沿いと思われる。埋土は、灰色土に黄褐色土粒が多く混じる。東側に幅約20cm、検出長さ1.2m程の黄褐色土層が残存した畦状遺構が残存しているが、ここまでの検出長





A-A' 土層断面  
 2 赤褐色(シルト質)土：水田土。IP 355 試料：のり敷層位：1層)  
 3 灰色(シルト質)土：水田底土  
 4 深褐色(シルト質)土：褐色土に自他砂質土混じる。  
 5 深褐色(シルト質)土：褐色土に暗褐色土混じり少量含まれる。IP 355 試料2の採取層位：3層)  
 6 灰色(砂質)土：灰色土に黄褐色土混じり少量含まれる。IP 592 試料3の採取層位：5層)

B-B' 土層断面  
 2 深褐色(砂質)土：褐色土に黄色砂質土混じり少量含まれる。  
 4A 深褐色(シルト質)土：褐色土に暗褐色土混じり少量含まれる。  
 4B 深褐色(砂質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。  
 5 黄褐色(シルト質)土：水田底土)

7 暗褐色(シルト質)土：褐色土に暗褐色土混じり少量含まれる。IP 355 試料4の採取層位：5層)  
 8 深褐色(シルト質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。  
 9 深褐色(砂質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。SKo 55001 試料)  
 10 褐色(シルト質)土：湖沼堆積層

6 褐色(シルト質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。n-SKo 35001 覆土  
 7 褐色(シルト質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。  
 8 深褐色(シルト質)土：褐色土に黄褐色土混じり少量含まれる。  
 9 暗褐色(シルト質)土：暗褐色土に灰色土混じり少量含まれる。SKo 55001 覆土  
 10 深褐色(シルト質)土：湖沼堆積層

図 48 E-A'・B-B' 土層断面図

さは、約8mである。さらに、SXo55501Aの西側辺までの検出長さは、約15.5mを測り、埋土はSXo55501Aに類似している。東西辺の方位は、N-72°-Wを測る。

柱穴群：発掘区南西側で、水田床上の下層(標高-70cm)に褐色土層面が残存し、60程の穴が検出されている。直径や深さが20cm以上の穴が多くある。Po57010から小皿、PP56503から山茶碗の完形品が出上しているため、柱穴の多くは、13世紀代頃の遺構であろうと推測される。

## (8) E区の遺物

SE056001：出土遺物の量は多くない、主に尾張系山茶碗が出上している。37の内側には薄く煤が付着している。小皿はすべて小皿Bに入るが、比較的底径の小さいもの(38・39)と大きいもの(40~42)がある。

SKO57001：土師器皿・鍋、山茶碗、施釉陶器、常滑製品などが比較的まとまって出土している。11は碗B、15は皿Cである。16は土師器皿、17は古瀬戸花瓶、18は黒灰色を呈した甕の底部である。常滑製品と考えられる。

SKo55001：山茶碗、常滑製品などが出土している。碗Cの小片がある。

SKo55501：土師器、尾張系山茶碗、常滑製品などが出土している。1は碗B、2は碗C、4~6は小皿Bである。2の山茶碗の底部は、外側全体に粘土が貼られている。7は、片口の皿と思われる。底部から体部にかけてかなり厚くなり、外側底部端に浅い凹線がある(註11)。8は焼き締め陶器の甕か壺の頸部、9は胴部片である。SKo55001からも同個体と思われる常滑製品が出土している。10は鍋Bである。

SKP6501：尾張系山茶碗、小碗、施釉陶器の甕、土師器、加工円盤などが出土している。26・27は小碗である。山茶碗(19~25)は全体を復元できるものはないが、体部の立ち上がりは比較的丸い。31は甕である。加工円盤(29・30)は山茶碗の高台を加工している。

SEP56001：尾張系山茶碗(32~35)が出土している。32・33は碗Bである。

SKP56502：山茶碗、施釉陶器などが出土している。43は古瀬戸天日茶碗である。

SKn54001：土師器、山茶碗、施釉陶器などが出土している。山茶碗は尾張系と東濃系がほぼ同量ある。45の山茶碗は底径がかなり小さく、体部は外側に開くように立ち上がる。碗Dである。小皿(46)は小皿Cである。

SKn54501：土師器、山茶碗などが出土している。44は羽釜である。

SKn54502：土師器、山茶碗が出土している。

SDn56001：主に、尾張系山茶碗が出土している。その他、常滑製品の小片などが出土している。円化したのは山茶碗(47~52)で、碗Bである。

SDn57001：主に、尾張系山茶碗が出土している。その他、土師器鍋、常滑窯窓、白磁片などがある。山茶碗(54・55)は碗B、小皿は(57~60)が小皿B、62が小皿Cである。61は鉢である。63は白磁玉縁碗、64は常滑窯の甕片、65は鍋Bである。66は、SDn56001かSDn57001から出土した碗Bである。出土遺物は62を除けば、およそ13世紀後半代までになり、両溝の時期差はみられない。なお、この溝の検出面付近では東濃系の小皿などが出土しており、また、埋土中に、東濃系山茶碗はないことから遺構は確認できないが、溝の埋った後、何らかな土地利用があり、62の小皿もそれに伴うと推測される。

SDn54001：山茶碗（73）、古瀬戸折縁深皿（70・71）が出土している。70は端部を丸くし、71は端部を水平にしている。

SDN54501：土師器、須恵器、山茶碗などが出土している。72は小皿Cである。

SDo57001：74は面子である。（遺標はSXo56502の上面にあったが消滅）

Po56513：山茶碗片、鉢（67）が出土している。

PP56503：土師器鍋片、碗B（68）が出土している。

Po57010：小皿B（69）が出土している。

その他、調査区東側にある柱状の穴からは、土師器鍋片、尾張系山茶碗片が出土している。

SXO53501：山茶碗、中世～近世陶器などが出土している。112の加工円盤は小碗の底部を加工したものである。

SXO54001：灰釉陶器、山茶碗、施釉陶器などが出土している。78は碗D、79の加工円盤は砂岩を加工している。

SXP54001：土師器、山茶碗、常滑製品、施釉陶器、近世～近代陶磁器などが出土している。80は山茶碗の底部である。

SXO54501：土師器、山茶碗、施釉陶器、常滑製品などが出土している。75は小皿C、77は天日茶碗、76は大窯期の播鉢である。

SXn55001：須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器、常滑製品などが出土している。82は須恵器杯、ハの字に開く高台がつく。83は小皿B、84は古瀬戸折縁深皿、85は羽釜で口縁は内傾している。86の加工円盤は山茶碗の高台を加工している。

SXo55501：須恵器、土師器、灰釉陶器、施釉陶器、常滑製品、中川製品や近世にいたるまでの遺物が多く出土している。101～103は小皿B、104は小皿Cである。105は鉢の口縁部で、胎土は黒灰色を呈し、長石粒が多く含まれている<sup>(42)</sup>。加工円盤は、108は施釉陶器片、109は山茶碗の高台部分、110は磁器の底部、111は常滑製品、112は小碗の底部である。

SXO56001：須恵器、土師器、灰釉陶器、施釉陶器、白磁片などが出土している。87は碗B、88・89は小皿Bである。91～93・95は加工円盤、91・93は山茶碗高台、92は体部、95は小皿の底部を加工している。

SXn56501：土師器鍋、山茶碗、鉢が出土している。81は碗Bである。

SXo56501：須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、常滑製品、施釉陶器などが出土している。90は小皿B、94は常滑製片を利用した加工円盤である。

SXo56502：須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、施釉陶器、青磁片などが出土している。96は山茶碗の底部、97は底部がやや突出した小皿である。加工円盤は、98は山茶碗高台、99が小皿の底部から体部の屈曲している部分を加工している。

水田・床土：須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、常滑・瀬美製品、施釉陶器などが出土しているが、小片が多い。122は折縁深皿、123は銅皿、124は播鉢で、いずれも古瀬戸と思われる。126は105と同じような胎土の鉢、127・128は鍋A、129は鍋Bである。加工円盤は、大部分は山茶碗を利用しているが、141・142は常滑製品、143は播鉢である。

- (注1) 名古屋市天白区 NN302 号室では、器種は違つか同様の調整のみられる片口鉢がある。1992 名古屋市見晴台考古資料館・NN302 号室・NN304 号室発掘調査報告書。名古屋市教育委員会
- (注2) 瀬戸市笠松東堂で同様の片口鉢が出土している。1991 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』瀬戸市歴史民俗資料館

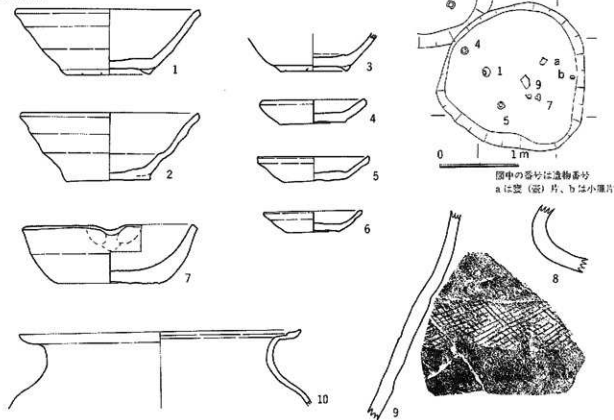
#### (9) E区のみとめ

発掘区の南西側に、建物跡があり、柱穴と2条の溝から13世紀代の山茶碗が出土していることから、13世紀代の屋敷地が存在した可能性がある。柱穴を検出した褐色土層面は、水田床土を掘り下げた標高-70cm程にあり、主に発掘区西半側に広がって残存していた。溝は、発掘区中央付近で途切れ、屋敷地を区画する形状になっていないが、溝の南側に遺構が集中している。また、溝は2条あり、溝の北側にも褐色土の広がりが残存している。そのため、溝の北側にも、屋敷地が存在する可能性も考えられる。E区では他の区に比べ遺物では東濃系山茶碗、古瀬戸が多く出土し、遺構では土坑が多く、14世紀代には土坑が分布する地区であったと推測される。

近世頃に、「地籍図」の畑となっている範囲で褐色土が残存し、水田となっている範囲は鍵の手状に褐色土が削除されたと考えられる。鍵の手状に広がる方形遺構は、SXo56502やSXo55501Aが近世頃の水田跡と思われるが、SXo55501Bなどはさらに下層にあたる。土坑の出土遺物から、SKP56501が12世紀後半から13世紀始め頃、SKO57001・SKP56502・SKn54001が14世紀頃に埋まったと考えられる。これら土坑が埋まった後に、水田化が発掘区中央で進められ、その痕跡が、SXO53501・SXO54501・SXn55501の長方形遺構として確認されたと考えられる。

富田荘の方に類似する遺構は少なく、SDO54501・SXO54001がN-84°-W、SKn54501がN-7°-E、SXo55501AがN-8°-Eを測る程度である。建物跡がN-78°-Wの方位を、屋敷地に関連すると思われる溝(SDn56001・SDn57001)もN-75°-Wの方位を測るため、土地割が自然地形等の影響により、制約を受けたものと思われる。

SKo 55501



SKO 57001

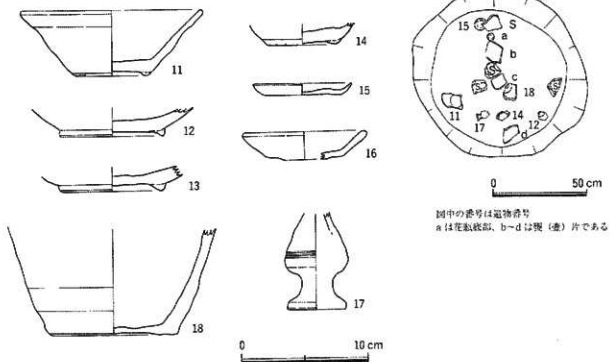
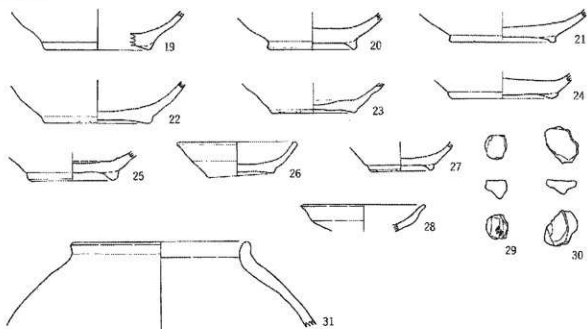


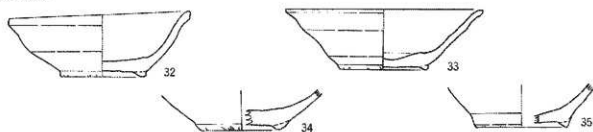
図50 E区出土遺物(1)



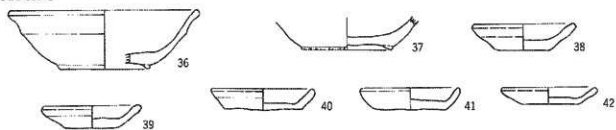
SKP 56301



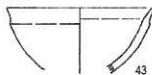
SEP 56901



SEO 56001



SKP 56302



SKn 54501



SKn 54001

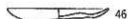
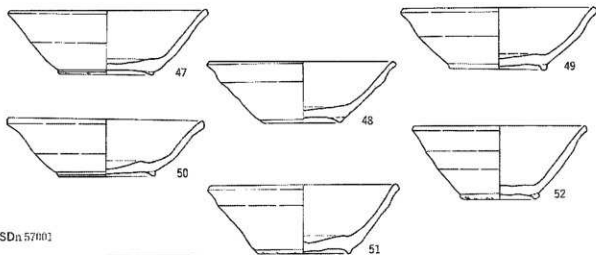
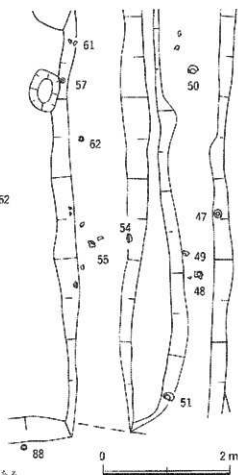
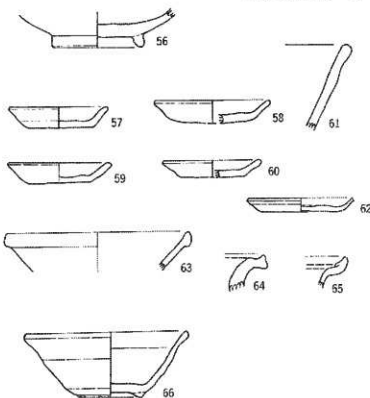
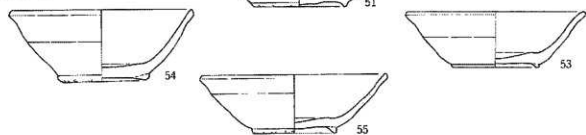


图5: E区出土遺物

SDn 56001



SDn 57001



図中の番号は遺物番号  
番号のないものは土器碗の破片である

図52 E区出土遺物③

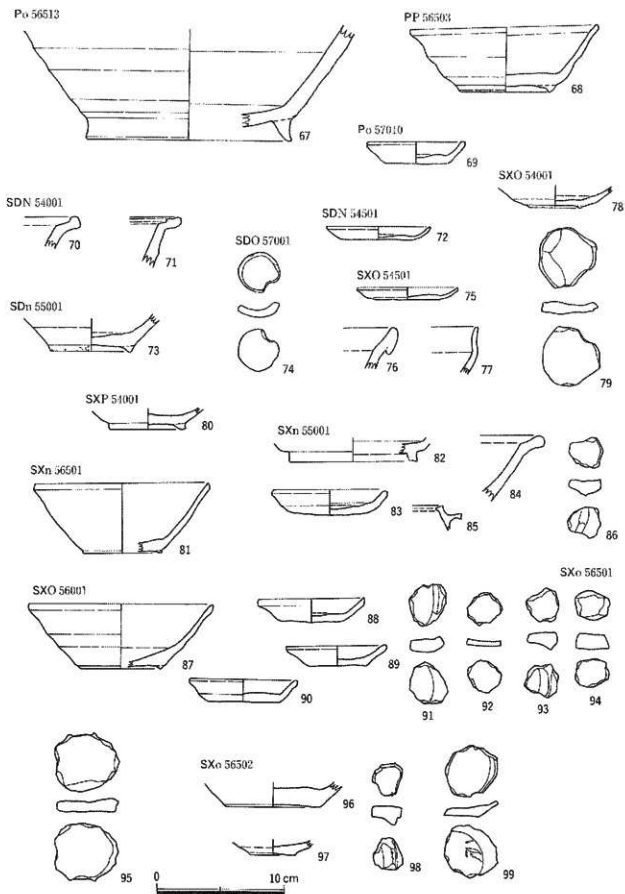
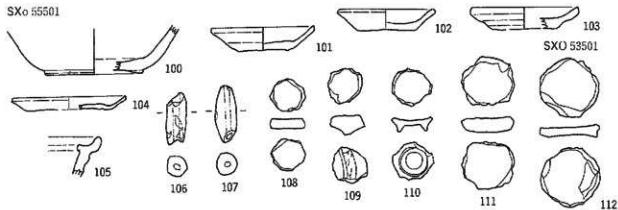


图 53 E 区出土遺物(4)

SXo 55501



水田・床土など

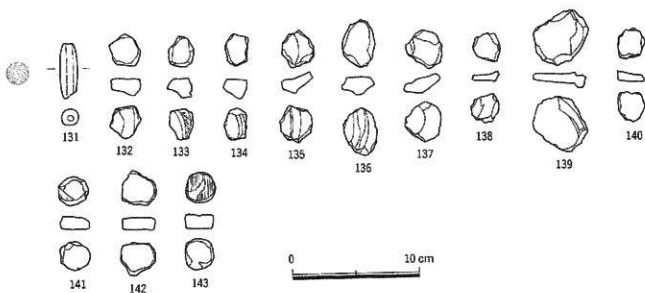
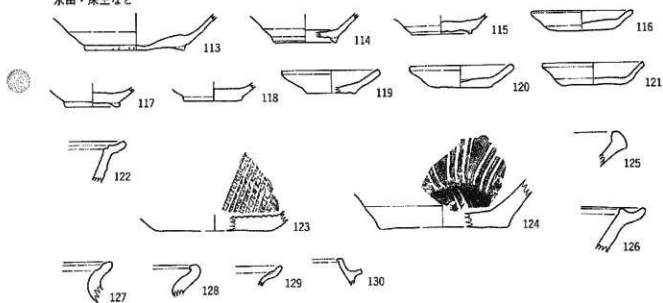


図54 E区出土遺物⑤

00 F区の遺構

SDq49001A・SDq49001B：幅約50cm、深さ約10cmの溝で、SDq49001Aの検出長さ約8.2m、SDq49001Bの検出長さは約1.8m。方位は、N-2°-Eを測る。SDq49001Bは、SDq49001Aと約40cmの間隔をとり、発掘区外へ続く。これら溝は、約25~40cmの間隔で、溝の東側の方形造構に沿った位置にある。

SDQ50501：最大幅約80cm、最小幅約40cm、深さ約5cmの屈曲する溝。発掘区中央北側で、南北方向に検出長さ約2mを測り、東へ検出長さ約1.8mが屈曲している。南北方位は、N-3°-Eを測る。

SDr52501：最大幅約1.2m、最小幅約50cm、深さ25cm程、検出長さ約18.5mの溝。南北方位は、N-2°-Eを測る。標高-75cm程の黄褐色土層面で検出されている。底面の標高は、北端が約-1m、南端が約-1.1mで、南方向へわずかに傾斜がある。『地籍図』を参照すると、この付近に水路が記載され、これに対応できる溝と思われる。また、陶管が残存する箇所(SDr52502)にあり、近代も使用されていたと思われる。

SDr52001：最大幅約40cm、最小幅約30cm、深さ約10cm、検出長さ約14.5mの溝。方位は、N-8°-Wを測る。発掘区の南西側沿いに位置し、西側は発掘区外へ続く。溝の南側沿いに、直径約5~10cmの小穴が多数検出されている。検出面は標高-75cm程の黄褐色上層で、小穴の在り様から、おそらくD区で検出された畦畔に繋がるとと思われる。

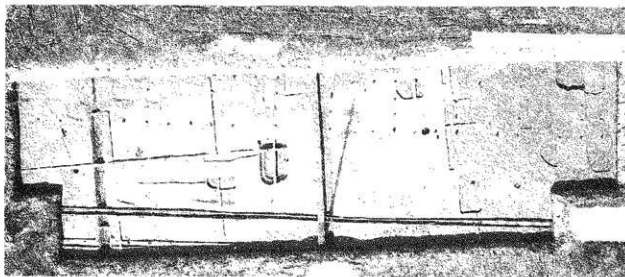
SXq48001：短辺約3m、深さ約25cm、北側が発掘区外へ続く方形土坑。南北方位は、N-4°-Eを測る。埋土は、灰色土に黄褐色土の塊が混じる。

SXR47501：長辺約6.3m、短辺約2.5m、深さ約5cmの方形土坑。南北方位は、N-3°-Eを測る。

SKR48001：長径約4m、短径約2.7m、深さ約10cmの楕円形土坑。

SXr49001：長辺約4m、短辺約2m、深さ約10cmの方形土坑。長軸南北方位は、N-4°-Eを測る。標高-90cm程の青灰色土層面で検出され、埋土は灰色土である。

SKq49501：長径約2.6m、短径約2.2m、深さ約10cmの楕円形土坑。標高-85cm程の黄褐色土層面で検出され、埋土は灰褐色土である。



F区全景

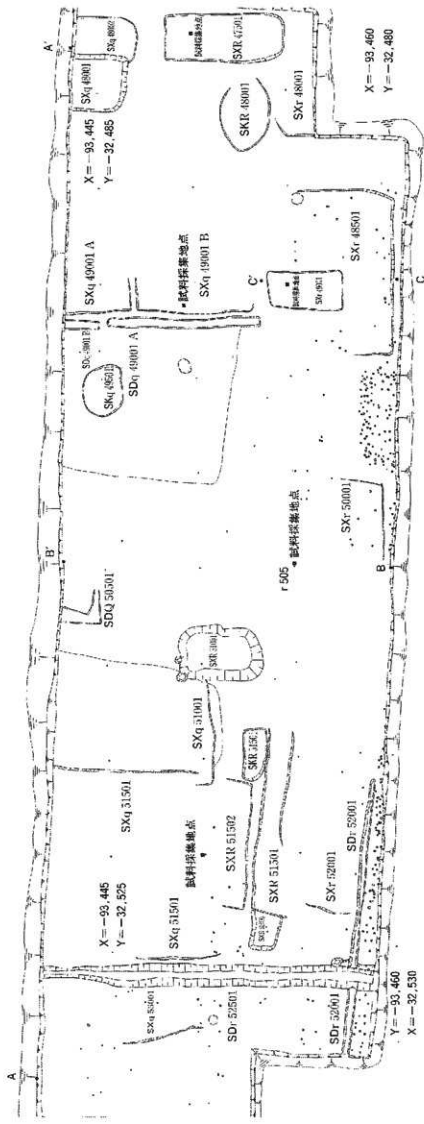


图 55 F 区平面图 (1:200)

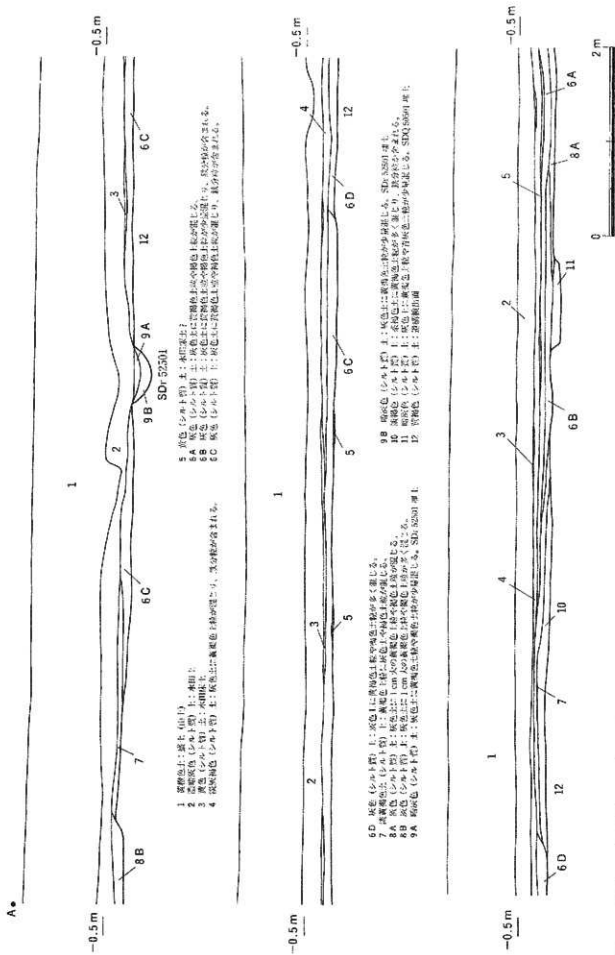


図 56 F 区 (A-A') 土層断面図 (No. 1)

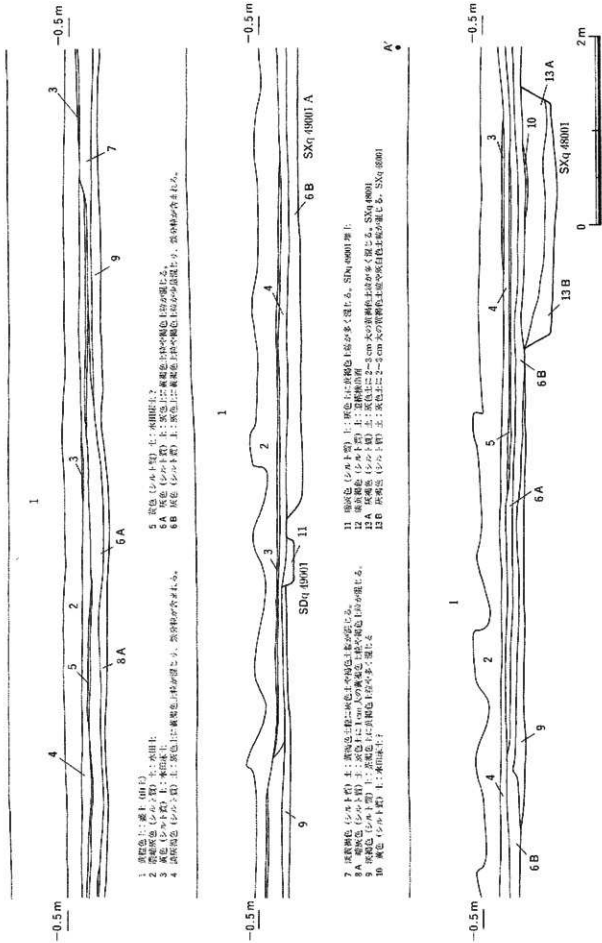
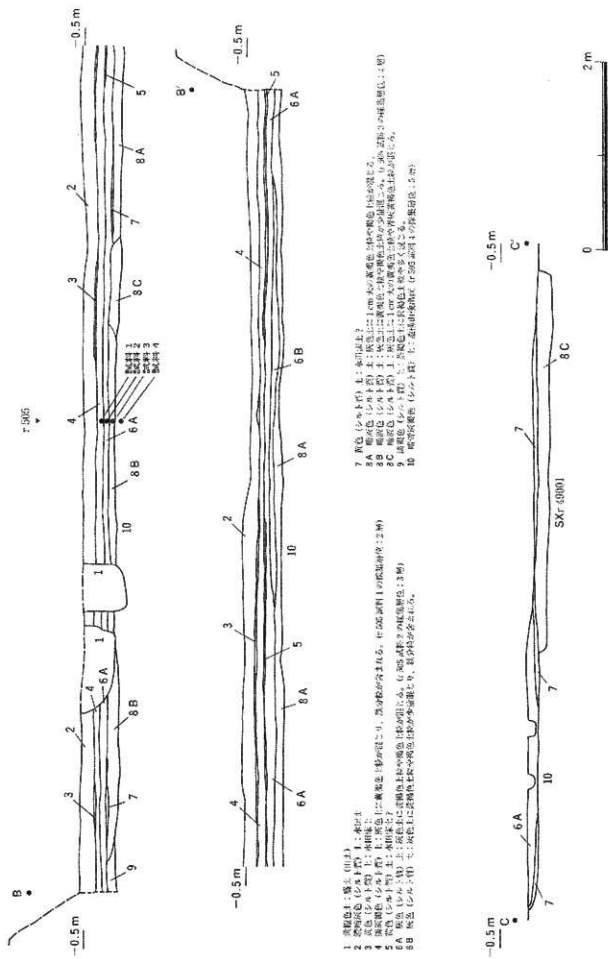


図 57 F 区 (A-A') 土層断面図 (No. 2)





1 黄褐色土：腐土(0.3)  
 2 腐植腐土(シルト質)土：赤土  
 3 灰色(シルト質)土：赤土  
 4 黄褐色(シルト質)土：灰土  
 5 灰褐色(シルト質)土：灰土  
 6A 灰褐色(シルト質)土：腐植腐土の腐植層(3層)  
 6B 灰褐色(シルト質)土：腐植腐土の腐植層(3層)  
 7 灰褐色(シルト質)土：赤土  
 8A 腐植腐土(シルト質)土：赤土  
 8B 腐植腐土(シルト質)土：赤土  
 8C 腐植腐土(シルト質)土：赤土  
 9 腐植腐土(シルト質)土：赤土  
 10 腐植腐土(シルト質)土：赤土

図58 F区(B-B'・C-C')土層断面図

SXR51001：長辺約4.4m、短辺約3m、深さ約40cmの方形状土坑。長軸東西方位は、N-3°-Eを測る。埋土は、灰色土で、下層に鉄分粒が混じる。

SKR51501：長辺約2.7m、短辺約1.25m、深さ約15cmの方形状土坑。長軸南北方位は、N-87°-Wを測る。

SXR52003：短辺約1.4m、深さ約5cmの方形状土坑。東側は、SXR51501と重複する位置にあるが、その切り合いは不明瞭であった。

SXR48001：西側辺約1.5mが、標高-90cm程の青灰色土層面で検出され、発掘区外に広がる深さ約5cmの方形状土坑。北西隅が検出されるが、北側辺は不明瞭となっていた。

SXR48501：南側辺約8.5m、東側辺約5mが、標高-80cm程の黄褐色土層面で検出された。残存の深さ約5cmの水田と思われる。長軸東西方位は、N-88°-Wを測る。

SXq49001A：西側辺検出長さ約3.5m、残存深さ約5cmの水田と思われ、発掘区北側外へ広がる。

SXq49001B：西側辺約6.2mが、標高-85cm程の黄褐色土層面で検出された。残存の深さ約5cmの水田と思われる。南北方位は、N-2°-Eを測る。北側辺は、約1.8mが確認された。北側にSXq49001Aがあり、その間に幅30cm程の黄褐色土が残存し、畦の痕跡と考えられる。西側も溝(SDq49001A・SDq49001B)との間隔が30cm程あり、畦状に黄褐色土が確認された。

SXR50001：東西辺約3.5mが、標高-85cm程の黄褐色土層面で検出された。残存の深さ約5cmの水田と思われる。長軸東西方位は、N-90°-Wを測る。

SXq51001：東西辺約5.5mが、標高-85cm程の黄褐色土層面で検出された。残存の深さ約5cmの水田と思われる。長軸東西方位は、N-90°-Wを測る。

SXq51501：東側辺約7.5m、西側辺約4.5mが、標高-80cm程の黄褐色土層面で検出された。南北方位は、N-3°-Eを測る。残存の深さ約8cm、東西約9.8mの水田と思われる。

SXR51501：東西辺検出長さ約9.5m、西側辺検出長さ約2mが、標高-85cm程の黄褐色土層面で検出された。東西方位は、N-83°-Wを測る。残存の深さ約5cmの水田と思われる。

SXR51502：東西辺約6.6m、東側と西側辺の検出長さ約2mが、標高-85cm程の黄褐色土層面で検出された。東西方位は、N-85°-Wを測る。残存の深さ約5cmの水田と思われる。南側に、SXR51501があり、その間に、黄褐色土と茶褐色土が混じりあう厚さ約3cmの土層が確認され、畦の痕跡と考えられる。

SXR52001：西側辺の検出長さ約2.5mが、標高-80cm程の黄褐色土層面で検出された。残存深さ約4cmの水田の痕跡と想定される。

SXq53001：西側辺の検出長さ約4.3mが、標高-80cm程の黄褐色土層面で検出された。

## III F区の遺物

SDr52001：須恵器、灰釉陶器、山茶碗片などが出土している。

SDr52501：上輝器、山茶碗、古瀬戸、常滑窯甕、いぶし瓦片などが出土している。3と4は加工円盤である。3は常滑窯甕(甕)の胴部を、4は近世染付皿片を加工している。

SDr52502：須恵器、灰釉陶器、山茶碗、近世陶器、近代磁器などが出土している。

SXR51001：尾張系山茶碗、施釉陶器などが出土している。

SXR51501：土師器、尾張系山茶碗、施釉陶器などが出土している。

SXR51502：須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器などが出土している。

SXR52003：山茶碗片などが出土している。

SXR48501：尾張系山茶碗、施釉陶器などが出土している。

SXR47501：土師器、山茶碗片などが出土している。

SXq51501：須恵器、土師器、山茶碗、施釉陶器、常滑・瀬美製品、土鉢（5）などが出土している。

水田・床土：須恵器、土師器、灰釉陶器、常滑製品、古瀬戸～近世の施釉陶器などが出土している。明治時代以降と思われる遺物も若干ある。1と2は、須恵器蓋である。1は、内側の口縁端部に段がつく。2は、口縁端部をくの字に折り返したものである。6の加工円盤は小皿の底部を加工している。

### ⑫ F区のみとめ

近年まで使用された水田の床土の下に、水田跡と想定される方形形状遺構の痕跡が確認されるが、全体に遺構密度が少ない。富田荘の方位に関連する遺構は、発掘区南側の近世頃の畦畔とその北側沿いのSDr52001や、N-83°-Wを測るSXR51501やN-85°-Wを測るSXR51502が検出されている。多くは、2～3度の方位を測るが、概ね土地割に制約を受けていたと思われる。また、発掘区北側の土層断面で、水田床土と想定される厚さ約1～2cmの黄褐色土が、2層残存する箇所が部分的に観察されたため、方形形状遺構がより古い水田跡の可能性も想定されるが、近年の水田化が進められたこと等により形状全体を確認できるものが少なく、規則性を明確に見出すことはできなかった。

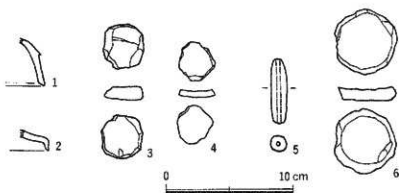


図59 F区出土遺物

## 第IV章 おわりに

千音寺遺跡の調査では、中世の屋敷地・土坑・溝、近世以降の水田・道などが検出されている。遺構の時期について、山茶碗の型式からみると

- 1 碗A・皿Aを主に出土するもの
- 2 碗B・皿Bを主に出土するもの
- 3 碗D・皿Cを主に出土するもの に分けられる。

1は、A区 SKe42501・SKD39006・PD38501、

B区炭化物中・SKk39501・SKk39502・SEj38501・SKk38501・SEK38001・SDK37502・SDJ39501

(下層)・PK39501・PK39502

C区 SDo42001

E区 SKP56501

2は、A区 SKD38501・SDd37001

E区 SE056001・SEP56001・SDn56001・SDn57001・Po57010・PP56503

2と3の間は、A区 SXd37002

E区 SKo55001・SKo55501

3は、A区 SDD37001 (下層)

B区 SXJ39005・SXL37502

E区 SKO57001・SKn54001・SKn54501・SKn54502

3までの間は、F区 SXR51001・SXR47501

3以降は、B区 SXk38001

1は、齋藤型式VII-3<sup>(註1)</sup>で12世紀後半から13世紀初頭、小碗もみられ、伊勢型鍋(鍋A)、渥美・常滑製品、白磁玉縁碗が伴うことがある。(次頁の法量分布図では、口径16 cm前後、器高5 cm程度)

2は、同VII-1・2で13世紀前半から中葉、伊勢型鍋(鍋B)、常滑製品が伴うことがある。(次頁の法量分布図ではかなりバラつきがあるが、1に比べ口径は小さく、器高が高い)

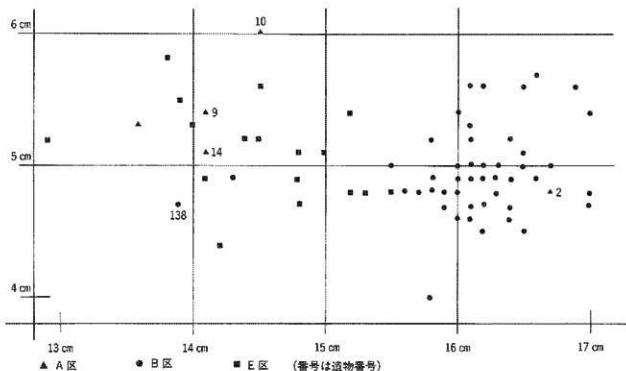
3は、碗の資料が少ないが、大畑大洞窯式新段階項<sup>(註2)</sup>で、占瀬戸製品が伴い、特に折縁深皿が多くみられることから14世紀から15世紀前半と思われる。SKP56502は時期のわかる山茶碗は出土していないが、犬目茶碗からこの時期に該当する。

これらから、12世紀後半頃、B区に屋敷地がつくられ、まもなく、A・E区に土坑がつくられる。13世紀になるとB区の屋敷は機能しなくなり、西側のE区に溝が掘られ、建物が建てられ、A区には引き続き土坑がつくられる。13世紀の後半頃にはE区の屋敷地の溝は埋まり始め、A区では上坑の上などに土が堆積する。14世紀になるとE区では新たに土坑がつくられ、A区でも溝が掘られている。また、D区・F区の水田下にある方形遺構もこの頃には埋まったと思われる。その後、近世までの間に、周囲の水田化が進み、居住地域は別の場所に移っていく。B区の屋敷地の配置は、西側に建物、東側に井戸、東側に空地がある。一方、E区の屋敷地では、建物の配置がすべて確定できないが、東側には空地がないと思われる<sup>(註3)</sup>。屋敷地の連続性については推測の域を出ないが、B区では、東や南側には連続していない<sup>(註4)</sup>。E区

では北側に連続している可能性がある。鎌倉時代初期までは、散在する在家や名屋敷などが確認され、集村化現象は、中世に広範囲にわたって進行したものであるといわれる<sup>(14)(15)</sup>。大小さまざまな自然堤防上に分布していた在家などがより規模の大きな自然堤防上に分布したと考え、B区・E区の屋敷地が散在する状態で、E区の土坑がつくられる時期に、上坑とあまり離れない周辺に集村したと想定することができる。延慶二(1309)年、台風による「遊浪」があったことが記録<sup>(16)</sup>されており、おそらくこのあたりも大きな被害を受けたと想像できる。14世紀代の遺構は、復興後のもので、遺跡の北側にある大きな自然堤防上に集村が存在する可能性や、あるいは、千首寺村への集村もある<sup>(17)</sup>。

遺構検出面の標高を比較すると、B区の屋敷地が標高-60 cm程、E区の屋敷地が標高-70 cm程であった。検出状況は、B区の屋敷地が島畑を掘り下げた検出であり、E区の屋敷地が近年まで使用された水田とその床下の下5 cm程を掘り下げた検出であった。また、A区の土坑は標高-55 cm程で検出されている。後世の土地利用により検出状況が異なるものの、残存状態での屋敷地が形成された面には、大きな標高差はない。一方、方形遺構の検出面は、E・D・F区が標高-80 cm程である。富田荘付近の土坑調査の結果から、この地域では古代にいったん施行された条里地割がその後、度重なる洪水によって荒廃し、埋没しているといわれており、新家裏から続く水田を想定し、調査区内の一部(D・E・F区)で、花粉分析、プラント・オパール分析を試みた。しかし、この地点では中世およびそれ以前の水田は確認できなかった。

島畑景観の形成時期は13世紀~14世紀頃と言われる<sup>(18)</sup>。屋敷地は、島畑として残された位置に残存していた。調査区付近の島畑景観は、明治17年頃の「地籍図」から推測することができ、発掘調査でも、複



山森院(遺構内出土)の土量分布図

数の島畑が検出され、「地籍図」中の畑の位置に相当するものもある。検出された島畑には、①島畑を構成している土の中から中世の遺物が出土し、下層で遺構が検出されることから近世以前（中世）に遺構の上に土が堆積したもの、②更に近世には島畑の周囲に土を掻き揚げているもの（島畑の周囲の上から近世の遺物が出土する）、③屋敷地以前の微高地で屋敷地が機能しなくなった後も水田にはならなかったものがある。①や②の場合は、古い時代の自然堤防などではなく、洪水などによって堆積したいわば新しい時代の微高地が畑地などとして使われていたと考えられ、中世以降も幾度か庄内内川の氾濫があり形成された可能性が高いと思われる。そのため土地利用についても、耕地は不安定な状態であり、水田ばかりでなく畠地が多くあり、荒地が広がるという状況のようである<sup>(註1)</sup>。

千音寺周辺は、中世の頃、どのような地域であったろうか。遺跡の範囲は、絵図に照らし合わせると、富田荘（新家里）の北側で北から西を流れる川に開かれた位置になる。かつて、庄内川の主流は遺跡の北側を流れていたが、絵図が書かれた頃にはわずかに末流を保っていただけといわれる<sup>(註2)</sup>。このかつての庄内川の南側に大きな自然堤防が形成されている。「絵図にある千音寺・嶋山郷などの地名は、北・西側の隣接所領として記入されていると読むことができる。尾張平野において12世紀後半より資料に顕われ、13世紀以降急速に増加する「村」は、多くは条里地帯からはずれた河川沿い・街道沿いの自然堤防上または後背湿地上に成立している。」<sup>(註3)</sup> という。「嶋山郷」という名が書かれている位置から自然堤防の付近がこの郷の中心地とみることは妥当ではなかろうか。

中世荘園の条里地割が、「富田荘」「新家里」の北側にあたる、千音寺の一带にも施行されていたと断定できないが、富田荘の北境が人為的につくられていることや条里地割の方向に類似する数値の遺構があることなどから、条里に規制される地割がされていたことには違いはない。しかし、調査区全体を支配するものではなく、主に12世紀後半代につくられた屋敷地が該当する。13世紀代～15世紀にかけての間は、むしろ他の（水利や微高地などの自然条件）制約を受けていると考えられる。その後、水田化が広がる中で、新家里との境に水路が作られ水路付近では新家里と同じ方向の水田がつくられたと思われる。それはD区やF区の水田区画やA・B区の島畑は条里地割方向と類似し、特に、島畑A-1と島畑A-2は、その南北軸方位がN-5°-Eを、東西辺がそれぞれ9mと11mを測り、北側辺はほぼ直線上に位置していたことから推測される。

条里地割の施行を中世以前に見出すことはできなかったが、須器や灰軸陶器が出土しているため、周辺において平安時代からの生活があったことは推測できる。

(註1) 斎藤孝正 1988 「中世遺跡家の研究-福年に関する一考察-」 『名古屋大学文学部研究論集C1・史学34』

(註2) 藤澤良祐 1994 「山形研究の現状と課題」 『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

(註3) 柱穴状の遺構は、井戸近くまであることや溝が南に曲がるような形状をしていることから井戸の東近くが屋敷地の境と推測できる。なお、1990 中村敬也 「西園の村」 『古代から中世へ』 古代史復元10 講談社に「建物の規模は、平安期と室町期には2×2間(5.1-5.8坪)が最も多く、鎌倉期は3×3間(7.5坪)が多い。須藤家邸は鎌倉期に登場、葺の幅は20、25、30メートル、坪10分の1、8分の1、6分の1の1区画に案分されている。屋敷内には土屋・納屋・倉庫などからなる数棟の竪立柱建物と井戸を有する。配置は、鎌倉期は屋敷地の北西半分建物に配し、南東半分を空地にする。室町期は南東半分建物と井戸を配し、北西半分を空地にしている。」とある。

(註4) B区の原敷地の東溝(SDK37502)より6mほど東に、同方向を向く溝(SDL37001)がある。両溝の間は固く締まった層であり、這とも思われたが、東の溝からは施和陶器が出土しており、時期差がみられる。

(註5) 1985 金田章裕 『糸里と村落の歴史地理学研究 第四章 古代・中世の村落形態とその変遷』

1990 中村敬也 『西國の村』古代から中世へ 古代史復元10 講談社に、「山口県下石川通跡は、佐波川に沿った平地に展開する造形で、平安時代から室町時代(12世紀初頭～16世紀後半)にいたる中世期の集落が中心である。古代糸里の聚落ととも、糸里区画への居住地の造出、糸里地割に規制されたつづ、農地を転用し、宅地化を進めていった中世期農村集落の典型的な例である。平安後期になると、東部と西部にそれぞれ2つずつの集落群が生まれる。集落間の距離は600メートル。2つの小村の間には、耕地をはきんで家屋が散在し、かなりの非耕地が存在していたと考えられている。鎌倉時代になると、糸里の溝が再び掘りなおされている。耕地整備に力を入れ始め、糸里と集落の関係はさらに前代状況を拡大していく。集落の数はやや増えるが、家屋群は数を増し、耕地区画の中への造出に著しい。室町時代は、中核集落が登場する。稲産物数は数を増すが、稲産をもたない家屋群も2～3棟単位と小規模なものが急増し、小舎の分離独立に拍車がかかる。

(註6) E区の西側には福福川が流れ、E区との間に地階層では高畑が広がっている。絵図にかかれていた富田荘の建物の位置から、「14世紀前半頃は河濱沿いのおそらく自然堤防的な微高地を求めて、各種の屋敷が三々五々と点在していたと考えられるのに対し、その後、いくつかの相対的に大きな自然堤防などへ屋敷が集中し、さらに戸数がいちじるしく増大して後に見られるような大規模な集村が実現したものと考えられることになる。」また、絵図に音かれた集落の中には現在まったく存在しないもの、あるいは、反対に絵図にない集落があるという。1985 金田章裕 『中世の村落』『講座考古地理学 4村落と開発』

(註7) 1985 金田章裕 『糸里と村落の歴史地理学研究 第三章 糸里プランと土地利用』に、尾張国の島畑の初見史料は、応永六年(1399)の「森原安義等連習資券」で、14世紀末以来尾張に島畑が存在、また、13世紀中頃の太田国においても島畑存在の可能性を留保すべき資料があり、一方、12世紀中頃の尾張国安良荘など12世紀代では島畑景観は推定できないことから、島畑については、13世紀～14世紀頃に島畑景観形成の起源があるといわれる。水がかりのよくない自然堤防の部分では水田の「地下」をして島畑が形成され、自然堤防の周辺部から後背湿地の部分においては水田の一部に土を盛り上げて島畑が造成されたと考えられる。また、「14世紀末前後には、さまざまな畑作物がすでに微視対象となっており、また土地利用も集約化して二毛作が行われていたと推定されるようになり、しかも島が田と等しく評価されている例さえあった。島畑景観が出現したとしても、それが無理なく位置づけられるような状況であったといえよう。」とある。

(註8) 1988 村岡幹生 『新修名古屋市史 第二巻』第四章 第二節 葦野の開発 二に「海部郡大治町砂子の白社院の縁起に、絵図にある成願寺に関して「延慶二年七月十一日大風浪損甚夜三日にして四海船かならず、(中略)大浪申す限り無し、堂塔悉く打破たる事、激震のごとし」という記述が見られる。」

(註9) 1985 金田章裕 『糸里と村落の歴史地理学研究 第三章 糸里プランと土地利用』には「島畑の分布地について地表面の勾配が極めて緩やかであり、またこれらの地域には、自然堤防が発達していたかその他の理由によって、大体80センチメートル以下のわずかな起伏が存在する。さらに一般的には、水利事業の近代化以前は、水田の用水の不充分なところか、あるいは用水路の水位の低い地域であった」としている。」とある。また、安食荘の耕地の比率は33%、他の比率は21%とある。

1998 上村孝久子 『新修名古屋市史 第二巻』第一章第一節には、「12世紀後半の安食荘を例に見ると、自然堤防上は相地で、在家とよばれる住民の住居もこの自然堤防上に点在する。低湿地に水田が開かれていたが、水田は、莊園のうち中心となる糸里地域に限定しても半分以下の面積に過ぎない。これを上回る広さの畝があり、その大半は桑畑であった。低湿地の背後の極めて低い自然堤防をよくむ後背湿地には、若干の畝と在家がまばらにみられるが、多くは荒野であった。」とある。

(註10) 1998 『新修名古屋市史 第二巻』第四章 第二節 葦野の開発 図4-3 庄内川下流域の微地形分類図

(註 11) 1985 上村喜久子 「絵図にみる富田荘の開発と形成」『研究紀要(第24号)』名古屋短期大学

参考文献

- 1967 『岩波講座 日本歴史 中世』岩波書店
- 1981 『名古屋博物館常設展 尾張の歴史 展示解説Ⅲ 中世』名古屋博物館
- 1983 植崎彰一 「養蚕の福年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』愛知県教育委員会
- 1985 『考古地理学 4 村落と開発』学生社
- 1987 小山靖志 『中世村落と近世絵図』東京大学出版社
- 1989 『角川日本地名大辞典 23 愛知県』角川書店
- 1990 伊藤智偉 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history Vol. 1』三重歴史文化研究所
- 1990 松澤 勲 「濃尾平野の自然史地質」『東海の自然史』財団法人東海財団
- 1995 斎藤孝正 『須恵器集成目録 第3巻 東日本編』雄山閣出版株式会社
- 1995 中野晴久 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 1995 山本信夫 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 1995 『常滑焼と中世社会』小学館
- 1996 北村和宏 「尾張の「伊勢窯跡」」『納と鏡のデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 1996 青木 修 「旭淨水場窯跡」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第4輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 1997 『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第5輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター



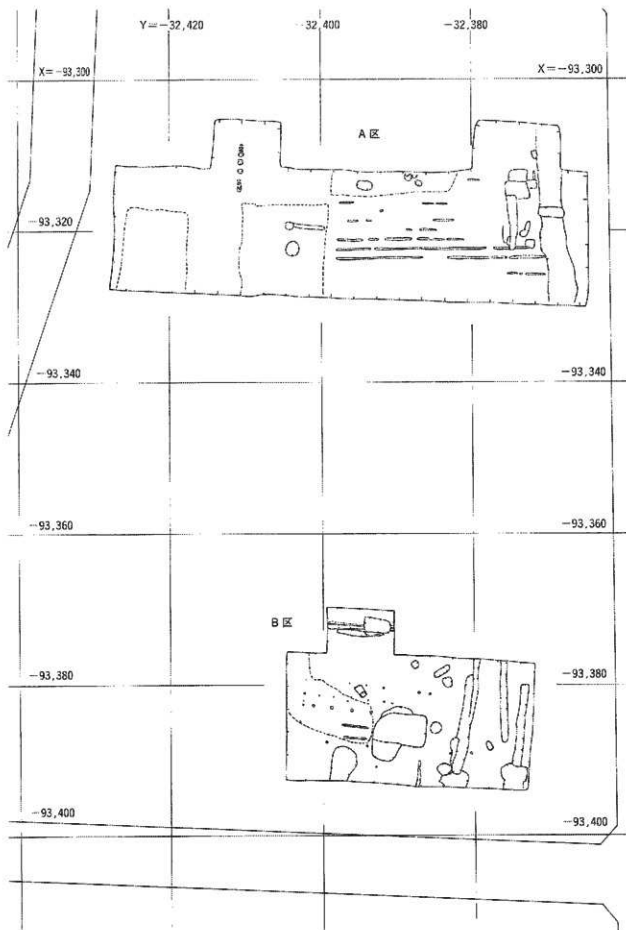


図61 A・B区遺構平面図

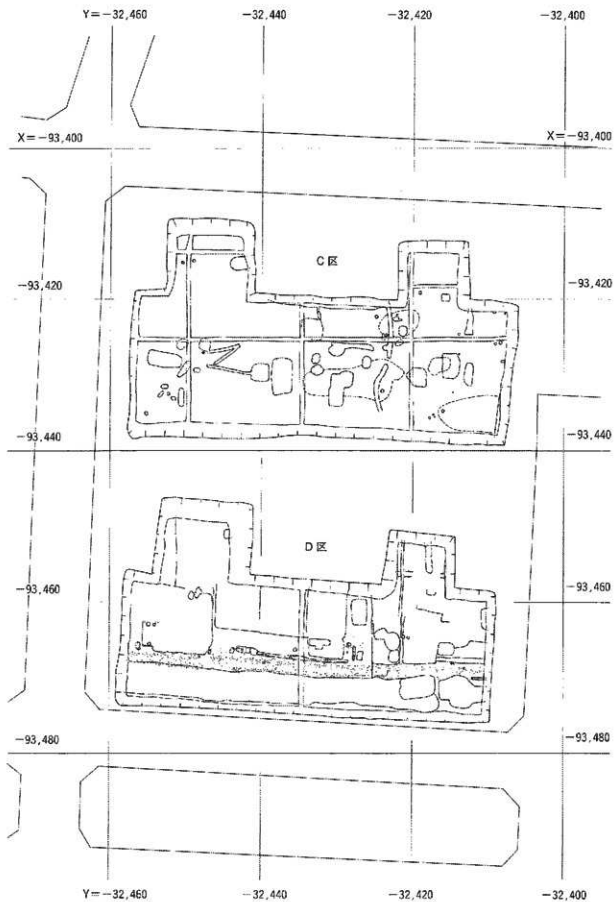


図61 C・D区遺構概略図

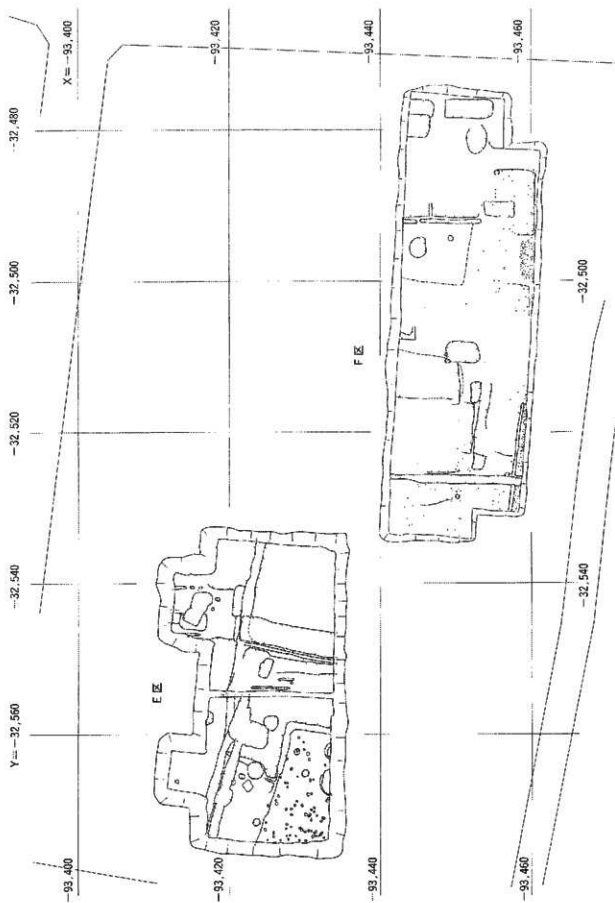


図 12 E・F 区高橋墓群図

主な遺構一覧表

遺構番号 SE (E400) 01の (E400) はグリッドを示す。

(A区)

遺構番号	規模 (cm)	方位	備考
SEE0001	200 185 赤土層		

遺構番号	長さ	幅	深さ	方位	備考
SD037001	510	20 (南側)		N 4° W	埋没長さ約 22.5m
	350	15 (南側)			
SK037001	135	254 (北側)			長さ約 7.2m
	80	254 (南側)		N-2° W	
SD040002	50	6		N-85° W	埋没長さ約 4.1m

遺構番号	長さ	幅	深さ	方位	備考
SK037001	115	65	10	N-11° W	
SK037001	740	-	15	N-90° W	
SKD07002	120	115	25	N 61° E	
SK060001	310	140	32	N-65° W	
SK070002	360	240	35	N-67° E	
SK070001	300	55	30	N-90° E	
SKE33001	100	70	10	N 82° W	
SKE37002	130	110	30	N-86° W	
SK037001	110	-	20	N-11° W	
SK038501	95	90	15	-	
SKD09000	190	130	49	N-85° W	
SKD09002	-	60	6		
SK040002	120	110	30		
SK041001	65	60	30		
SK041002	65	60	25		
SK041003	40	25	10		
SKD41001	75	65	30		
SKM41001	75	65	15		
SKD41001	180	55	20	N-4° E	

遺構番号	長さ	幅	深さ	備考
SKE37001 (500)			10	

遺構番号	長さ	幅	深さ	備考
PD00001	(30)	-	10	
PD00501	90	-	50	
PD00601	60	32	5	
PD00602	35	30	25	
PE00502	90	52	30	

(B区)

遺構番号	規模 (cm)	方位	備考
SB01	5.3 4.65	N-63° W	柱間 7.05m 2 礎、北側 4.05m 1 礎
			PK00006, PK00002, PK00001, PK00004, PK00002
SA01	7 11.75	N-85° W	PK00001, PK00002, PK00003, PK00004, PK00003, PK00002, PK00001, PK00003
SA02	4 3.85	N-7° E	PK00001, PK00004, PK00004
	(+1) (5.55)		PK00003 (P)00002
SA03	3 3.75	N-65° W	PK00001, PK00005, PK00005
SA04	5 19.8	N 82° W	PK00003, PK00004, PK00004
	(+1) (16.8)		PK00006, P00001 (P00002)

遺構番号	長さ	幅	深さ	備考
SEK00001	135	120		
SF00000	105	90		

遺構番号	長さ	幅	深さ	方位	備考
SD037001	-	-	30	N-0° E	埋没長さ 4.2m
SDL07000	135	130	40	N-6° E	長さ 11.2m
SD037001	120	90	50	N-0° E	埋没長さ 11m
SD037002A	90	55	20	N-6° E	埋没長さ 8m
SD037002B	150	120	25	N-10° E	埋没長さ 15.5m
SDJ00000	80	60	30	N-86° W	埋没長さ 9.2m
SDJ00003	75	20	10	N 84° W	長さ 6.2m
SDL00001	50	25	26	N-8° E	埋没長さ 3.0m
SD000001	25	20	5	N-81° W	長さ 3.7m
SD000002	20	15	5	N-85° W	埋没長さ 3m

遺構番号	長さ	幅	深さ	方位	備考
SK037501	130	85	13	N 18° W	
SK038502	235	80	20	N-67° E	
SKL00001	190	150	20	N-90° E	
SKL00002	330	-	25	N-90° E	
SKL00001	190	140	45		
SKK00001	180	90	20	N-30° W	
SKK00001	-	210	10	N-25° E	
SKK00002	-	340	45	N-10° E	
SKL00001	360	190	20	N 82° W	
SKL00002	260	-	20	N-89° W	
SKK00001	670	410	70	N-65° W	
SXJ00005	350	180	60	N-89° W	
SXK00001	770	400	15	N 22° E	

遺構番号	長さ	幅	深さ	備考
PK00001	30	30	20	
PK00002	30	25	25	
PK00003	40	30	15	PK00004 との間の 1.5m SA01
PK00004	35	30	10	PK00004 との間の 4.8m SA04
PK00005	20	24	10	PK00005 との間の 2.25m SA04
PK00006	18	15	15	PK00001 との間の 2.25m SA04
PK00007	20	15	15	PK00002 との間の 6.6m SA01
PK00008	22	18	10	
PK00009	25	25	20	
PK00010	28	20	10	
PK00011	32	28	8	
PK00012	35	21	10	PK00013 との間の 1.2m SA01
PK00013	32	20	10	PK00013 との間の 2.1m SA01
PK00014	20	20	10	PK00014 との間の 2.0m SA01
PK00015	25	20	20	PK00015 との間の 2.85m SA01
PK00016	22	20	20	PK00016 との間の 1.9m SA01
PK00017	28	25	25	PK00017 との間の 2.0m SA01
PK00018	20	28	30	PK00018 との間の 1.0m SA01, SA02
PK00019	25	20	30	PK00019 との間の 0.5m SA02
PK00020	30	20	25	PK00020 との間の 2.35m SA02, SA03
PK00021	32	25	30	SA02
PK00022	45	30	30	PK00022 との間の 2.05m SB01
PK00023	45	45	30	PK00023 との間の 2.65m SB01
PK00024	40	15	30	PK00024 との間の 2.45m SB01, SA03
PK00025	30	30	30	PK00025 との間の 1.4m SA03
PK00026	30	28	25	PK00026 との間の 5.3m SD01
				PK00026 との間の 4.65m
PK00027	28	35	25	PK00027 との間の 4.65m SB01
PK00028	25	22	20	
PK00029	18	18	20	
PK00030	22	20	10	
PK00031	22	28	15	

主な遺構一覧表

PK2806	25	30	30	円形5.01との間約2.4m
PK3607	20	15	25	
PK3808	30	18	5	
PK2909	28	26	10	
PK3010	25	20	20	
PK3511	25	15	15	
PK2901	28	22	30	
F43001	25	20	5	
F43002	15	15	10	PK4003との間約6.6m
F43003	10	10	15	PK2601との間約2.0m
F43004	30	30	8	
F43005	10	10	15	

(C.14)

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SDa0301	-	-	10	N-7°-E	横溝長約6.0m
SDO1101	115	45	10	N-0°-E	横溝長約2.2m
SDO4201	60	-	15	N-0°-E	横溝長約6.0m
SDa2901	70	60	10	-	横溝長約6.5m
SDa2401	70	50	15	N-83°-W	横溝長約5.0m
SDO4301	50	30	5	N-0°-W	横溝長約1.0m
SDO4302	-	-	8	N-57°-W	横溝長約1.0m
SDa4301	20	35	5	N-78°-E	横溝長約4.4m
SDa1002	35	30	5	N-35°-E	長さ4.2m
SDa4303	35	10	N-78°-W	横溝長約6.0m	
SDa4304	80	-	10	N-50°-E	横溝長約2.5m
SDa6901	80	-	10	N-0°-E	横溝長約2.0m

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SKa2001	110	-	25	N-67°-E	
SKa2002	75	75	15	N-85°-E	
SKP2401	220	170	25	N-0°-E	
SKa3001	250	90	20	N-90°-W	
SKa4401	180	130	10	N-80°-E	
SKa4401	150	150	10	N-18°-E	
SKa5001	160	120	10	N-50°-E	
SKa1301	250	170	20	N-0°-E	
SKP1401	200	200	5	N-0°-E	
SKP1401	120	200	10	N-0°-E	
SKO1901	-	-	20	N-0°-E	
SKP4301	470	270	10	N-0°-E	
SKP4401	240	220	10	N-0°-E	
SKa6901	150	200	10	N-80°-W	

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
PO4001	30	-	10		
PO4001	50	40	30		
PO4002	60	60	10		
PO4003	25	-	5		
PO4100	25	15	15		
PP1100	20	-	5		
PP1101	40	15			
PP1101	40	-	15		
PP4101	20	25	10		
PP4102	15	-	10		
PP1103	25	20	10		
PO4201	15	25	10		
PO4302	25	30	5		
PO4203	35	40	10		
PP1104	35	40	5		
PP4301	35	30	10		
PP4502	35	60	10		
PP4601	70	50	5		
PP4602	35	45	5		
PP4801	100	48	5		

PP4904	35	60	10
PP4901	30	45	10

(D.1)

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SDa11001	65	50	10	N-90°-W	横溝長約0.5m
SDa1002	25	-	5	N-90°-W	横溝長約1.0m
SDO41501	80	75	10	N-2°-W	横溝長約1m
SDa1101	25	30	5	N-1°-W	横溝長約1.0m
SDT1201	250	400	5	N-80°-W	横溝長約41m
SDa11501	55	40	5	N-84°-W	横溝長約15m
SKa4302	100	80	10	N-88°-W	横溝長約3m

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SKa12001	170	100	20	N-2°-E	
SKa12004	250	200	10	N-8°-W	
SKa1905	160	140	10	N-6°-E	
SKa1201	120	70	10	N-10°-E	
SKa2502	55	45	10	N-45°-W	
SKa12001	160	-	5	N-83°-W	
SKa1101	50	45	10	N-6°-E	
SKR1101	150	-	10		

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SXS1001	-	120	10	N-1°-W	
SXT4001	130	2	N-0°-E		
SKR1101	550	-	5	N-0°-E	
SXR1101	130	-	5	N-0°-E	
SXR1101	220	170	10	N-0°-E	
SXR1102	430	110	5	N-2°-E	
SXT1101	460	290	20	N-3°-E	
SXT41501	900	-	10	N-0°-E	
SXS2201	380	130	10	N-2°-E	
SXS12002	230	-	5	N-0°-E	
SXS2301	200	240	10	N-0°-E	
SXS2001A	500	5	N-5°-E		
SXS2001B	420	-	5	N-5°-E	
SXS2501A	500	-	8	N-3°-E	
SXS2501B	630	-	5	N-4°-E	
SXR4401	-	-	5	N-0°-E	
SXS2501	320	-	5	N-2°-E	
SXR4501	-	-	5	N-0°-E	

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
Pa1502	50	30	5		
Pa1501	-	10	10		
Pa1301	70	30	10		
Pa1501	65	35	5		
Pa1801	45	40	5		
Pa1501	90	65	5		

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SA31	5~10	15~	N-80°-W	径1.2~1.3m; 軸部の軌跡	

(E.1)

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SB02	4.8	2.65	N-70°-W	径4.85m×2.15mの圓柱 径4.25m; 深	
				PP5601, PP5601, PP5701E, PP5700, PP5702, PP5701C	

遺構番号	最大幅	最小幅	深さ	方位	備考
SDN7001	38	30	5	N-0°-E	横溝長約1.5m
SDN54501	38	30	5	N-0°-E	横溝長約2.1m

SDs5503	39	25	5	N-0°	-E	出土長約2m
SHs5504	30	25	5	N-0°	-E	出土長約5m
SDNs492	740	-	5	N-6°	E	出土長約1.1m
SDOs161	76	10	5	N-84°	-W	出土長約3.4m
SDs6901	120	100	25	N-75°	-W	出土長約19m
SDs5701	150	100	30	N-75°	-W	出土長約13m

長径 短径 深さ

SEOG601	210	200	-	-	-	-
SHs5601	200	-	30	-	-	-

北辺 短径 深さ 長軸方向

SKs5407	276	-	5	N-0°	-E	-
SKs5402	-	230	5	N-42°	-W	-
SKs5501	350	220	5	N-7°	-E	-
SAOs491	400	173	10	N-84°	-W	-
SNs5501	270	150	15	N-67°	-W	-
SXs5501	180	-	5	-	-	-
SKs5501	180	-	10	-	-	-
SXs5601	630	340	15	N-18°	-E	-
SKs5601	80	90	15	-	-	-
SKOs5602	80	45	45	-	-	-
SKP5631	330	-	35	-	-	-
SKP5632	190	85	35	-	-	-
SXs5501	250	300	20	N-63°	-W	-
SKOs794	90	-	40	-	-	-

東西辺 長さ 深さ 長軸方向

SKOs5301	650	500	20	N-77°	-W	-
SKP5491	1250	1130	15	N-12°	-E	-
SXOs4501	120	1280	15	N-11°	-W	-
SXs5801	710	400	20	N-78°	-W	-
SKs5901A	930	1200	10	N-8°	-E	-
SKs5901B	630	-	10	-	-	-
SKs5801	890	890	10	N-78°	-W	-
SKs5802	850	-	14	N-72°	-W	-

長径 短径 深さ

Po5601	32	21	20	-	-	-
Po5602	24	24	8	-	-	-
Po5603	19	18	5	-	-	-
Po5604	28	22	12	-	-	-
Po5605	16	20	24	-	-	-
Po5606	24	20	12	-	-	-
PP5601	36	36	15	-	-	-
PP5602	25	22	5	-	-	-
PP5603	16	16	12	-	-	-
Po5631	26	22	13	-	-	-
Po5632	20	25	22	-	-	-
Po5633	30	14	14	-	-	-
Po5634	30	23	15	-	-	-
Po5635	25	29	30	-	-	-
Po55708	34	28	30	-	-	-
Po5637	24	29	18	-	-	-
Po5638	26	25	18	-	-	-
Po5639	28	25	26	-	-	-
Po5610	30	24	28	-	-	-
Po5611	21	16	16	-	-	-
Po5612	25	20	22	-	-	-
Po5613	30	22	15	-	-	-
Po5614	38	30	18	-	-	-
PP5631	42	35	30	PP5634との間約2.05m SB02	-	-
				PP5632との間約2.65m	-	-
PP5632	28	26	22	-	-	-
PP5633	35	29	20	(同前例)北	-	-
PP5634	40	26	45	PP5631との間約2.65m SB02	-	-

PP57016	45	26	20	PP57016との間約2.95m	-	-
PPs606	48	18	20	-	-	-
PPs597	26	24	25	-	-	-
PO5707	44	36	50	-	-	-
POs602	29	18	12	-	-	-
POs703	20	11	20	-	-	-
POs041	22	18	22	-	-	-
POs602	40	30	26	PP57008との間約2.65m SB02	-	-
				PP57012との間約2.15m	-	-

Po5703	24	22	11	-	-	-
Po5704	28	24	10	-	-	-
Po5705	25	24	22	-	-	-
Po5706	33	16	8	-	-	-
Po5707	24	18	18	-	-	-
Po5708	35	28	16	-	-	-
Po5709	24	22	14	-	-	-
Po5710	28	26	12	-	-	-
Po5711	28	-	30	-	-	-
Po5712	24	24	30	-	-	-
Po5712	12	10	10	-	-	-
Po5711	26	21	10	-	-	-
Po5715	28	22	5	-	-	-
PPs701	35	28	40	-	-	-
PPs602	32	24	18	-	-	-
PPs700	33	21	17	-	-	-
PPs704	22	22	10	-	-	-
PPs705	36	22	24	-	-	-
PPs706	22	18	22	-	-	-
PPs707	20	20	3	-	-	-
PPs708	32	28	12	Po5702との間約2.60m SB02	-	-
				PP57016との間約2.15m	-	-

PPs709	28	20	10	-	-	-
PPs710	16	21	16	-	-	-
PPs711	34	25	26	-	-	-
PPs712	45	36	25	PPs601との間約2.65m SB02	-	-
				PPs715との間約2.65m	-	-
				Po5602との間約2.15m	-	-

PPs713	35	28	21	-	-	-
PPs714	22	24	10	-	-	-
PPs715	28	26	20	-	-	-
PPs716	48	36	20	PPs7012との間約2.85m SB02	-	-
				PPs604との間約2.15m	-	-
				PPs708との間約2.15m	-	-
PPs717	24	22	19	-	-	-
PPs718	35	28	10	-	-	-
PPs719	16	11	4	-	-	-
PPs720	28	25	8	-	-	-
PPs721	28	24	28	-	-	-
PPs722	26	28	25	-	-	-

(F区)

遺構番号	長さ(m)	幅(m)	深さ	方向	備	注
SDq48091A	60	50	10	N-2°	-E	出土長約8.2m
SDq48091B	50	40	10	N-2°	-E	出土長約1.8m
SDQ5631	63	40	5	N-3°	E	-
SDs5234	120	36	25	N-2°	E	出土長約18.5m
SHs5234	49	30	10	N-81°	-W	出土長約11.5m

長径 短径 深さ

SNq48091	-	200	25	N-4°	-E	-
SNq48092	250	5	N-2°	-E	-	-
SNR-7301	630	250	5	N-3°	-E	-
SKR-5601	496	270	16	-	-	-
SKR-9901	486	260	16	N-4°	-E	-

主水道構一覽表

SXq4950	566	770	10					SXq4901A	280	5	N-42°-E		
SXR31901	440	790	49	N-31°-E				SXq4901B	-	620	5	N-2°-E	
SXR31361	276	125	15	N-87°-W				SXq51601	350	-	5	N-90°-W	
SXR52003	-	140	5	-				SXr60001	259	-	5	N-90°-W	
								SXr51501	980	-	8	N-3°-W	
								SXR615101	650	-	5	N-83°-W	
								SXR51502	660	-	5	N-85°-W	
								SXR20061	1				400互換用位の約2.5m
SXR48091	130		3	N-2°-E				SXq30061	-	-	1	-	400互換用位の約4.3m
SXR48501	860	500	5	N-68°-W									
SXR30091	350	-	5	N-90°-W									

東向き 西向き 向き 距離方向 備 考

互換用位の約2m

400互換用位の約2.5m

400互換用位の約4.3m



主な遺物一覧表

区番号	品名	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	容量 (cc)	重量 (g)	遺物名	
A 1	両耳						SKc42501	
A 2	山形碗	16.7	4.8	5.2	28.7		SKD89008	
A 3	小皿	8.3	2.1	4.3	25		SKD89006	
A 4	白磁碗				6.6		SKD39006	
A 5	土師器炊						SK129006	
A 6	土師器碗						SKD69006	
A 7	加工内皿			2.1	1.5	8.5	SKD89006	
A 8	加工内皿			2.6	1.4	8.3	SKL89006	
A 9	山形碗	14.1	5.4	5.4	28.3		SKD88501	
A 10	山形碗	14.5	4	5.3	41.4		SKD88501	
A 11	山形碗						SKc37901	
A 12	小皿						SKD87902	
A 13	土師碗				6.6		SKD87902	
A 14	山形碗	14.1	5.1		6.36.2		SKD87902	
A 15	山形碗				6.2		SKD87902	
A 16	小皿				3.4		SKD87901	
A 17	小皿	6.9	1.7	1.6	21.6		SKD87901	
A 18	小皿	7.6	1.7	4.7	22.4		SKD87901	
A 19	小皿	7.6	1.5	5.3	19.2		SKD87901	
A 20	磁器蓋	16.4					SKD87901	
A 21	土師器鉢						SKD87901	
A 22	土師				1.1	3.3	SKD87901	
A 23	土師				4	0.9	3	SKD87901
A 24	山形碗	13.6	5.3	3.9	46		SKG67901	
A 25	山形碗				6.6		SKG67902	
A 26	小皿	8	1.7	5.2	21.2		SKG67902	
A 27	小皿				4.9		SKG67902	
A 28	土師						SKG67901	
A 29	土師	3.5	5				SKG67901	
A 30	加工内皿			2.4	2.4	9	SKG67902	
A 31	加工内皿			2.5	1.4	8.9	SKG67902	
A 32	加工内皿			3.2	1.2	6.1	SKG67902	
A 33	加工内皿			2.5	1	9.1	SKG67901	
A 34	加工内皿			2.3	0.8	4.4	SKG67901	
A 35	加工内皿			2.7	1.5	12.1	SKG67901	
A 36	加工内皿			3.4	1.1	13.6	FD08901	
A 37	小皿	6.7	2.5	4.7	28.7		FD08901	
A 38	加工内皿			3.5	0.7	8	FD08901	
A 39	土師器鉢						SKc37901	
A 40	土師器鉢						SKc41991	
A 41	山形碗				7.7		SKD37901	
A 42	山形碗				6.8		SKD37901	
A 43	山形碗				4		SKD37901	
A 44	小皿	7.9	1.8	4.5	22.8		SKD37901	
A 45	加工内皿			2	1	3.3	SKD37901	
A 46	加工内皿			3.1	1.4	13.4	SKD37901	
A 47	加工内皿						SKD37901(2)	
A 48	陶丸			2.1	9.8	89.6	SKD37901	
A 49	加工内皿			2	1.4	6.3	SKD69001	
A 50	磁器				5		SKD69001	
A 51	灰土				6.7		高砂 A-1(8)陶	
A 52	山形碗				6.4		高砂 A-1(41)陶	
A 53	山形碗	14.3	5.2	6.4	37		高砂 A-1(1)陶	
A 54	山形碗				7.5		高砂 A-1(42)陶	
A 55	小皿				1		高砂 A-1(1)陶	
A 56	鉢						高砂 A-1(1)陶	
A 57	白磁碗						高砂 A-1	
A 58	磁器						高砂 A-1	
A 59	磁器						高砂 A-1	
A 60	磁器						高砂 A-1(1)陶	
A 61	陶				5.2		高砂 A-1(42)陶	
A 62	陶				4		高砂 A-1(42)陶	
A 63	加工内皿			2.6	1.7	7.4	高砂 A-1(1)陶	
A 64	加工内皿			3.2	0	4	高砂 A-1	
A 65	加工内皿			2.2	1.7	8.6	高砂 A-1(1)陶	
A 66	加工内皿			1.9	1.1	4.1	高砂 A-1	
A 67	加工内皿			7.9	1.3		高砂 A-1	
A 68	加工内皿			3.1	0.5		高砂 A-1(4)陶	
A 69	加工内皿			2.9	0.8	8.9	高砂 A-1(4)陶	
A 70	加工内皿			2	0.7	6	高砂 A-1(4)陶	

区番号	品名	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	容量 (cc)	重量 (g)	遺物名		
A 71	加工内皿					2.2	6.7	3.4	高砂 A-1
A 72	土師					1.2			高砂 A-1(4)陶
A 73	加工内皿					2.3	6.8	5.7	SXE4907
A 74	加工内皿					2.7	0.9	9.9	SXE1204
A 75	灰土					7.2			高砂 A-2(8)陶
A 76	山形碗	16.4							高砂 A-2(4)陶
A 77	山形碗				8				高砂 A-2(4)陶
A 78	山形碗				6.5				高砂 A-2(4)陶
A 79	山形碗				5.6				高砂 A-2(4)陶
A 80	山形碗				3.6				高砂 A-2(4)陶
A 81	小皿	8.3	2.2		4	26.5			高砂 A-2
A 82	小皿	7.6	1.6	4.2	24				高砂 A-2
A 83	小皿				4.2				高砂 A-2(4)陶
A 84	小皿	7.6	1.6	5.4	23				高砂 A-2
A 85	土師器鉢								高砂 A-2
A 86	加工内皿					2.1	0.5	4.1	高砂 A-2
A 87	土師				7.5				SXE4901
A 88	加工内皿					2.1	1.3	6.6	高砂 A-2
A 89	山形碗				7.4				高砂 A-2
A 90	山形碗				8				高砂 A-2(4)陶
A 91	山形碗				7.9				高砂 A-2
A 92	山形碗				6.9				高砂 A-2
A 93	山形碗				7				高砂 A-2
A 94	小皿	7.8	1.6	4.8	20.5				高砂 A-2
A 95	小皿				3.9				高砂 A-2
A 96	小皿				1.4				高砂 A-2
A 97	伊勢器鉢								高砂 A-2
A 98	土師				3.3	3.1			高砂 A-2(4)陶
A 99	加工内皿					2.3	1.1	8.1	高砂 A-2
A 100	加工内皿					2.2	1.9	8.9	高砂 A-2
A 101	加工内皿					2.2	1.6	8.9	高砂 A-2
A 102	加工内皿					1.9	1.4	6.3	高砂 A-2
A 103	加工内皿					1.9	0.8		高砂 A-2
A 104	加工内皿					1.8	0.8	3.9	高砂 A-2
A 105	高砂器鉢								高砂 E290
A 106	高砂器鉢								高砂 c379075
A 107	高砂器鉢								高砂 E290
A 108	灰土								高砂 E290
A 109	灰土				6.7				高砂 E290
A 110	山形碗				6.8				高砂 E290
A 111	小皿				1.4				高砂 E290
A 112	小皿				3.8				高砂 E290
A 113	小皿				7.8	1.6	4.9	20.5	高砂 E290
A 114	灰土				18.4				高砂 E290
A 115	白磁碗								高砂 E290
A 116	伊勢器鉢								高砂 E290
A 117	土師								高砂 E290
A 118	土師								高砂 E290
A 119	土師								高砂 E290
A 120	土師								高砂 E290
A 121	土師								高砂 E290
A 122	不明								高砂 E290
A 123	不明								高砂 E290
A 124	加工内皿				4				高砂 E290
A 125	加工内皿					2.4	1.2	6.7	高砂 E290
A 126	加工内皿					2	0.9	7.9	高砂 E290
A 127	加工内皿					2.4	0.9	7.7	高砂 E290
A 128	加工内皿					3.3	0.7	3.4	高砂 E290
A 129	加工内皿					3.9	1.2	13.2	高砂 E290
A 130	加工内皿					2.1	0.9	5.9	高砂 E290
A 131	加工内皿					3.1	1	10.9	高砂 E290
A 132	加工内皿					2.9	0.4	4.7	高砂 E290
A 133	加工内皿					3.5	0.8	16	高砂 E290
A 134	加工内皿					2.5	0.6	7.5	高砂 E290
A 135	加工内皿					2.3	0.9	9	高砂 E290
A 136	加工内皿					1.6	0.6	2.3	高砂 E290
A 137	加工内皿					2.2	0.8	4.1	高砂 E290
A 138	加工内皿					3.4	0.5	6.6	高砂 E290
A 139	加工内皿					3.6	0.5	3.9	高砂 E290
A 140	加工内皿					1.9	0.7	4.6	高砂 E290
A 141	加工内皿					3.6	0.6	13.2	高砂 E290



主要遺物一覧表

区番号	遺物	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	材質	備考	区番号	遺物	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	材質	備考				
A 14	水打石				2.1	1.2	8.3	水田	E 70	小皿	8.8	2.5	4.3	28.4	SKK38502				
A 15	水打石				2.9	6.6	8.9	H45 瓦	E 71	山形甕				2.4	2.1	1.3	7.2	SKK38502	
A 16	水打石				3.1	1.1	8.6	水田(450)	E 72	山形甕				2.6	2.2	1.3	8.9	SKK38502	
A 144	水打石				2.7	1.3	10.1	水田(450)	E 74	山形甕	15.8	1.9	7.8	21	SEJ38501				
B 1	山形甕	17.5	5.5	8.4	21.4			高麗丹土	E 76	山形甕	16	4.6	8.1	29.3	SEJ38501				
B 2	山形甕				7.6			高麗丹土	E 75	山形甕	15.8	4	8.2	35	SEJ38501				
B 3	山形甕				7.3			高麗丹土	E 77	山形甕	16	4.6	8.2	38	SEJ38501				
B 4	小皿	16.1	3.3	5.1	20.8			高麗丹土	E 79	山形甕	16.9	5.9	9.9	33.1	SEJ38501				
B 5	山形甕	16.5	5	7.1	20.3			灰化土	E 78	山形甕	16.5	5.1	8.5	26.9	SEJ38501				
B 6	山形甕	15.6	4.8	7.5	20.4			灰化土	E 80	山形甕	16.2	4.9	8.5	30.2	SEJ38501				
B 7	山形甕	16.4	5.3	8.4	24.7			灰化土	E 82	山形甕	16.2	4.7	7.4	20	SEJ38501				
B 8	山形甕				8			灰化土	E 81	山形甕	16.1	5.2	8.3	32.3	SEJ38501				
B 9	山形甕				8.6			灰化土	E 73	山形甕	18.1	5.5	8.5	35.9	SEJ38501				
B 10	山形甕				8.3			灰化土	E 83	山形甕				7.9	SEJ38501				
B 11	小皿	9	3.7	3.2	20			灰化土	E 84	山形甕				8.6	SEJ38501				
B 12	小皿	8.8	2.6	2.9	29.3			灰化土	E 85	山形甕				8.3	SEJ38501				
B 13	白磁碗				6			灰化土	E 86	山形甕				8	SEJ38501				
B 14	山形甕	16.4	4.6	7.3	28			灰化土	E 87	小皿	7.6	2.3	4	26.3	SEJ38501				
B 15	山形甕	16.5	4.6	8	27.9			灰化土	E 88	小皿	8.7	2.4	4.4	24	SEJ38501				
B 16	山形甕	15.3	4.7	7.4	30.7			灰化土	E 89	山形甕	8	1.9	1.1		SEJ38501				
B 17	白磁碗	15.8	1.2	8	25.5			灰化土	E 51	山形甕	13.8	4.8	6.6	30	SKJ38501				
B 18	小皿	8.6	2.1	4.5	24.1			灰化土	E 52	山形甕	16.1	4.7	8	28.7	SKJ38501				
B 19	山形甕				7.4			灰化土	E 09	山形甕	7.6	2	4.2		SEJ38501				
B 20	小皿				3.3			灰化土	E 53	加工瓦					1.6	1	3.1	SEJ38501	
B 21	蓋							灰化土	E 61	甕(甕)				13.2				SKK28501	
B 22	山形甕							灰化土	E 55	皿				7.8				SKK38501	
B 23	加工内皿				2.2	0.9	6.9	灰化土	E 56	山形甕	16	4.8	8.1	30	SEK38501				
B 24	加工内皿				2	1.1	7.7	灰化土	E 57	山形甕	15.2	5	7.7	26.9	SEK38501				
B 25	山形甕	16.1	1.6	3.6	28			SKK28501	E 58	山形甕	17	5.9	8.5	31.6	SKJ38501				
B 26	小皿	7.8	2.5	4.4	37			SKK28501	E 59	山形甕				7.6	SPJ38501	注			
B 27	小皿	8.4	2.5	4	29.8			SKK28501	E 100	山形甕				8.7	SDJ38501	一房			
B 28	小皿	8.5	2.5	4.9	29.1			SKK28501	E 101	山形甕				7.1	SDJ38501	一房			
B 29	小皿	8.9	2	5	22.3			SKK28501	E 102	山形甕				7.4	SKJ38501	75%			
B 30	小皿	8.9	2.1	4.5	23.6			SKK28501	E 103	小皿	8.3	2.1	4.9	25.3	SDJ38501	一房			
B 31	小皿				4.1			SKK28501	E 104	甕(甕)					SDJ38501	一房			
B 32	蓋				12.1			SKK28501	E 105	蓋					SDJ38501	75%			
B 33	蓋							SKK28501	E 106	山形甕	15.8	5.2	8.2	32.9	SPJ38501	上層			
B 34	蓋(甕)				79.2			SKK28501	E 107	山形甕	16.4	4.7	7.1	38.7	SDJ38501	上層			
B 35	山形甕	15.5	5	9.2	22.3			SKK28501(F)	E 108	山形甕				8	SDJ38501	上層			
B 36	小皿				4.5			SKK28501	E 109	山形甕				8.2	SDJ38501	上層			
B 37	小皿	8.8	2.3	4.1	26.1			SKK28501	E 110	皿				4.8	SKK28501	上層			
B 38	蓋				12.4			SKK28501	E 111	山形甕	14.3	4.9	6.1	24.5	SKK37502				
B 39	下皿							SKK28501	E 112	山形甕	18	5.4	8.4	33.8	SKK37502				
B 40	山形甕	16.1	3.6	7.7	34.8			SKK28502	E 113	山形甕	16.1	4.6	7.4	28.6	SKK37502				
B 41	山形甕	16.5	3.6	7.9	32.9			SKK28502	E 114	山形甕	15.5	4.7	7.5	23.6	SKK37502				
B 42	山形甕	16.5	4.5	7.1	27.3			SKK28502	E 115	山形甕	15.2	4.8	8.5	30.2	SKK37502				
B 43	山形甕	16.5	3.1	9.1	40.8			SKK28502	E 116	山形甕	17	4.8	6.2	28.7	SKK37502				
B 44	山形甕	16.2	4.9	8	20.2			SKK28502	E 117	山形甕	16.1	8	8.4	31.1	SKK37502				
B 45	山形甕	16.5	3.7	8	34.5			SKK28502	E 118	山形甕	16.6	4.9	8.5	23.5	SKK37502				
B 46	山形甕	16.1	4.9	9.6	20.4			SKK28502	E 119	山形甕	16.2	5.6	8.4	34.6	SKK37502				
B 47	山形甕	16.1	5.3	7.6	32.5			SKK28502	E 120	小皿	8.3	2.2	4.8	25.5	SKK37502				
B 48	山形甕	16	4	8.3	31.3			SKK28502	E 121	小皿	8.3	2.4	4.4	28.9	SKK37502				
B 49	山形甕	16.2	5.5	7.9	27.8			SKK28502	E 122	小皿	7.8	2.2	4.2	28	SKK37502				
B 50	山形甕	16.4	4.9	9	29.5			SKK28502	E 123	小皿	8	2.3	3.9	28.9	SKK37502				
B 51	山形甕	16.3	5	8.8	26.7			SKK28502	E 124	小皿	8.3	2.1	4.2	25.3	SKK37502				
B 52	山形甕	16.3	4.8	7.8	29.4			SKK28502	E 125	鉢	30.4	14.5	13.4		SKK37502				
B 53	山形甕	17	4.7	8.7	27.6			SKK28502	E 126	土師瓦	7.7	1.7	4.5		SKK37502				
B 54	山形甕				7.6			SKK28502	E 127	山形甕	16	4.9	7	26.5	PK28501				
B 55	小皿	8.2	3.1	4.1	25.6			SKK28502	E 128	蓋					PK28501				
B 56	小皿	8.4	1.9	4.8	22.6			SKK28502	E 129	山形甕				8.9	PK28502				
B 57	小皿	8.9	2	5.1	22.5			SKK28502	E 130	山形甕				8	PK28502				
B 58	小皿	7.8	2.1	3.5	26.2			SKK28502	E 131	山形甕				7.4	PK28502				
B 59	小皿	8.8	2.2	5.3	25			SKK28502	E 132	山形甕				7.7	PK28502				
B 60	土師瓦	7.4						SKK28502	E 133	蓋(蓋)				7	PK28502				
B 61	土師瓦	17.4						SKK28502	E 134	山形甕				7.7	SXL37501				
B 62	土師瓦	17.7						SKK28502	E 135	山形甕				7.7	SXL37501				
B 63	山形甕	16.7	5	8.2	29.5			SKK28502	E 136	山形甕				4.1	SXL37502				
B 64	山形甕	15.7	4.8	8.1	30.6			SKK28502	E 137	蓋	4.7	7	108		SKK37501				
B 65	山形甕	16.2	4.9	8.6	30.2			SKK28502	E 138	山形甕	13.9	1.7	7.2	33.8	SXJ39006				
B 66	山形甕				8.3			SKK28502	E 139	小皿	8.8	2.6	4.8	25.5	SXJ39005				
B 67	山形甕				8			SKK28502	E 140	小皿	7.7	2.7	4.1	35.1	SXJ39005				
B 68	山形甕				8			SKK28502	E 141	山形甕				8	SXJ39005				
B 69	小皿	8.7	2.8	4.8	32.2			SKK28502	E 142	小皿	8.3	2.2	3.9	26.5	SXK38501				
									E 143	山形甕	11.3	3	3.6	25.7	SXK38501	75%			



主な遺物一覧表

区番号	品類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高 (cm)	容量 (cm <sup>3</sup> )	遺物名	
E 81	山系碗	13.9	5.5	5.7	39.6		SXa67001	
E 82	杯身		19.1				SXa68004	
E 83	小皿	8.7		6.2			SXa65061	
E 84	新輪蓋						SXa65001	
E 85	浅皿						SXa65003	
E 86	加工陶盤				2.5	1.1	6.7	SXa68003
F 87	山系碗	14.4	5.1	6.3			SXO6602	
E 88	小皿	8.4	4.7	1.9			SXO66001	
E 89	小皿	7.8	4.6	1.6			SXO65807	
E 90	小皿	8.5	1.8	5.6	21.2		SXa66601	
F 91	加工陶盤				3.2	1	9.8	SXO66001 下
E 92	加工陶盤				2.6	0.4	4.3	SXO66001
E 93	加工陶盤				2.5	1.3	9.1	SXO68003
E 94	加工陶盤				2.6	1.1	9.7	SXa66601
F 95	加工陶盤				1.8	0.9	27	SXO68001
E 96	山系朝		7.6				SXa66602	
E 97	小皿		3.7				SXa66602	
E 98	加工陶盤				2.3	1.4	8.3	SXa66602
F 99	加工陶盤				1.1	0.6	10.5	SXa66602
E 100	山系朝		7.3				SXa66601	
E 101	小皿	8	1.6	4	22.5		SXa65507	
E 102	小皿	7.7	1.7	4.7	22.1		SXa66001	
F 103	小皿	8.5	1.7	1.7	20		SXa66601	
E 104	小皿	8.9	1	5	11.2		SXa65501	
E 105	鉢						SXa65507	
E 106	土皿						1.6	SXa66001
E 107	土皿				1.5	1.6	12.1	SXa66601
E 108	加工陶盤				2.6	0.4	8	SXa65501
E 109	加工陶盤				2.9	1.5	12.8	SXa65501
E 110	加工陶盤				4.7	9.9	8.9	SXa66001
F 111	加工陶盤				1.1	1.1	21	SXa66601
E 112	加工陶盤				4.5	0.6	29	SXO63061
E 113	山系碗		7.7				O505	
E 114	山系碗		5				n540	
F 115	小皿	7.6	1.7	4	22.4		n560	

区番号	品類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	径高 (cm)	容量 (cm <sup>3</sup> )	遺物名			
E 115	小皿		4.7				N565			
E 116	小皿	8	1.6	5	20		O363-576 アヤ			
F 117	小皿		4.2				N565			
E 118	小皿		1.6				P666			
E 119	小皿	8	1.8	3			n565			
E 120	小皿	8	1.8	4.8	22.3		565 アヤ			
F 122	新輪大鉢						IK1			
E 123	鉢		9				N160			
E 124	鉢		10.2				n540			
E 125	鉢						O-a590			
F 126	鉢						n540			
E 127	土師青銅						6540			
E 128	土師青銅						6555			
E 129	土師青銅						O370 アヤ			
F 131	土皿		4.4	1.3	8.3		n540			
E 132	加工陶盤		2.3	1.2	8.4		O-a690b			
E 133	加工陶盤		2.4	1.6	7.3		N360			
E 134	加工陶盤		2.4	1.5	6.9		オライシ			
F 135	加工陶盤		2.6	1.1	8		内			
E 136	加工陶盤		3.4	1.4	12.8		6665			
E 136	新鉢						O545			
E 137	加工陶盤		2.8	1.1	8.8		O360			
F 138	加工陶盤		2.1	0.5	3.9		内			
E 139	加工陶盤		1.5	1.2	16.8		O665			
E 140	加工陶盤		2.1	0.7	3.8		内			
E 141	加工陶盤		2.3	1	6.7		6360			
E 142	加工陶盤		2.6	1	8.4		P566			
E 143	加工陶盤		2.3	1.1	7.2		n570 アヤ			
F 1	皿						q205			
F 2	皿						r965			
F 3	加工陶盤	3.4	1	3.1			3.4	1	13.5	SDr62b01
F 4	加工陶盤	2.6	0.5	2.6			2.8	0.5	6.3	SDr62001
F 5	土皿	5	1.2				5	1.2	7.9	SXq31301
F 6	加工陶盤	5	0.9				5	0.9	29	R515

## 千音寺遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

千音寺遺跡は、名古屋市中川区富田町大字千音寺字菖目寺田に所在する。本遺跡は、庄内川右岸の沖積地に立地し、これまでの発掘調査により、古墳時代の須恵器から室町時代頃までの陶磁器などが検出されている。ここでは、中世以降の遺跡周辺の植生変遷および付近での稲作などの栽培状況を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

### 2. 試料

D、E、Fの3調査区より合計15試料が採取された。D区ではS435地点で5試料(試料1~5)、T435地点(大溝)で2試料(試料1、2)が採取された。E区ではP555地点で4試料(試料1~4)が採取され、F区ではr505地点で4試料(試料1~4)が採取された。以下に各試料の簡単な記載を公示。なお、これら15試料はプラント・オパール分析も行われた。

#### 1) D区試料

S435 地点 (試料1~5) : 試料1 (1層、水田層) は灰オリーブ色粘土質シルト。試料2 (14層) は灰色~灰オリーブ色シルト質粘土で褐鉄鉱が発達する。試料3 (13層) は灰色粘土で褐鉄鉱が発達する。試料4 (15層) は灰オリーブ色粘土。試料5は灰色粘土。

T435 地点 (試料1、2) : 本試料は大溝埋土より採取された。試料1 (5層) は灰オリーブ色シルト質粘土で褐鉄鉱が非常に発達する。試料2 (6層、大溝最下層) は灰オリーブ色粘土で褐鉄鉱が発達する。

#### 2) E区試料

P555 地点 (試料1~4) : 試料1 (1層、現代水田層) は灰色シルト質粘土。試料2 (3層、SXo55501上層埋土) は灰色~灰オリーブ色シルト質粘土で褐鉄鉱が発達する。試料3 (4層、SXo55501下層埋土) は灰オリーブ色粘土。試料4 (5層、SXo55501下層埋土) は灰色粘土。

#### 3) F区試料

r505 地点 (試料1~4) : 試料1 (2層、近世水田層?) はオリーブ灰色シルト。試料2 (3層) は灰オリーブ色シルト質粘土。試料3 (4層、SXR55001埋土) は灰色粘土。試料4 (5層) は灰色粘土。

### 3. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2~3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリス処理(氷酢酸による脱色、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロベットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート1~3枚の全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数と

表1 花粉化石一覽表

和名	学名	S485				T435				P605				r605				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	
草本																		
ヤブコナ	<i>Rudacarpus</i>	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ	<i>Abies</i>	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
ツバキ	<i>Tilia</i>	-	-	-	6	2	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	6	3
マツ属(雄株)有糸雄株	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	46	4	3	9	9	23	62	73	3	-	-	2	103	123	42	5	3
マツ属(雌株)	<i>Pinus (Monmon)</i>	4	1	-	9	2	1	12	7	-	-	-	1	16	2	13	-	-
コナツクシ属	<i>Salicopsis</i>	-	-	-	6	6	-	10	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スズナ	<i>Cypripedium</i>	94	-	-	1	6	9	10	73	1	-	-	1	33	24	3	50	1
イボクハシノキ(スナグサ)ノ木科	<i>T. C.</i>	3	-	-	1	13	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤブコナ	<i>Salix</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウダグロムシ属(クルミ)属	<i>Pterocarya-Pteris</i>	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ(雄株)ノ木科	<i>Cypripis - Ostrya</i>	-	-	-	3	21	-	3	3	-	-	-	-	2	6	1	8	-
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	2	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノ木属	<i>Betula</i>	1	-	1	5	23	4	8	2	-	-	-	-	4	2	3	4	-
ツバキ	<i>Ainos</i>	11	1	-	12	11	25	39	11	-	1	1	22	13	4	7	-	-
ツバキ	<i>Fagus</i>	-	-	-	5	13	2	1	3	-	-	-	-	2	1	2	11	-
コナツクシ(ナラ)木属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	18	-	-	30	10	9	20	12	-	-	-	1	19	4	7	24	-
コナツクシ(ナラ)木属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanus</i>	7	1	1	82	79	9	23	7	1	-	-	3	6	7	13	26	-
クルミ	<i>Castanea</i>	10	1	-	10	12	4	4	6	-	-	-	-	3	3	3	-	-
クワノ木属	<i>Castanopsis</i>	3	1	-	6	7	3	3	-	-	-	-	1	3	-	-	24	-
ヒノキ属(ケヤキ)木属	<i>Alnus - Zelkova</i>	3	-	-	3	4	2	3	1	-	-	-	1	1	-	-	3	-
ニホキ属(ムクノ)木属	<i>Delis-Aphanis</i>	1	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
カバノ木属	<i>Cucidaphilus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノ木属	<i>Tillandsia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメコシノ木	<i>Salix</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クルミ	<i>Ehus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヒノキ(木)属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セウノ木	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-
トウモロコシ	<i>Asteraceae</i>	-	-	-	1	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツバキ	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワノ木属	<i>Elmagnis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワノ木属	<i>Ara. Inocae</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ	<i>Ericaceae</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イボクハシノ木属	<i>Ligularia</i>	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノ木属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																		
ツバキ	<i>Typha</i>	2	-	-	8	2	1	1	5	-	-	-	1	2	1	2	-	-
オモダケ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スズクシ属(ミズオモダケ)木属	<i>Brya - Otoclis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
コナツクシ	<i>Sphodria verticillata</i> Heil.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	642	23	13	25	23	230	557	331	10	5	27	556	201	95	133	-	-
コナツクシ(草)科	<i>Cyperaceae</i>	4	-	-	1	1	1	12	3	-	-	-	3	1	3	13	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-	2	1	-	-
ウツク	<i>Horaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アキノミダケ(ウツク)ノ木科	<i>Polygonum sect. Pericaria-Echinosan</i>	6	-	-	-	-	3	2	13	-	-	-	4	1	-	-	-	-
ツバキ	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-	6	16	1	-	-	-	1	4	1	-	-	-
アキノミダケ(セウノ)科	<i>Chenopodiaceae - Sveranthaceae</i>	3	-	-	-	-	4	4	2	-	-	-	2	1	1	1	-	-
コナツクシ(草)科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	-	-	-	-	-	1	7	7	-	-	1	1	-	-	-	-
コナツクシ(草)科	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カンゴクシ(草)科	<i>Ranunculaceae</i>	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ(草)科	<i>Cruiferae</i>	152	1	1	1	-	15	73	234	4	-	1	27	9	-	-	2	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモミ	<i>Leguminosae</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Polea</i>	1	2	-	1	-	4	4	5	-	1	-	1	2	-	-	-	-
ヒシノ木	<i>Trapa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アキノミダケ(草)科	<i>Malvaceae</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セウノ木	<i>Umbelliferae</i>	-	-	-	-	-	7	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	39
ツバキ	<i>Solanum</i>	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Plantago</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Pastinaca</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Arenaria</i>	5	1	-	6	2	4	15	2	-	-	-	5	3	2	39	-	-
オモダケ(草)科	<i>clav. Tubiflorae</i>	1	-	-	-	-	-	7	5	4	-	-	3	4	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Lactiflorae</i>	1	1	1	1	-	2	12	3	-	-	-	-	2	1	-	-	-
シダ科																		
オモダケ(草)科	<i>Salvinia natans</i> All.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オモダケ(草)科	<i>Vallisneria spiralis</i>	2	2	-	35	24	17	24	1	1	-	-	1	7	5	7	10	-
三葉草科	<i>Trilete spore</i>	2	3	1	9	3	14	23	6	2	-	2	5	11	12	4	-	-
蕨木科	<i>Arboreal pollen</i>	235	10	4	127	216	131	244	223	2	0	11	230	150	218	-	-	-
蕨木科	<i>Non-arboreal pollen</i>	770	37	17	41	36	242	67	680	14	13	26	482	233	128	203	-	-
シダ科植物(草)科	<i>Spores</i>	4	5	1	47	26	31	52	7	3	0	2	14	14	19	17	-	-
シダ科植物(草)科	<i>Total Pollen &amp; Spores</i>	832	55	22	275	272	414	967	1093	12	14	41	685	447	327	439	-	-
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	1	0	0	4	9	4	0	2	0	0	0	2	1	1	1	-	-

し、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

#### 4. 花粉化石群集の記載

##### 〔S435 地点（試料1～5）の花粉化石群集〕

同定された分類群数は、樹木花粉 28、草本花粉 17、形態分類で示したシダ植物胞子 2 である。S435 地点の花粉化石群集は、主要樹木花粉の出現傾向により下位より 2 つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I 帯(試料 4、5)：樹木花粉の占める割合は約 68～77%と高率である。本帯はコナラ属アカガシ亜属の優占(約 35～38%)で概ね特徴付けられる。試料 4 と試料 5 では付随種の出現率がやや異なり、試料 4 ではコナラ属コナラ亜属(約 16%)、ハンノキ属(約 6%)が、試料 5 ではクマシデ属-アサダ属(10%)、カバノキ属(約 10%)が比較的高率である。草本花粉ではイネ科が比較的高率であり(約 8～10%)、ガマ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが 1%未満～3%程度で出現する。また、試料 4 では抽水植物のキカシグサ属が 1%未満で出現する。シダ植物胞子は約 10～17%と本体でやや特徴的である。

II 帯(試料 1～3)：樹木花粉の占める割合は約 22%と I 帯に比べて非常に低率となる。本帯はスギ属(約 45%)、マツ属複雑管束亜属(約 23%)といった針葉樹が優占することで特徴付けられ、I 帯で優占していたアカガシ亜属は約 3%と非常に低率となる。また、I 帯で比較的高率であったコナラ亜属、ハンノキ属は依然として 5～8%程度出現するが、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属は 1%未満と極めて低率となる。草本花粉ではイネ科(約 47%)、アブラナ科(約 27%)が非常に高率であり、ガマ属、ソバ属、キカシグサ属などが 1%未満で出現する。なお、試料 2、3 は十分な花粉化石を産出しなかったが、樹木花粉でマツ属複雑管束亜属が比較的高率の目立ち、草本花粉ではイネ科が多産し、アブラナ科も随伴することから II 帯に含めた。

##### 〔T435 地点（試料 1、2）の花粉化石群集〕

同定された分類群数は、樹木花粉 24、草本花粉 18、形態分類で示したシダ植物胞子 2 である。

樹木花粉の占める割合は、約 24～25%と非常に低率である。マツ属複雑管束亜属が最優占する傾向にあり(約 23～36%)、スギ属(約 9～10%)、ハンノキ属(約 12～25%)、コナラ亜属(約 8～9%)、アカガシ亜属(約 9%)も比較的高率である。草本花粉ではイネ科が約 53～58%と圧倒的な高率であり、ソバ属、アブラナ科などが約 2%、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などが 1%未満で出現する。

##### 〔P555 地点（試料 1～4）の花粉化石群集〕

試料 1 以外は十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料 1 は、樹木花粉の占める割合は約 19%と低率である。その中で、マツ属複雑管束亜属(約 34%)、スギ属(約 37%)が圧倒的に多産する。他に、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属が約 3～6%で出現する。草本花粉では、イネ科が約 49%で最優占し、アブラナ科も約 27%と突出した出現傾向を示す。他に、ガマ属、クロモ、ミズアオイ属、ソバ属、キカシグサ属などが 1%未満で出現する。

## [r505 地点 (試料 1~4) の花粉化石群集]

同定された分類群数は、樹木花粉 25、草本花粉 20、形態分類を含むシダ植物胞子 3 である。r505 地点の花粉化石群集は、主要樹木花粉の出現傾向により下位より 2 つの花粉化石群集帯を設定することができる。II 帯は更に 2 亜帯に細分される。

I 帯 (試料 4) : 樹木花粉の占める割合は、約 50% である。その中で、アカガシ亜属が約 30% で最優先し、次いでスギ属が約 23% で出現する。他に、コナラ亜属、シノキ属が約 11% と比較的多産する。草本花粉では、イネ科が約 23% で最優先し、カヤツリグサ科 (約 5%)、セリ科 (約 6%)、ヨモギ属 (約 9%) が比較的多産し、ガマ属などが 1% 未満で出現する。

II a 帯 (試料 3) : 樹木花粉の占める割合は、約 44% である。その中で、マツ属複雑管束亜属が 42% で最優先し、次いでアカガシ亜属が 13% で出現する。他に、ツガ属 (6%)、コナラ亜属 (7%)、クリ属 (5%) などが出現し、ツガ属、クリ属は本帯でやや目立つ。I 帯で比較的多産したスギ属 (3%)、シノキ属 (1% 未満) は極めて低率となる。草本花粉では、イネ科が約 42% と圧倒的に多産する。他に、ガマ属、ミズアオイ属、ソバ属などが低率で出現する。

II b 帯 (試料 1、2) : 樹木花粉の占める割合は、約 31~45% である。その中で、マツ属複雑管束亜属が約 49~63% と圧倒的に多産することは、II a 帯と同様である。しかし、スギ属が増加して比較的多産 (約 12~17%) し、アカガシ亜属が減少して低率 (約 3~4%) となることで II a と区別される。他に、ツガ属、ブナ属が下位帯に比べて減少し (1% 未満)、逆にハンノキ属は増加する (約 7~10%)。また、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、アカメガシワ属、ウルシ属、ツツジ科は 1% 未満ではあるが、本帯のみで出現するか、本帯で安定した出現をする。草本花粉では、イネ科が約 45~53% と更に高率となり、アブラナ科も本帯で特徴的に出現し、試料 1 では約 10% に達する。他に、ガマ属、スブタ属-ミズオオバコ属、ミズアオイ属、ソバ属、キカシグサ属、ヒシ属、サンショウモなどが 1% 未満で出現する。

## 5. 考 察

## 1) 各地点の花粉化石群集の対比

検討した試料は、S435 地点の試料 1 および P555 地点の試料 1 は現代の水田耕作土層であることから時期が確定しているが、その他の試料については、中世以降としか確定できていない。現代の試料については、マツ属複雑管束亜属、スギ属が卓越する組成であった。それ以前の時期の試料については、マツ属複雑管束亜属は現代の試料と同様卓越するがスギ属は卓越するまでには至らないという組成 (T435 地点、r505 地点の II 帯) と、更にそれ以前のアカガシ亜属が卓越する組成 (S435 地点の I 帯、r505 地点の I 帯) と大きく 2 つに分けられる。以上のことから、本遺跡の植生変遷を I 期、II 期、III 期 (現代) の 3 時期に分けて述べる。

## 2) 植生変遷および栽培状況

I 期 (S435 地点の I 帯、r505 地点の I 帯) : 遺跡周辺はアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であったと予想される。付近には、水生植物のガマ属、キカシグサ属が出現しており、これらが生育するような水位の低い湿地的環境がみられたものと思われる。この時期は、プラント・オパール分析の結果でも示されたように水田はまだ存在していなかった可能性が考えられ、少なくとも S435 地点は水田ではな

かったと予想される。

II期 (T435 地点、r505 地点のII帯)：照葉樹林は衰退し、針葉樹のマツ属複雑管束亜属を主体とした森林が成立していたと予想される。付近には、イネ科が高率で出現し、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属といったいわゆる水田雑草も随伴することから、水田が存在していた可能性が高い。プラント・オーバー分析でもこの時期は稲作が行われていた可能性が高いことが示され、花粉分析と同様の結果が得られた。照葉樹林の衰退は、おそらくこのような水田開発による影響が大きいものと思われる。水田化のために周辺に成立していた照葉樹林は伐採され、裸地が広がり、そのような場所にマツ属複雑管束亜属などが二次林として分布を拡大したのであろう。なお、栽培状況については、イネ以外にも突出した出現をしたアブラナ科 (r505 のI帯) やソバ属などが栽培されていた可能性が考えられ、畑地が存在していたか、あるいは水田脇で栽培されていたのかもしれない。また、水田の裏作として栽培されていた可能性も考えられる。なお、r505 地点の試料1からヒシ属が出現しており、付近にヒシ属が生育するような池が存在していたことが予想される。

III期 (S435 地点の試料1、P555 地点の試料1)：現代になるとマツ属複雑管束亜属とともにスギ属も卓越するようになり、針葉樹主体の森林が成立するようになった。スギ属の拡大については、おそらく植林による影響があるだろう。付近には、引き続き水田が存在し、アブラナ科やソバ属も栽培されていたと思われる。

#### 参考文献

名古屋市教育委員会 (1999) 千首寺遺跡発掘調査概要報告書。5 p.

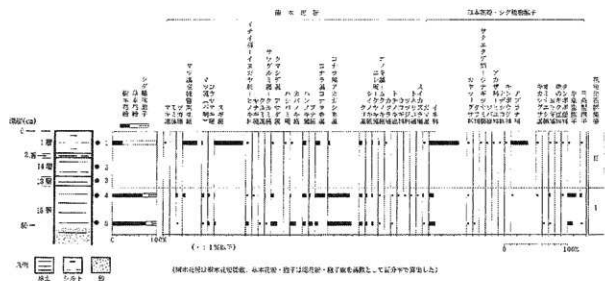






図2 T-435の花粉化石分布図

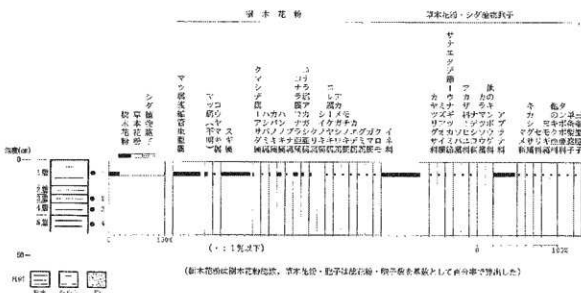


図3 P-555の花粉化石分布図

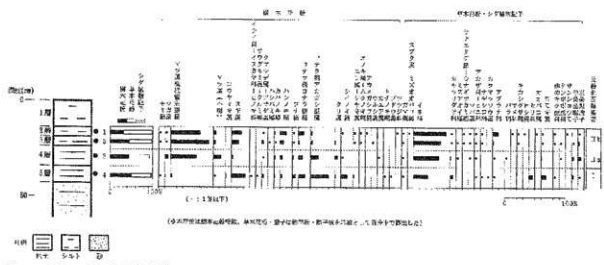
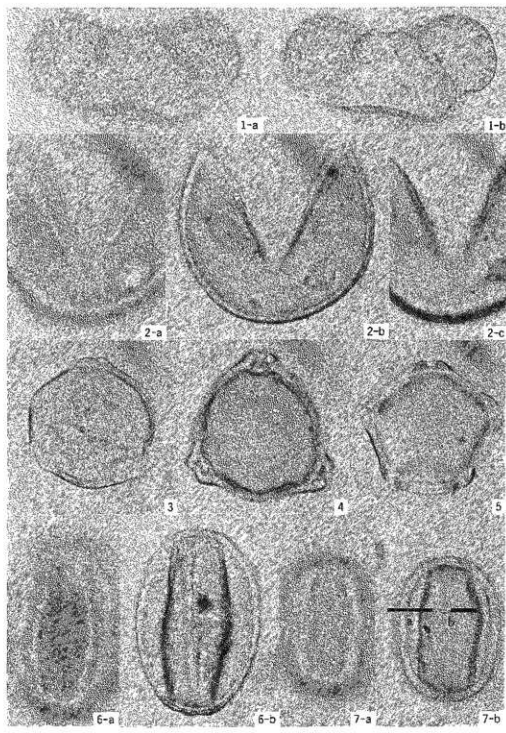
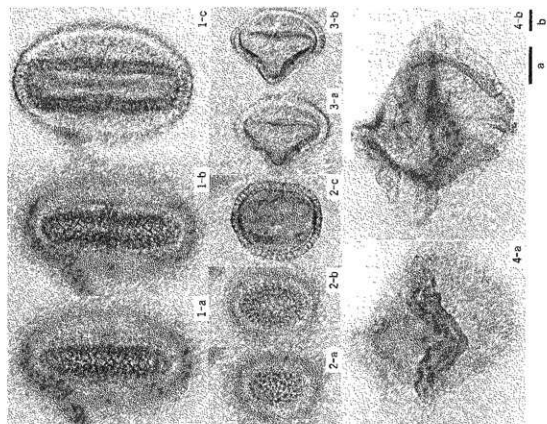


図4 r-505の花粉化石分布図



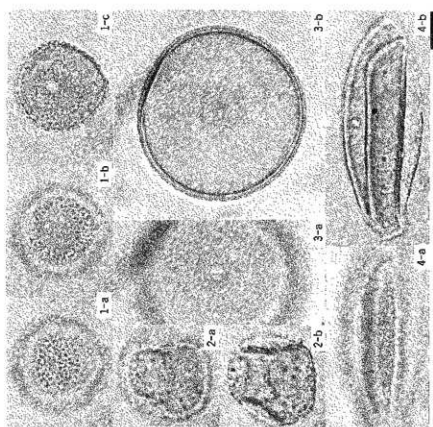
図版1 産出した花粉化石 (scale bar: 10  $\mu$ m a: 2-7 b: 1)

1. マツ原段地帯東住居, T 435-2, PAL. MN 1307
- P. スギ属, T 435-2, PAL. MN 1308
2. ツマシヤ高-アノツタ属, S 435-5, PAL. MN 1317
3. カバノキ属, S 435-6, PAL. MN 1318
4. ハンノキ属, T 435-3, PAL. MN 1316
5. コナラ属コナラ亜属, S 435-4, PAL. MN 1314
6. コナラ属アカガシ亜属, S 435-4, PAL. MN 1318



図版3 産出した花粉化石 (scale bar: 10  $\mu$ m. a: 1-3 b: 4)

1. ソウ属, T.45-2, PAL. MN 1300
2. アブラナ科, S.45-1, PAL. MN 1316
3. キムシグサ属, T.45-2, PAL. MN 1318
4. ヒシ属, T.55-1, PAL. MN 1324



図版2 産出した花粉化石 (scale bar: 10  $\mu$ m)

1. オマ属, S.45-4, PAL. MN 1312
2. オマ科属, T.65-2, PAL. MN 1320
3. イネ科, S.45-1, PAL. MN 1300
4. ミスズオイ属, T.45-2, PAL. MN 1313

## 千音寺遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。こうしたことから、千音寺遺跡においてもいくつかの遺構断面より採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作の有無について機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールから検討した。

## 1. 試料

分析用試料は、D区がS435地点と大溝地点の層位試料7点と他地点の平面試料4点の計11試料、E地区がP555地点（SXo55501遺構）の層位試料4点と他遺構の平面試料6点の計10試料、F地区がr505地点（SXR55001遺構）の層位試料4点と他遺構の平面試料4点の計8試料の総計29試料である。以下に各試料について簡単に記す。なお、これら各遺構および地点の位置については別章を参照して頂きたい。

D区：S435遺構の試料1（1層）、2（14層）は灰色の粘土質シルトとシルト質粘土、試料3（13層）～5（15層）は青灰色の粘土である。大溝地点の試料1（5層）は灰色のシルト質粘土、2（6層）は青灰色粘土で、溝の最下層にあたる。平面試料のS420遺構試料は黒褐色の砂質粘土、S430遺構の南へ3m地点試料は黒褐色のシルト質粘土、S445遺構の東側（南へ1.95m地点）試料は暗灰色のシルト質粘土、S445遺構の西側地点試料は灰オリーブ色のシルト質粘土である。

E区：P555地点（SXo55501遺構）の試料1（1層：現水田層）は灰オリーブ色の砂質シルト、2（3層）はオリーブ褐色の砂質シルト、3（4層）は灰オリーブ色の砂質シルト、4（5層）は灰オリーブ色の粘土質シルトである。平面試料6点について、SXO53501遺構とSXO54501遺構はオリーブ褐色の砂質シルト、SXO56001遺構、SXo56501遺構、SXn55001遺構上層、SXn55001遺構下層の4試料は灰オリーブ色の砂質シルトである。

F区：r505地点（SXR55001遺構）の各試料は灰オリーブ色を呈し、試料1（2層）はシルト質粘土、2（3層）は粘土、3（4層）はややシルト質の粘土、4（5層）はシルト質粘土である。平面試料4点について、SXq49001遺構試料は灰オリーブ色の粘土、SXR47501遺構試料は灰オリーブ色のシルト質粘土、SXR51502遺構試料は暗オリーブ褐色のシルト質粘土、SXR49001遺構試料は灰オリーブ色の粘土である。

## 2. 分析方法

上記した29試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールピーカーに

表1 資料1に当たりのプラント・オーバー概数

地区	資料No.	イネ (加/減)	ホヤサ節型 (加/減)	タマササ節型 (加/減)	巻のケゴト (加/減)	ナヤムカゴケ (加/減)	ヨシノ (加/減)	シバ類 (加/減)	キジ類 (加/減)	クマノシ (加/減)	ハヤ
D区副位飲料	S435-1(1層)	31,300	21,600	8,630	3,200		0	0	2,260	8,300	10,800
	-2(14層)	32,000	28,200	9,400	4,700		0	2,400	0	3,500	7,100
	-3(13層)	29,300	13,800	7,900			0	3,000	0	3,600	1,100
	-4(13層上)	0	16,700	16,700	1,200		0	7,100	0	0	1,200
	5(15層下)	1,200	16,600	4,700			0	2,900	0	1,200	2,200
D区副位飲料	大洋-1(5層)	25,700	22,900	8,200	0		1,300	12,800	0	1,300	5,200
	2(6層)	31,600	14,700	1,100	1,100		0	5,900	0	0	7,900
	S420	33,000	13,000	1,200	1,200		0	1,200	0	1,200	2,400
	S430の西	29,000	16,300	5,300	1,200		0	5,900	0	2,300	5,300
	S443の東側	22,700	14,800	2,300	1,100		0	1,100	0	2,300	2,300
E区副位飲料	S445の東側	42,600	10,700	13,000	0		0	2,400	0	1,200	3,500
	P635-1(1層)	57,000	39,500	5,100	2,300		0	3,500	0	7,000	11,800
	-2(3層)	35,700	17,300	10,400	1,200		0	3,500	0	4,800	6,300
	3(4層)	38,900	18,200	2,400			0	6,100	1,500	4,500	17,000
	-4(5層)	35,000	13,600	5,900	1,200		0	1,200	0	3,700	13,600
E区副位飲料	SXO53501	40,700	28,700	8,450	1,200		0	3,600	1,200	3,600	4,500
	SXO54501	17,700	15,000	8,300			0	1,200	1,200	1,200	5,900
	SXO56001	38,460	22,100	11,600	0		0	2,300	0	0	5,800
	SXO58501	47,300	19,400	6,100	1,200		0	3,600	1,200	4,900	10,300
	SXO55001上	26,800	21,200	6,600	0		0	0	0	3,400	7,800
F区副位飲料	SXG55001下	21,900	23,000	3,500	2,300		0	3,500	1,200	3,500	6,900
	6305-1(2層)	27,700	13,900	10,400	1,200		0	1,200	0	1,200	6,900
	-2(3層)	19,000	15,400	11,900	2,400		0	4,800	1,200	2,400	5,900
	-3(4層)	31,800	18,400	15,900	1,200		0	1,200	2,400	0	7,300
	-4(5層)	4,500	12,500	7,900	0		0	1,100	0	2,300	2,300
F区副位飲料	SXq49001	32,100	15,000	8,300	0		0	3,600	0	0	1,200
	SXR47501	38,200	24,300	12,700	0		0	2,500	0	0	2,300
	SXR51502	31,500	7,100	7,100	1,200		0	3,500	0	1,200	2,400
	SX-49001	39,300	16,700	13,100	0		0	1,200	1,200	2,400	10,700

とり、約 0.02 g のガラスビーズ（直径約 40  $\mu\text{m}$ ）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20~30 cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 10  $\mu\text{m}$  以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

### 3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1 g 当りの各プラント・オパール個数を求め（表 1）、それらの分布を図 1（D 区平面）、図 2（E 区平面）、図 3（F 区平面）、図 4（D 区 S435 遺構）、図 5（D 区大溝地点）、図 6（E 区 P 555 地点）、図 7（F 区 r 505 地点）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1 g 当りの検出個数である。

平面試料（図 1~3）：D 区においては全試料よりイネのプラント・オパールが検出され、S420 遺構試料が最も少なく 13,000 個、最も多い S 445 遺構の西側試料では 40,000 個を越えている。E 区においても全試料よりイネのプラント・オパールが検出されており、少ない SX054501 遺構でも約 18,000 個で、SX056501 遺構では 50,000 個近くに達している。F 区においても全試料よりイネのプラント・オパールが検出され、35,000 個前後の検出個数を示している。

層位試料（図 4~7）：D 区 S435 遺構においては上位 3 試料においてイネのプラント・オパールが 30,000 個前後と多く検出され、下部試料 4、5（15 層）では 5 よりわずかに得られている程度である。イネ以外ではネザサ節型が 20,000 個前後を示し、下部に比べ上部 2 試料でやや大きい数値を示している。同様の傾向がウシクサ族にも認められ、その他、クマザサ属型、ヨシ属、キビ族などが検出されている。D 区大溝地点においては 2 試料ともイネについては大きい数値を示している。イネに次いでネザサ節型が多く、試料 1 ではヨシ属が約 13,000 個とヨシ属としては多量に検出されている。その他、クマザサ属型、シバ属、キビ族、ウシクサ族などが得られている。

E 区 P555 地点においては全試料 35,000 個以上と多量のイネのプラント・オパールが検出されている。ネザサ節型、ウシクサ族がイネに次いで多く、ネザサ節型は試料 1 において下位試料の 2 倍の検出個数を示している。その他、クマザサ属型、ヨシ属、シバ属、キビ族などが検出されている。

F 区 r 505 地点においても全試料よりイネのプラント・オパールが検出されているが、上位 3 試料の 20,000~30,000 個に比べ最下部の試料 4 では 4,500 個とかなり少なくなっている。イネに次いでネザサ節型、クマザサ属が多く、同様の産出傾向を示している。その他、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族などが得られている。

### 4. 稲作について

上記したようにイネのプラント・オパールは 3 試料を除き多数検出されている。検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料 1 g 当り 5,000 個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（森原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。千音寺遺跡の平面試料においては全試料 10,000 個以上を示しており、各地点とも検出個数からは稲作が行

われていた可能性は高いと判断される。また、F区の層位試料 P555 地点においても全試料 35,000 個以上を示しており、最下部の 5 層堆積期でも稲作が行われていたと判断される。これは D 区の人漕地点も同様であり、少なくとも 6 層堆積期にはすでに稲作が行われていたと考えられる。

一方、D 区の S435 遺構の最下部 15 層試料において、イネのプラント・オパールは試料 5 より若干得られているのみであり、試料 4 からは得られていない。また、F 区 r 505 地点の最下部 5 層では 4,500 個と 5,000 に達していない。これらの試料の花粉分析結果をみると、イネ科花粉は他試料に比べかなり少なく、水田雑草を含む分類群（オモダカ属、ミズアオイ属など）も検出されていない（花粉分析結果参照）。こうしたことから D 区 S435 遺構の 15 層については稲作が行われていた可能性はかなり低いと判断されよう。また、F 区 r 505 地点 5 層について、イネのプラント・オパールは 5,000 個に近い数値を示していることから稲作が行われていた可能性も考えられるが、花粉分析結果をみると難しいところであり、遺構の状況・土相など多方面における状況を考え合わせ判断されることが望まれる。なお、これらの層において稲作が行われていないとすると、植物の根や動物（ミミズなど）などの攪乱により上位層よりイネのプラント・オパールはもたらされたと推測される。

## 5. 遺跡周辺のイネ科植物

イネ以外ではネザサ節型が最も多く検出されており、このネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）は稲作が予想される耕作地周辺の開けたところや林縁部に生育していたと推測される。また、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）も同様なところでの生育が考えられ、ネザサ節型のササ類とともに草地的景観を見せていたとみられる。一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していた森林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。ヨシを代表とするヨシ属は稲作地周辺の水路などに、またシバ属は畔などに生育していたであろう。なお、キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、ここでは稲作が予想されることから稲作にともなう雑草と考える。

## 引用文献

- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)——数種イネ科植物の連続体標本と定量分析法——, 考古学  
と自然科学, 9, pp. 15-29.
- 藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用——先史時代の水田址探査——, 考古学ジャーナル, 227, pp. 2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)——イネ (*Oryza*) 属植物における機動細胞壁残体の形状——, 考古学と自然科学, 11, pp. 9-20.

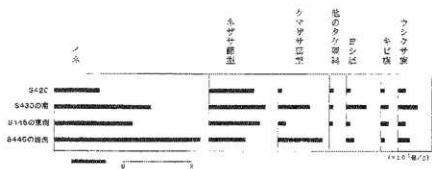


図1 D区互試料のプラント・オパール分布図

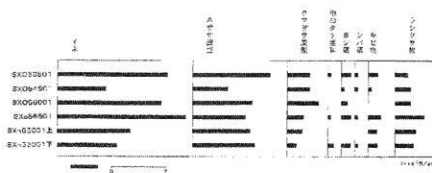


図2 E区平面試料のプラント・オパール分布図

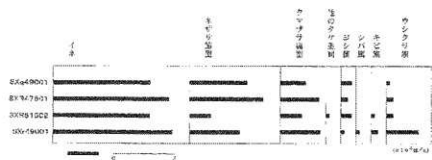


図3 F区平面試料のプラント・オパール分布図



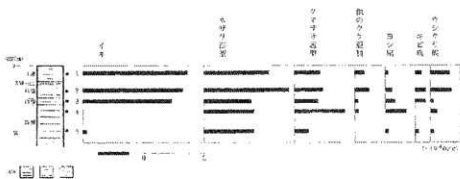
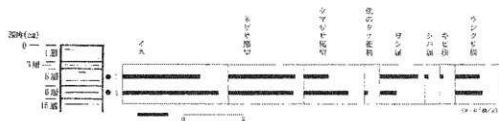


図4 D区S435地点のプラント・オバール分布図



39 -



図5 D区大溝 (SOT 435) 試料のプラント・オバール分布図

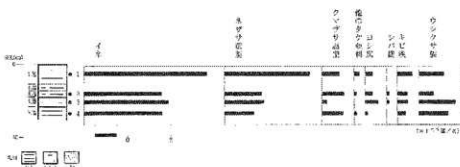


図6 E区P555地点のプラント・オバール分布図

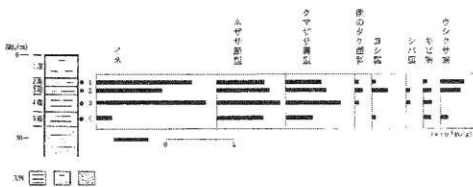
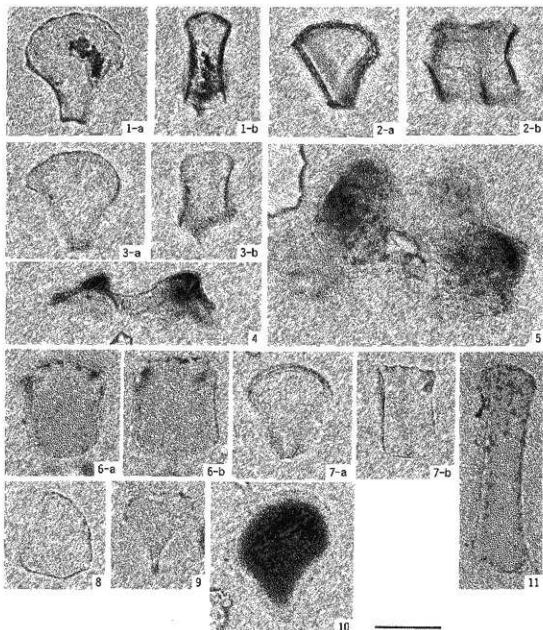


図7 F区P505地点のプラント・オバール分布図

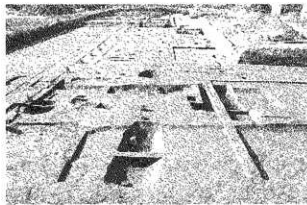


図版 千尋寺遺跡のプラント・オパール (scale bar: 30  $\mu$ m)

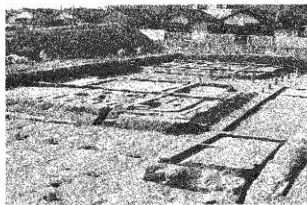
- 1-a, b: イネ (a: 断面, b: 側面) 1, 2: S 435-7, 3: 大葉-1  
 4, 5: イネ籾殻破片 4: S 435-1, 5: S 435-3  
 6: キビ族 (a: 断面, b: 側面) S 435-8  
 7: スザサ科 (a: 断面, b: 側面) S 435-4  
 8: クマササ属 (断面) S 435-3  
 9: シバ属 (断面) 大葉-1  
 10: ミサ属 (断面) S 435-1  
 11: ウシクリ族 (断面) S 435-1



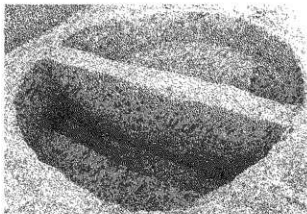
A区 全景 (西から)



全景 (東から)



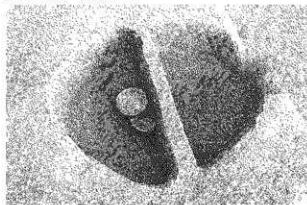
廃煙 A-1・A-2・A-3 (北東から)



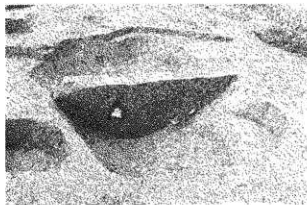
SEE 40001 (南東から)



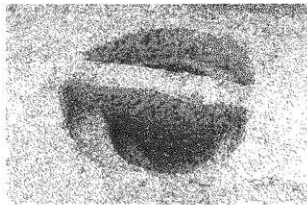
SKD 37001 (南東から)



SKD 35001 (北西から)



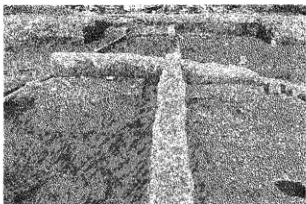
SKD 39006 (南東から)



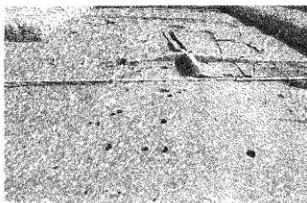
SKD 40002 (東から)



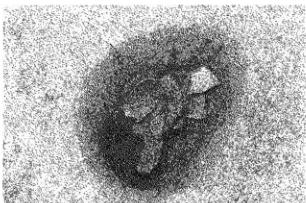
B区 島畑 B-1 (南東から)



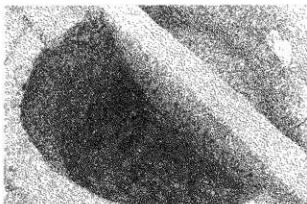
島畑 B-1 の下 遺物出土状況 (南から)



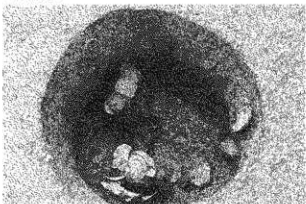
箱物跡 (SB 01) ・杭列 (西から)



PK 39501



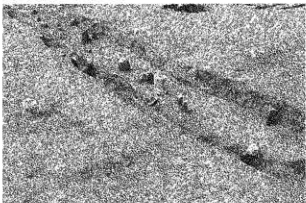
SEK 38101 (南東から)



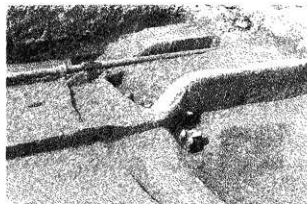
SEJ 37501 (北から)



SDL 37001 ・ SDK 37501 ・ SDK 37502 (北西から)



SDK 37502 (北東から)



SDJ 33501 (東から)



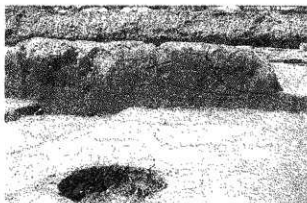
SKk 33501 (南東から)



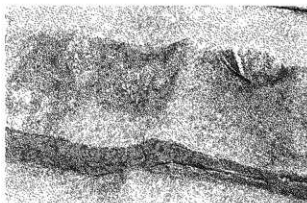
SKk 33501 (南西から)



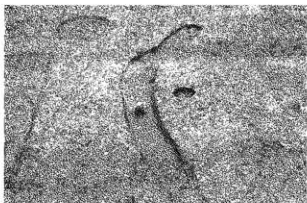
SKk 33501・SKk 33502 (南から)



C区 島畑 C-1 土層断面：SDo 42001 付近 (南から)



島畑 C-1 稲穀等出土状態



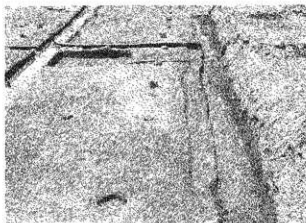
SDo 42001 (南から)



SXP 42501 など (南から)



SDp 41501 (南から)



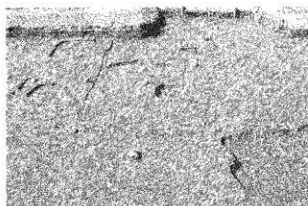
SDO 43002 (東から)



D区 全景 (北東から)



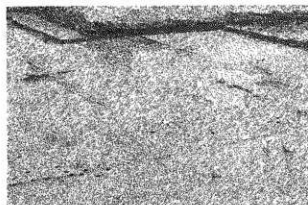
全景 (西から)



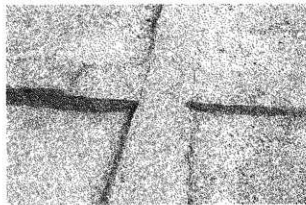
SXS 42001 等 (南から)



坑列：作通 (西から)



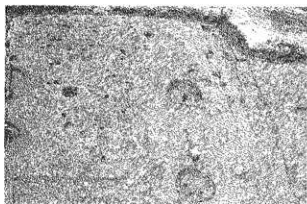
SXS 43501 など (西から)



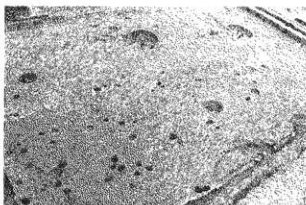
SXS 43501 B 西側趾跡 (南から)



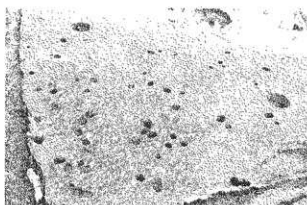
E区 全景 (東から)



西半部全景 (東から)



西半部全景 (南西から)



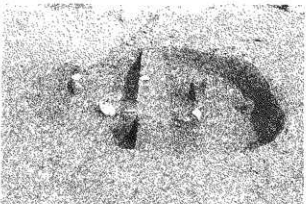
柱穴群 (北から)



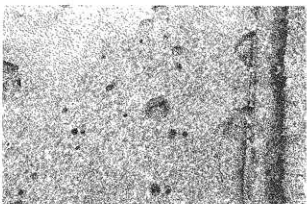
SdN 57001 など (南西から)



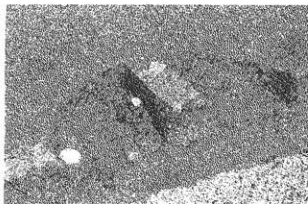
SdN 53001・SdN 57001 (北西から)



SKo 55501 遺物出土状況 (北から)



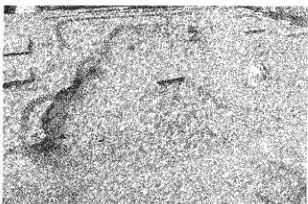
SEP 52001・SKP 56301・SKP 52502 (西から)



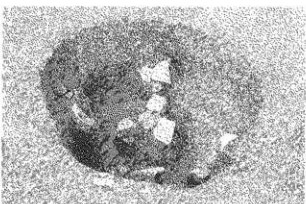
SEP 58001 遺物出土状況 (西から)



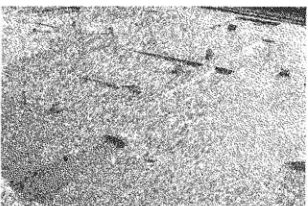
SKP 56501 (東から)



SKn 54001・SKn 54502 など (南東から)



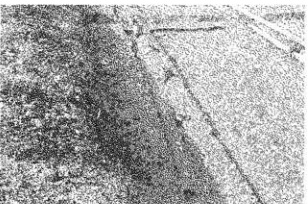
SKO 57001 遺物出土状況 (南から)



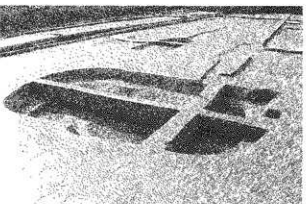
F区 SDq 49001 A・49001 B (北西から)



SDr 52501 (南東から)

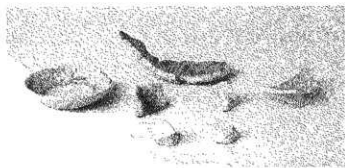


SDr 52001 (東から)

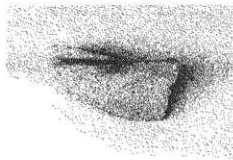


SXR 5001 (北東から)

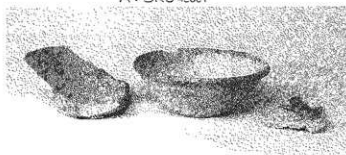




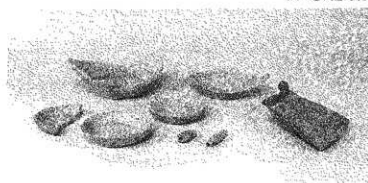
A : SKD 33006



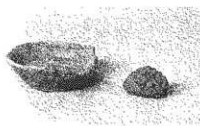
A : SKe 42501



A : SKD 33501



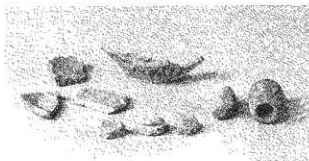
A : S0d 3701



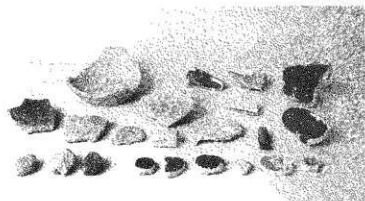
A : PD 33501



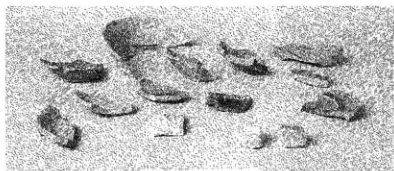
A : S0d 3701



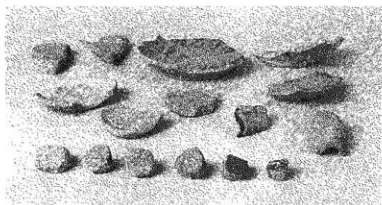
A : SXd 3702



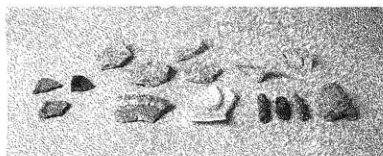
A : 高畑 A-i



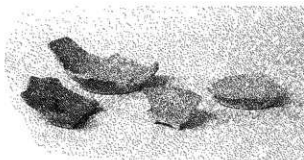
A: 扁烟 A-2



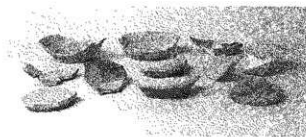
A: 扁烟 A-3



A: 水田・床土



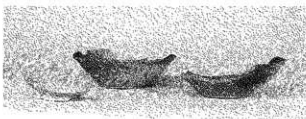
B: 炭化物付近



B: 炭化物



B: 炭化物



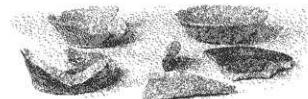
B: SEK 38101



B : SE.i 38501



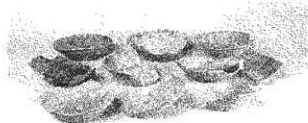
B : SEJ 38501



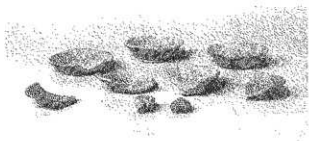
B : SKk 38501



B : SKk 38501



B : SKk 38502



B : SKk 38502



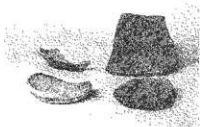
B : SDJ 38501



B : SDJ 38501



B : SDK 37502



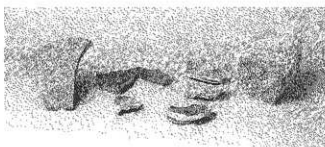
B : PK 38502



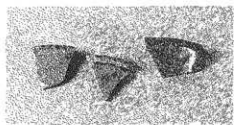
B : SDK 37502



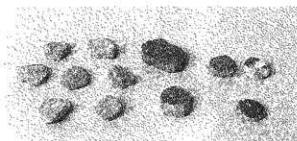
B: SXJ 33C05



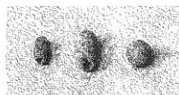
B: 高野B



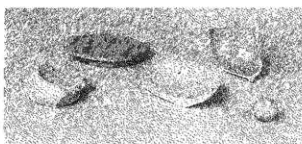
B: 水田・床土



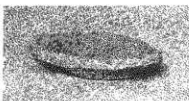
B: 水田・灰土



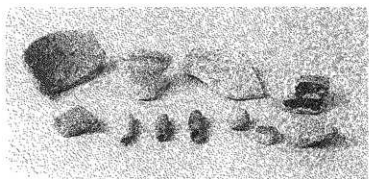
B: 水田・床土



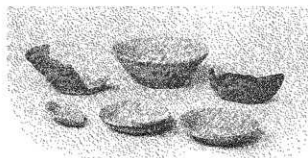
C: 水田・床土



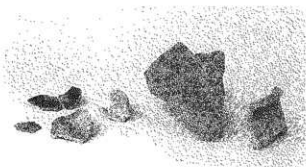
C: SDo 4001



□区



E: SKo 55501



E: SKo 55501



E: SKP 56501



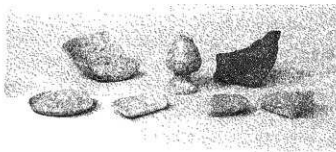
E: SKn 54001



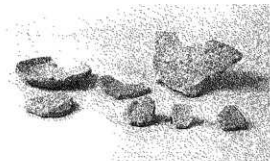
E: SEO 56001



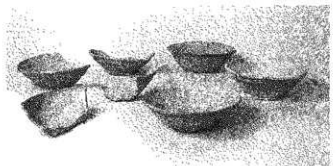
E: ビット出土



E: SKO 57001



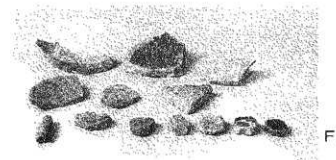
E: SXO 56001



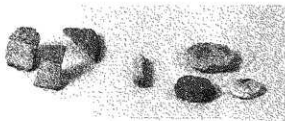
E: SDn 56001



E: SDn 57001



E: 水田・栗土



F区

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	まいごうふんかざいちょうきほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	千音寺遺跡 (第1・2次)							
巻次	35							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	47							
編著者名	山田敏一・野口泰子							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052 823 3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052 972 3268							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千音寺遺跡	名古屋市 中川区 富田町大字 千音寺	23100	13-15	35°	136°	(第1次) 1998.11.9	約1,800	市営住宅 建設
				09°	48°	~1999.3.19		
				40°	40°	(第2次) 1999.5.17 ~1999.12.24	約3,700	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千音寺遺跡	散布地	古墳~室町	溝、穴	山茶碗		中世の屋敷地		

名古屋市文化財調査報告 47  
埋蔵文化財調査報告書 35

千古寺遺跡 (第1・2次)

2000年3月31日発行

編 纂 名古屋市見晴台考古資料館

名古屋市南区見晴町 47

TEL 052-823-3200

FAX 052-823-3223

発 行 名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸二丁目1番1号

印 刷 鐘クイックス

